

FUTABASHA FANTASY NOVEL SERIES

[小説]

High on one thousand years ago, a fearless warrior bearing a sword of light destroyed the Prince of Darkness, bringing peace to the people of the Hyrule regions. It is from that very point that our story takes its beginnings.

ゼルダの伝説

Our tale is that of a young boy who was raised among a tribe of Habbits. Link was the name of the child and it is he who is the hero of this new tale.

【黒き影の伯爵】

AUTHOR AKIO HOSUCHI

樋口明雄



Scanned by Melora for History of Hyrule

historyofhyrule.com
melorasworld@gmail.com

Hey everyone! I'd personally be really happy to see you make scanlations or take portions of this and make fun things and posts with it. The only things I ask are:

1. Try to link back to **historyofhyrule.com**, somewhere, somehow, for credit. This is so people can find more info and other works, reach me if they have questions, or want to contribute other content. It's actually how I've found out about so many of these things and been able to get them to you in turn.

2: Please don't just re-upload the whole set somewhere else. This is in case it's re-released officially so I, and my site, don't come into conflict with any publishers or artists for making scans. (Or, if you do use the whole set, because you've made scanlations, just don't use them commercially and take the full set of my scanned images down if you ever hear about a re-release.) In the 20 years I've been doing this I have never once left scans up if something comes back into print again. I only do the scanning work I do because, as an enthusiast, I don't want something that is actually out of print and rare to be lost forever.

Thank you for understanding!
-Melora



LEGEND OF ZELDA

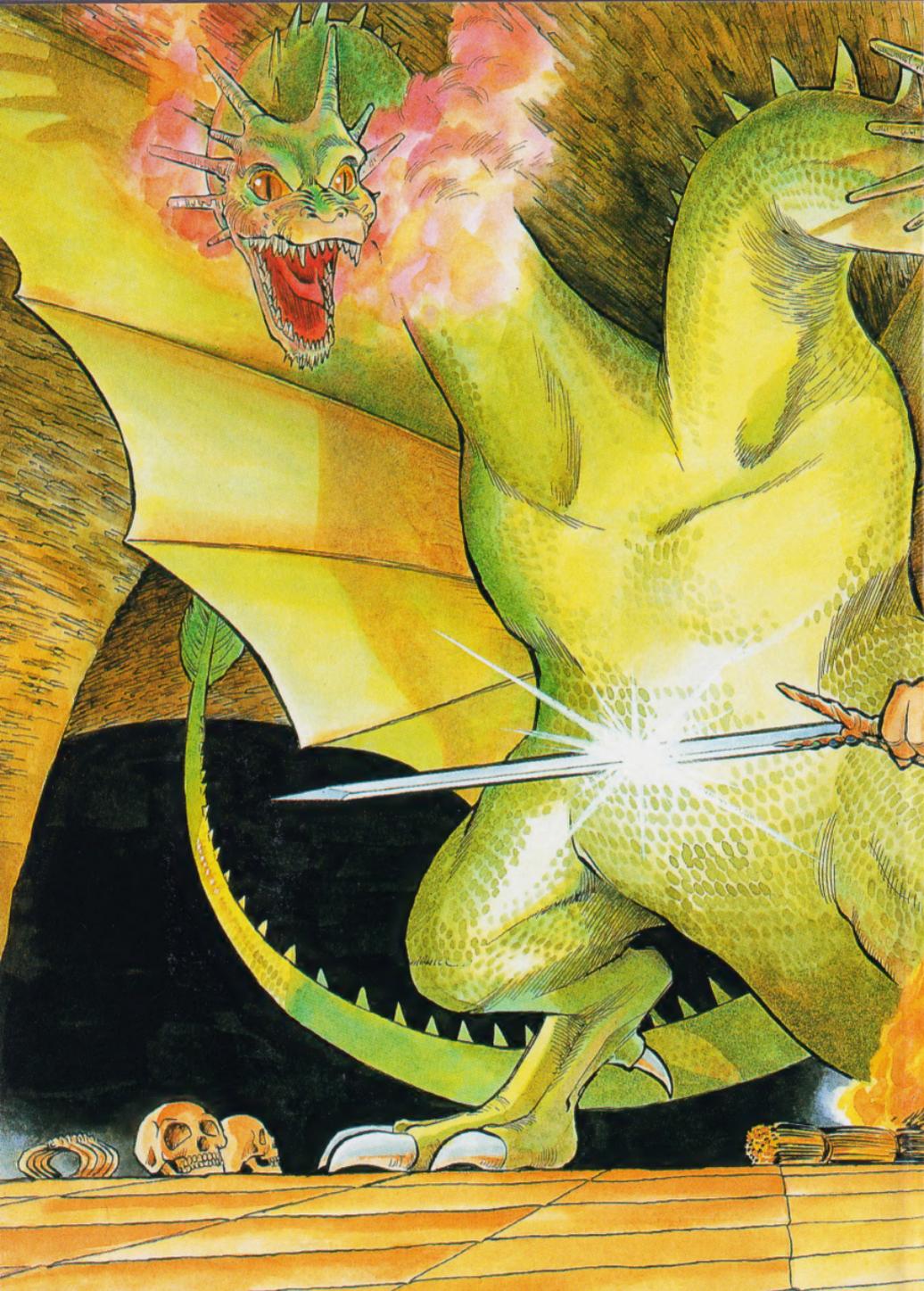
[THE HYRULE FANTASY]

Nigh on one thousand years ago, a fearless warrior bearing a sword of light destroyed the Prince of Darkness, bringing peace to the people of the Hyrule regions.

It is from this very point that our story takes its beginnings.

Our tale is that of a young boy who was raised among a tribe of Hobbits. Link was the name of the child and it is he who is the hero of this new tale.





全身を覆う分厚い鱗は、松明の明かりを反射させてきらきらと光り、かっ
と開かれた口から、すさまじい熱気を漂わせながら炎がちらちらと漏れ出している。



マイアは涙を拭きながら立ち上がり、立ちすくむ老婆を助けて走り続けた。深い森の奥に入ると、やがてふたりを静寂が押し包んだ。

ゼルダの伝説

黒き影の伯爵

樋口明雄

カバーイラスト／藤原カムイ

口絵・本文挿画／伊藤伸平[Ⓐ]

装丁・本文デザイン／広井一夫・松岡裕典 [NEXT]

編集・制作／スタジオ・ハード

エピソード ■	247
PART 6 最後の戦い ■	217
PART 5 再会 ■	185
PART 4 試練 ■	143
PART 3 闇の地下迷宮 ■	99
PART 2 魔の領域 ■	41
PART 1 旅立ち ■	9
プロローグ ■	5

主人公。妖精ホビット族の村で育てられた人間の男の子。〈知恵〉
のトライフォースを探し出し、魔王ガノンを倒すための旅に出る。

ゼルダ姫 ■
ハイラル地方のアッサム国王ウイルヘルム三世のひとり
娘。十二歳だが、すでに王位継承者としての風格を持つ。

ファニー ■
有羽族の妖精の少女。魔王の呪いに捕らえられていたところをリンクに助けられ、旅のお供に。治癒の呪文が使える。

リユグエル伯爵 ■
魔王ガノンにさらわれた
ゼルダ姫を助ける謎の男。

魔王ガノン ■
一千年の時を破り復活した悪の魔王。〈夜のもの〉
もを率い、この世を再び闇に封じ込めようとする。

登場人物 ■ 紹介

PROLOGUE

プロローグ

『人々がまだ妖精たちとともに暮らしておった時代。

このハイラル地方はまったく平和な土地じゃった。人々は畑を耕し、家畜を飼い、また商い（あきな）をしながら、営々として静かな生活を営んでおった。

妖精たちは人間と仲良くつきあい、互いの領土を荒らさぬようにしとった。

もちろん、人間同士の大きな戦（いくさ）もあつた。

人間が集まれば家族ができ、家族が集まれば村ができ、村が集まれば国になる。

国の長は他の国を攻め落として領土を奪（うば）おうとし、血で血を洗うような戦となつた。ハイラルには三つの大国があり、それぞれの国は城郭（じやうかく）を高くし、武器を発達させながらしのぎを削（けず）り合い、時として互いに攻め合つていたものじゃ。

度重なる戦（たびかさ）で、国土は荒れ放題に荒れた。

歴史のどのページも、人々の血で塗（ぬ）られておるようじゃつた。

やがてひとつの国が滅（ほろ）び、もうひとつの国も平定され、三つの国はひとつになった。

そうして人々の望んでおった平和は、ようやくこのハイラルに訪れた。

何百年もの悠久（ゆうきゆう）の時間が流れた。

平和はまだ続いておつたが、いつしか人々は新たな脅威（きようゐ）にさらされ始めた。

〈夜のものども〉と呼ばれる魔族どもじゃ。

地下より這い出した忌まわしき魔物どもが、森や砂漠で人々を襲い始めた。何度も征伐隊が城から出されたが、彼らの中で戦果を上げて生きて還る者は少なかった。〈夜のものども〉は、太古の時代、この世界を支配しとつた生き物じや。その魔王はおそるべき魔力によつて絶大なる権力をふるい、人間や妖精たちを餌食にしとつたと聞く。

以来、ここは魔界と人間界が混然と入り乱れる恐ろしい世界になつてしもつた。街や村は魔物どもの襲来を恐れて、かつての戦以来、堅牢で高い塀を再びめぐらし、あれほど頻繁に行き交つておつた旅人の姿もめつきり見かけなくなつた。

じやが、魔王の支配は長くは続かなかつた。

光の剣を持つひとりの勇者が現れ、魔王を打ち倒したのじや。

こうしてようやくハイラルの王国に、真の平和が訪れることとなつた。

あれから一千年。

そう。まさにちょうど一千年目のことじやつた。

これはひとりの少年の話じや。

少年はホビット族の村で育つた。

ホビットは山間の小さな村に棲む妖精の仲間じや。樵のように木を切り倒し、家を作り、狩猟を

して静かに暮らしておった。

ある時、たまさかこの国にやってきた旅の男とその幼おきなご子が、どこかで魔物どもの一団に襲われ、半死半生で森をさまよっておった。それを助けたのがホビットの村人たちでな。旅人と子供は村に運ばれた。ホビットたちの献身けんしんの介抱かいほうにもかかわらず、旅の男は命を落とした。じゃがその幼子だけは何とか命をとりとめたのじゃ。

その子の名前がリンク。

そつ。これからわしが語る新しい伝説の英雄の名前じゃよ』

PART 1

旅立ち

アッサムという街がある。

ハイラル地方でいちばん大きな街であり、国王の直接の統治領でもある。

緩やかに蛇行する大きな川の畔にあり、ホーリーマウンテンと呼ばれる聖者たちの住む山脈を遠く望む。アッサムはハイラル地方唯一のオアシス、と旅の吟遊詩人が詠ったほど、ここは美しい街だった。

旅人の交易地であるため、アッサムの街は常に活気に満ちていた。

石造りの無数の建物が屋根や尖塔を空に向けてそびえ立たせ、石畳の街路は人々の往来で賑わっている。目抜き通りには露店が立ち並び、肉や野菜、そして酒を売る商人たちのイキのいい声があちこちで聞こえていた。

そんな人々を押し分けるようにして、ひとりの男が走っていた。

古びた礼服に、革のブーツ姿というところを見ると、街の商人や旅人ではない。何かあったのか、顔一面に汗を浮かべ、はあはあとおえぎながら往来をゆく人々の間を縫って走り続けた。

やがて通りを抜けると、街の向こうの小高い丘の上に大きな城が見えてきた。
大きな、というのは妥当な表現ではない。

目を見張るほど巨大な城である。

城壁のまわりに堀割りをめぐらせ、内壁は高く無数の鋸歯状狭間や射眼が見られる。跳ね橋を

渡った先、落とし格子ごうしの向こうには、それは巨大な城塞じやうさいがあつた。尖塔せんとうは巨大な主塔を中心にして、無数の小塔こたが矢衾やぶすまのように天を突き刺している。

長い歴史の中で幾たびかの戦いくさを経て、泰然たいぜん自若じやくとして立ち続けてきた難攻不落の城、それがこのアッサム城であつた。

走る男は堀割りにかけられた跳ね橋を渡り、巨大な門扉もんひの前に立つふたりの門衛の前でかすいた。門衛はいずれも屈強な男。腰に大振りおほぶらの剣を差し、長大な槍を持っている。その前で、男は息も絶え絶えにこう言った。

「王に……お目通りを」

「何者だ？」

いぶかしげな顔で誰何すいかする兵士の前で、男は肩を揺らして息をしながら答える。

「ルカ村よりの使者にございます」

一瞬、顔を見合わせたふたりの門衛だが、

「しばし待たれよ」

ひとりが門扉の向こうに消えた。

焦燥しやうそうの中で男が長い時間の経過たを堪え忍んでいると、さっきの門衛がやってきて、男を手招いた。

「王が面会を許すそうだ。わしについてこい」

巨大な門扉が開かれ、男は場内に招かれた。

中庭を通って城塞への入り口から中に入ると、赤い絨毯の敷きつめられたただっ広い通路がある。その突き当たりの階段を幾重にも折れながら昇る時、男は何度も脚を折って倒れそうになった。

「おぬし、大丈夫か？」

門衛の兵に助け起こされると、男の脇腹にかすかに血がにじんでいるのがわかる。

「けがをしているのか……？」

男は兵士の手を振りはらうように、自力で階段を昇り続けた。

さて、昇りつめたところにある王の間で、大柄で威厳に満ちた城主が、玉座に座って彼を待っていた。年齢のころは四十を過ぎているか、彫りの深い精悍な顔に口髭をたくわえ、黒い髪を耳の後ろに撫でつけている。

ウイルヘルム三世。ハイラルの国を治める国王である。

「ルカ村からの使いと聞くと、何事じゃ？」

王に問われ、彼は絨毯の上にひざまずいた。

「一大事にございます。わが村が、魔物どもによって滅ぼされました」

「なに？ 魔物とな」

使いの男は無念の表情で顔を上げる。

その魔物と戦ったためであろうか、脇腹に濃くにじむ血の色が、ますます大きく広がっている。

男は苦痛に顔をゆがめながらも、王の前で姿勢を崩そうとはしない。介抱しようとして手を差し伸べる兵士を振りはらい、彼はあえぎながら続けた。

「——ガノンと名乗る魔王の手のものでございます。牙を持つもの、翼を持つもの、忌まわしき〈夜のものども〉が、王の所領であるこのハイラルを侵略しようとしているのです」

「ガノン……、あの太古の昔から人々に恐れられたという魔王ガノンのことか？」

それはかつてこの世がまだ闇に覆われていたころ、ハイラルをはじめ、多くの地方を支配し、人間を思うがままに狩ってきた魔物どもの王の名であった。この旧支配者たる魔王は、伝説に詠われたある英雄によって、今より一千年の昔に北限のかなたにある氷の下に永遠に閉じこめられたという。

まさか、そのガノンが復活したというのか。

男がやってきたというルカ村は、ハイラルの北に位置する小さな寒村だ。

ガノンに操られた魔物たちの群れは、その村を襲ったのだった。人々は次々と魔物の餌食となり、殺されていった。男は村のただひとりの生き残りだったのだ。

「ガノンは大群を率いて……この国を滅ぼしにやってきました。トライフォースを……」

そう言いかけるなり、男は口から血を吐いてその場に倒れ伏した。

「しっかりしろ！」

二名の兵士が助け起こしたが、彼はすでに絶命していた。

血に濡れた脇腹に、太い刺のようなものが刺さっている。引き抜いた兵士がそれをかざし、驚愕の眼差しでつぶやいた。

「これは……テクタイトの牙です」

それは旅人を襲って生血を吸うといわれる、巨大な蜘蛛の怪物の名前である。だが、テクタイトは人里離れた砂漠にしか棲みつかない。山間にあるルカ村の人間が襲われるはずはなかった。

王はふいに玉座より立ち上がった。

「ジュゼツペ！ ジュゼツペはおるか？」

「ここにおりまする」

広間の入り口に立つ年老いた近衛兵の長が、王の前まで進み出て片膝をついた。

王がまだ幼少のころより、ずっと側近を務めていた白髪の偉丈夫だ。ひと目で一騎当千の強者とわかる、それは大きな男であった。左目から鼻の上を斜めに走る傷は、歴戦で負った古傷のひとつであろう。

「魔王が国に攻めてくる。トライフォースを守らねばならん。ゼルダはいずこじゃ?」

「東の塔の御部屋におられます」

「妃のヨハンナが死んでからは、トライフォースを守る力を持つ者は、娘のゼルダしかおらん。ジュゼツペ! どんなことがあるうとも、東の塔におぞましき魔物どもを入れてはならん。よいな?」

「御意にございます」

老練の兵士がうなずいた時、ふいに城の外がにわか騒がしくなった。

驚いた王が窓に走った。

身を乗り出してみると、中庭に大勢群れた兵士たちが、空を見上げて騒いでいる。

つられるままに上空を降り仰ぐと、国王ウイールヘルム三世は天空におそるべき光景を目撃した。

眼前に黒雲が広がっていた。

それは北の山脈の上空から徐々に広がり、今や空の三分の一を覆うほどになっている。しかも雲はまるで生きているかのように形を変え、すさまじい勢いで増殖しながら、このアッサム城を目指して迫りつつあるのだ。

しかも、見よ。

その不気味な黒雲を背景に、さながら雲霞の大群のごとく真つ黒い風がやってくるではないか。

よく見ればわかる。それは羽や翼の生えた魔物どもの大群なのであった。

「へ夜のものども」の軍勢が襲ってくる。一刻の猶予もないぞ！」

王が振り返りざま、部下の兵士たちに叫んだ。

「——伝令を放って、街の民を避難させよ！ 城門を開いて、なるべく多くの人間を城内へ避難させるのだ。城へ来られぬ者は、手近な家の地下室に隠れろと伝えよ。決して往来に出てはならん！」

兵たちは蒼白な顔で王の間より去っていった。

まずはアッサムの街の人間を避難させようとする、これはウイルヘルム王の心遣いではある。武器を持たない街の人々は、魔物に抗すべき手段はない。たとい家の扉を閉ざしても、忌まわしき魔の使いどもは、難なく家屋に侵入し、人間たちをその脛あぎとにかけるだろう。もつとも、このアッサムの城として、安全な場所とはいえないのだが。

城からの伝令を待つまでもなかった。

アッサムの街の人間たちは、黒雲を背景に雲霞のように押し寄せてくる真つ黒い魔物たちの大群を目撃し、悲鳴を上げながらわれがちに逃げ始めた。往来を右往左往しながら商人や旅人たちは走り出し、家々は扉や窓を音を立てて閉ざす。

城は跳ね橋を降ろし、街の人々を大勢迎え入れた。同時に、城塞の狭間はざまという狭間に兵士たちが

立ち並び、天空より襲い来る魔物に向かって、それぞれの弓弦ゆづるを引いた。

宙を漂う黒煙のごとく、群れをなしてアッサムの上空を舞っていた魔物の大群は、烟を襲うイナゴの群れのように、街に向かって降下し始めた。

不気味に響く羽音や羽ばたきの音。けたたましい咆哮ほうしょう、笑い声。あたりは瞬またたく間にこの世ならぬものどもの跋扈ばつこする世界と化した。

逃げまどう人々に飛びかかるもの。

閉め切った窓をぶち抜いて家屋に侵入するもの。

街のあちこちで人間たちの悲鳴が聞こえ、それは血まみれの殺戮さつりくシーンにつけられた伴奏のように長々と続いた。鋭い二本の牙を持つ魔物に捕らえられた者を助けようとした者は、背後から襲ってくる別の魔物の放った炎の球の直撃を受け、火ダルマとなった。部屋に侵入した羽を持つ魔物から逃げて、かろうじて地下室へ身をひそめた者は、突如として床を破って出現した軟体動物のような化け物の触手に捕らえられ、地中深く引きずりこまれた。

アッサム城でも、惨劇さんげきは起こっていた。

待ちかまえていた兵士たちの武器は、奴らに対してまるで力を発揮しなかったのだ。

宙を舞った矢は、魔物の躰からだに当たるなり、折れ曲がって落ちた。剣は奴らの甲冑かちゆうのような皮膚ひふに跳ね返され、あまつさえ砕け散ってしまった。あらゆる武器が通用しないとわかると、兵士たちは

わつとばかりに逃げ出すが、その背後から情け容赦なく魔物どもが襲いかかった。

城内にある東の塔は、唯一魔物に蹂躪されていけない場所とってよかった。

甲冑を身にまとい剣を携えた近衛兵長のジュゼツペは、ふたりの部下とともにゼルダ姫を守るようにして彼女の部屋の中央に陣取っていた。城のあちこちでは、惨殺される人々の悲鳴が響きわたり、文字どおりの阿鼻叫喚の地獄と化している。

ゼルダ姫は弱冠十二歳になったばかりの少女である。

国王ウイルヘルム三世の、たったひとりの娘。そして王位継承者だった。

彼女は背もたれの大きな椅子に毅然として座り、自分用に誂えた戦闘服を着こみ、膝の上にふたつの小さな木箱を乗せている。この箱の中身が何であるか、アッサム城の中でも知っている者は少ないはずだ。

ふたつの木箱には、それぞれ三角錘の形をした黄金色の結晶石が入っていた。

〈力〉のトライフォースと〈知恵〉のトライフォース。

それらの宝石は神の石である。〈力〉を持つ者には、世界のすべてを制する強大なパワーをもたらすといわれ、また〈知恵〉を持つ者には、過去、現在、未来における、世界のすべての真実を知ることができるといわれている。だがこれらは双方をそろえていなければ、何の効力もないただの石である。

トライフォースはこれまで使われることなく、アッサムの王家に代々伝わる宝物として嚴重に保管されていた。このふたつのトライフォースで万能のパワーを身につけた者はいない。人間がこの石の力を得ると、とんでもない報い^{むく}が訪れるからだ。もともとが神の石ゆえに、人間の手には負えない代物^{しろもの}だったのである。

そのトライフォースが入った箱が、今、ゼルダ姫の膝の上にあった。

ガノンの企み^{たくら}は明白だった。あの魔王はトライフォースを奪い去り、ハイラルの国を文字どおりの魔界にしようとしているのだ。それだけは何としても防がねばならぬ。

「姫。そこの隠し扉からお逃げください」

ジュゼツペが椅子の背後にある壁を指差した。隠されたスイッチの操作で、壁の一部が割れて地下へ降りる階段があるのだ。通路は城を出て、遠くの森の中まで続いているはずだった。

だが、ゼルダは首を振る。

「私は逃げません。兵たちや城下の人々を置いて、ひとり逃げるわけにはゆきません」

「ですが、魔物どもはすぐにここへ押し寄せてきます。われわれだけではあなたを守る術^{すべ}がありません」

近衛兵長に言われて、ゼルダは背後の兵士のひとりを振り返った。

「では、インパをここへ呼んでください」

そう言った時、部屋の扉がすさまじい音を立ててゆがんだ。

分厚い木造りの扉の真ん中に大きな穴が開き、毛むくじやらの甲殻こうかくに覆われた太い前足まへあしが飛び出してきた。扉が悲鳴を上げ、めりめりと崩れていく。

「姫！ お気をつけなされ。押し入ってきますぞ」

ジュゼツペの声と同時に扉が木こっ端はを飛ばして砕け散り、無数の魔物どもがどつと部屋になだれこんできた。兵士ふたりが剣を抜いてかかっていくが、たちまちのうちには鋭い鉤爪かぎづめにはさみつけられ、あるいは触手に巻きつかれて捕らえられる。一瞬後、兵士たちの絶叫ぜつきようが部屋に響こだました。

「むう」

ジュゼツペは腰から長大な剣を抜き、手前にいる犬のような顔をした怪物・モリブリンにかかっていった。さすがに百ひゃく戦錬磨せんれんま、強い。怪物は一刀両断。続いて背後にいるイソギンチャクのようなリーバーの触手を薙なはらった。

だが、その怪物の斬り裂かれた体内から逆さかった体液ほしほしに触れた途端とたん、ジュゼツペの剣はしゅうしゅうと音を立てて溶け始めた。リーバーの血は強酸性の液体だったのである。

「くそっ！」

彼はそれを捨てるや、床に倒れる兵士の手から剣を取り、構えなおした。

「姫っ。早くお逃げくだされっ！」

じりじりと後ずさるゼルダ姫の背後、ビロードのカーテンがふいに揺れると、そこから年老いたひとりの女が姿を現した。

「姫様！」

「インパ！」

ゼルダ姫は、老婆ろうばに駆け寄った。

それは彼女の幼少のころからずっと面倒を見てきた、乳母のインパであった。

「トライフォースを！ トライフォースを持って城から逃げて！」

「姫様はいかがなされる？」

「私は戦います。だからその間に抜け道から逃げるのよ！」

その間にも、ジュゼツペは勇猛果敢ゆうもうかかんに剣をふるい、三匹目、四匹目の魔物を倒した。さすがの怪物たちも彼の勢いに押された。雑魚ざごらしい魔物どもが、悲鳴を上げながら外の回廊かいろうに逃げ出す。

「さ。今のうちです。姫。インパ様。お逃げなされ！」

彼が叫んだ時、怪物たちが去っていった入り口から、人影が入ってきた。

とつさに振り返ったジュゼツペだが、その人間を見た途端に安心して剣を降ろした。

ゼルダ姫の部屋にやってきたのは、国王のウイルヘルム三世であった。着こんだ甲冑かちゆうは傷つき、

魔物の血で汚れきっていた。さぞかし壮絶な戦いであったに違いない。

「王様。よくぞご無事で！」

「皆の者も、無事であったか？」

ジュゼツペが王のもとに駆け寄ると、ウイルヘルム三世は娘を見た。

「ゼルダ。トライフォースは私が守る。それを寄こしなさい」

「はい。お父様」

ふたつの木箱を持って王のもとに歩み寄ったゼルダが、それを彼に渡そうとした。

「待ちなれ。姫！」

突如、インパが叫んだ。

「——それは父上ではございませぬぞ」

「何っ？」

ジュゼツペが王を振り返った。

そして、木箱を差し出したゼルダ姫。その双眸そうまうが大きく見開かれた。

「まさか……お父様……」

国王ウイルヘルム三世が、ふいににやりと笑った。そのつり上がった口の端からふいに鋭い二本の牙きばが伸びたかと思うと、甲冑おおに覆われた全身がざわざわと音を立てて揺れ始めたではないか。

着こんだ甲冑のあちこちにひびが走り、次の瞬間、それは粉々に砕け散った。

国王の背中からコウモリのそのような真つ黒い巨大な翼が生え、全身に針金のような剛毛が密生してくる。鋭く尖った耳、らんらんと光る目。そして腰にはその魔力の象徴であるドクロのベルトをしめている。

「きさま！ 何者だ？」

ジュゼツペに問われて、魔物は大きな口を開けて哄笑した。

「わしは魔界の王ガノンだ。お前たちの王はもはや生きてはおらん。そして、姫。わしはそのトライフォースをいただきに来たのだ」

「お父様！」

絶望的な表情を浮かべるゼルダ姫に、ガノンはうひひと笑いながら片手を伸ばした。

姫の両手から、トライフォースの入ったふたつの木箱が奪われた——と、思いきや、とっさにふるったジュゼツペの剣が風を斬り、魔王の手から木箱をたたき落とす。

だが、落ちたのはひとつきりだ。もうひとつはガノンの手の中にある。

ジュゼツペが木箱をゼルダ姫のほうへ蹴って寄こした。

床を滑ってきたそれを、とっさにゼルダ姫が拾い上げる。

「インパ！ これを持って早く逃げるのよ！」

「なかなかの手練。じゃが逃がしはせぬぞ」

そう言つて牙をむき出したガノンに、ジュゼツペが果敢に躍りかかる。下手に構えた剣を、魔王の腹に打ちこもつとした。まるで手応えがない。鋼鉄のような魔物の体である。剣を持ち換え、大上段で打ちかかるが、またも跳ね返されてしまった。

姫は乳母に木箱を渡し、壁に刻まれた彫刻の鳥の像をぐいと片手で押した。

重々しい音とともに、すぐ近くの石扉が上にせり上がり始める。ぽっかりと開いた四角い口の向こうは、真つ暗な闇だ。

「姫様……」

涙に頬を濡らす老婆を見て、ゼルダ姫が笑つ。

「私を信じて。きつといつか平和はもどるわ。さ、早く！」

ゼルダは再び隠し扉のスイツチに触れた。ごとごとと音を立てながら、石の壁が降り始めた。この扉は一度開閉すると、もう二度とは開かない。いかな力を持つ魔物であろうとも、こればかりは破ることのできない頑丈な扉である。

徐々に閉じていく隠し扉の向こうに老婆が消えようとした瞬間、

「おのれええっ！」

ガノンが口を開いた。

鋭い牙の並ぶその口蓋の奥から、すさまじい勢いで紅蓮の炎が吐き出される。それは口を閉じよ

うとする隠し扉の隙間すきまから中に飛びこもつとした。

「危ないっ！」

とつさに自らの身を炎の中にさらしたのは、ジュゼツペである。

おかげで炎は扉に到達せず、かわりに彼の体を生ける松明たいまつと化した。

彼は火ダルマになったまま、剣を構え続けていた。まさに天晴あっぱれとしかいいようがない。命が付き
る前に、彼はゼルダ姫を振り返つた。

炎の中から、老剣士が微笑みかける。

「姫様……何としても生きるので。いつか……あなたを救いに来る勇者が……現れることを信じ
て……」

「ジュゼツペ！」

炎の塊かたまりとなつて、近衛兵長このえ へいちやうは倒れた。

どうん。と、石の扉が閉じた。

老婆が隠し扉の向こうに逃げ延びたのを知つて、ゼルダ姫はひとり端然たんぜんとして立ち上がり、魔王
ガノンを振り返る。もはや何の怯きようた懦なもない。自分を見すえる凜々りんりしい少女の顔に、さすがの魔王
もはつとなつた。

「魔王ガノン。あなたが何を企たくらもつが、必ずや悪は滅び去ります」

しばらく黙っていた魔王が、ふいに口を開いて笑い始めた。

「面白い。お前のような無力な小娘が、このわしを倒せるというのか？」

が、さすがのゼルダ姫。凜然^{りんぜん}として魔王をにらみつける。

「城に代々伝わる伝説にこうあります。忌^いまわしき魔王が復活し、邪^{よこしま}な力を用いて世界を暗黒に包みこむ。だがその時、ひとりの勇者が現れる。勇者は魔王を滅ぼす」

ガノンはまた勝ち誇^{ほこ}ったように笑った。

「わしの手の中には〈力〉のトライフォースがある。わしは今や、無敵の王となったのだ。その勇者とやらのご登場を、楽しみに待つとするか。だが、〈知恵〉のトライフォースもいずれは手に入る」

鋭い鉤爪を伸ばした右手でゼルダ姫の華奢^{きゃしゃ}な体をつかむや、魔王は巨大なコウモリの翼を羽ばたかせ、窓から城外へ飛び立った。

——者ども。たっぷりと人間の肉を味わったか？ では、暗黒の魔城へ帰るぞ。

宙を舞う魔王の声とともに、城内や街で人間たちを襲っていた魔物どもが、いっせいに羽ばたいて飛び上がった。真っ黒い雲霞^{うんか}の群れのように、それらは不気味な羽ばたき音や奇声を発しながら空高く舞い上がり、ハイラルの上空を覆う黒い雲に吸いこまれるように消えていった。

静寂^{せいじやく}の中に、廃墟^{はいきよ}が残されていた。

「リンク、あまり遠出するでないぞ」

水車小屋から出てきた老人が、少年に声をかけた。

アッサムの街から遠く離れた、ここはスターウッドの森に近い深山幽谷しんざんゆうこく。清冽せいれつなせせらぎの流れる谷川に沿って、いくつかの粗末な家が立ち並んでいる。まるで時代の流れに取り残されたような、それは小さな村である。

村の出口に立ち止まって老人を振り返り、リンクと呼ばれた少年はにこりと笑った。

「大丈夫だ、おじじ。森に仕掛けた罠わなを見てくるだけだよ」

緑色の狩猟服に矢筒を斜めがけし、片手に大きな弓を持っている。頭に乘せたとんがり帽子の下、健康そうに膨ふくらんだ頬ほおときらきらと輝くような瞳が印象的だ。妖精ようせいホビット族の村で育てられた、たったひとりの人間の男の子、それがこのリンクだった。

「近ごろは魔物どもがこのあたりをうろつき回るようになってる。くれぐれも気をつけい」

「大丈夫。あんな奴らに取って食われるほど、ぼくはマヌケじゃないよ」

言うなり、リンクは林の中に飛びこんだ。

下生したはえを飛び越えながら木々の間を器用しなはに駆け抜け、高い木立こだちによじ登る。枝にくくりつけていたつた蔦をほどいてしがみつき、一気に枝を蹴けった。ざっと音を立てて宙を舞い、枝から枝へと翔とび移るその姿は、さながらムササビのようである。

スターウッドの森の手前、樹齢を重ねた一本の大きな木の枝の上で、リンクはひと休みする。無数に伸びる枝葉の間から、ハイラルの広大な山野が見わたせる。森や野原の間を緩ゆるやかに蛇行しながら流れる川。その川に沿って点々と散在する小さな村落。だが、遥はるかかなたにある岬が々たる山峰、デス・マウンテンの連なる稜りょう線せんのあたりに目をやった時、リンクは不思議に思った。

空の一点に黒い染しみが浮き出しているように、不気味ぶきみな暗雲が浮かんでいた。蝙蝠こうもりの翼のようにみるみる左右に広がって、内部で雷光がはためいているのだらう、時おり青白い光が雲の下部またたに瞬またたいていた。

リンクはあんな不思議な雲を見たことがなかった。

「ひと荒れくるかな」

彼は村へ引き返そつと、今しがたつかまっていた蔓つるにしがみつき、足場になっていた枝をひと蹴けりして翔とんだ。ふたつ目の枝に翔とび移った時、彼の視界の隅に何かが映った。森の木々の間を走ってくる人影だ。

リンクは蔓を持ったまま地上を見下ろす。

下生えの草に足を取られながらも必死に走ってくる。

それはひとりの老婆であつた。

怪我でもしているのだろうか、左足を引きずるように木立の中を走る。その彼女の顔には、はっきりと恐怖の形相が現れていた。それに気づいたリンクが老婆の背後を見た。

深い森の木立の中から、老婆を追つて姿を現した者どもがいる。

魔物だつた。

毛むくじやらの体を甲冑で包み、耳は尖り、鼻は豚のそののように醜い。そして手に手に槍や弓矢を携え、甲高い奇声を発しながら老婆を追いかけていた。

逃げていた老婆が下生えに足を取られて前のめりに倒れると、先頭の一匹がここぞとばかりに老婆に襲いかかった。無論、彼女には抗する術はない。忌まわしい魔物たちの餌食となるのは時間の問題である。

考えるよりも先に体が動いた。リンクは背中の中の矢筒から一本抜き取り、それを愛用の弓につがえて力いっぱい引き絞つていた。倒れた老婆に手をかけようとしていた魔物を狙い、矢を放つ。鏑がひょうと音を立てたかと思うと、それは狙い違わず魔物の額に深々と刺さつていた。

「ぎゃっ！」

魔物が悲鳴を発して草むらに倒れこむ。

他の魔物どもが、血走った目をひんむいてあたりを見回した。だが、リンクの姿は発見できない。敵が梢こすえの上にひそんでいるとはまるで気づいていないのだ。

その隙すきに、彼は二本目の矢を弓につがえて引いた。

魔物の一匹がようやく樹上のリンクを発見した時、彼はそいつに向けて必殺の一矢を放っていた。豚の鼻をした魔物は、自分に向かってまっすぐ宙を飛んでくる矢を見つけたが、その時はすでに遅かった。逃げる間もなく、魔物は喉のどの真ん中を貫つらぬかれ、その場にどろりと倒れ伏す。

魔物たちは倒れた老婆のことも忘れ、樹上のリンクに向かって威嚇いかくの唸うなりを上げた。

弓矢を持つ者どもが、彼を射落とそうと武器を構えた。だが、リンクはその隙を与えず、梢から梢へと素早く翔び移る。あちこちでざわざわと葉叢はむらを揺らす高木のどこにリンクはいるのか。魔物たちは武器を構えたまま狼狽ろうたいの色を隠せない。

と、ひようと音を立てて飛んだ矢が、また一匹を刺し貫いた。

立て続けに三匹がどつと草むらに倒れると、さすがに魔物たちも怖おじ気づいた。

一匹がくるりと踵かかすを返して逃げ出すや、残りの奴らもわつとばかりに後に続く。全員が一団となつて森に分け入り、すぐに見えなくなった。

あとには三つの骸むくろが残された。

「大丈夫ですか？」



リンクが駆けつけた時、老婆は草の中にうつ伏すようにして気を失っていた。左足には魔物の放ったと見られる矢が刺さり、茨の繁みを駆け抜けてきたのだろうか、顔や手足には無数の引っかけ傷がある。リンクは腰につけていた水筒を取って、老婆の口に水を浸し、そつと飲ませた。

ゆっくりと薄目を開けた老婆が、次の瞬間、はっとなって目を開く。

「どなたか存じませぬが、ありがとうございます」

身を起こした老婆に、少年は笑いながら答える。

「ぼくはこの先のホビットの村に住むリンクです。危ないところでしたね」

と、そのリンクの顔が真顔になった。

老婆が震える手を伸ばし、彼の顔に触ったからだ。

「おお……そなた様は……」

枯れ木のように痩せ細った手が自分の頬に触れるままにし、リンクは目の前で滂沱の涙にくれる老婆を見つめていた。

山の端の向こうに陽が落ちると、ホビットの村の中央広場に松明が灯された。しかし、家々には明かりは点らない。

人々はこぞつて、村外れにある長老の小屋に集まっていたからだ。

小川の畔、大きな水車がぎいぎいと音を立てて回る小屋の前に、総勢三十九人の村人たちがつめかけていた。白髭の長老は人々の前に杖を突いて立ち、その横にリンクがいた。老婆は怪我をしていたため、長老の小屋の中で寝かされていた。介抱しているのは、村医者かいはうの娘のマイアだった。幼いころからリンクと一緒に育ってきた、美しい少女である。

老婆は危篤状態だ。魔物の放った矢に塗られていたとおぼしき毒が、弱りきった体を蝕んでいた。命だけはとりとめはしたものの、予断を許さぬ状況である。たった一度だけ目をさまし、長老に自分の逃避行の一部始終を語った。が、すぐにまた昏睡状態におちいつてしまったのだった。

「あの老婆はアッサムの城からはるばるやってきた」

長老は杖を突いたまま言った。

「——そして老婆を追っておった、モリブリンどももじゃ」

「アッサムといえは、このハイラルでいちばん大きな国だ。民の信望を集めるえらい王様がいると聞く。それが、こんな辺境の村へ何の用なんだ？」

ざわめく村人たちの間から、誰かがそう言った。

「アッサムはもうない」

長老の声に、村人がしんとなる。

「あの老婆の話によれば、暗黒の深淵しんえんより復活した魔王ガノンが、アッサムの街を城ともども滅ほろぼしたという」

途端とたんに群衆からざわめきが起こった。

ガノンのことは、この村でもひとつの伝説となつて残っている。それも畏怖いふすべき対象として、ただ、それだけガノンという魔物は、今もつて人々に恐れられていたのである。

「旅の老婆はアッサムの王女ゼルダ姫の乳母うぼインパと名乗った。聞けば、気の毒なことに、姫は魔王にさらわれたという。ひとり逃げのびてきたのは故ゆえあつてのことじゃが、皆も知っておるとおり、魔物の矢にやられて深く眠りこんでおる。そこでわしは、このリンクをアッサムに遣つかいにやらせうと思つ」

驚いた少年が、傍かたわらに立つ長老を見つめた。

長老は長く伸びた白い眉毛まゆげの下の目を、しばたかかせていた。

「おれたちは森に棲すむ妖精ようせいだ。アッサムの街が滅ほろぼすと、人間がどうなろうと知ったことじゃない。放つておけばよいのではないか？」

村の男が言うのを長老が制した。

「ガノンはアッサムの城から〈力〉のトライフォースを盗み出しよつた。幸い、〈知恵〉のトライフォースはあの乳母によつて無事に城より持ち出され、四つの小片に分けられてハイラルのあちこ

ちへと隠された。この世界が平和を保っておるのは、ふたつのトライフォースの力のおかげじゃというのを、お前たちも知っておるじゃろう？ 残された《知恵》のトライフォースがガノンの手に渡れば、この世は暗黒に閉ざされる」

「おじじ。ぼくは村を出たくないよ」

悲しげに言うリンクに、長老が答える。

「わしらホビット族は、人間たちの街へゆくことを許されてはおらん。じゃがリンク、お前は村で唯一の人間じゃ。お前をおいて他に、アッサムの街へ行ける者はおらん」

しんと静まり返っている村人たちの頭上——確かさっきまで星が見えていたはずの夜空が、いつの間にか漆黒の妖雲に覆われていることに彼らは気づかなかつた。

突如として、すさまじい稲光が長老の水車小屋やその前に集まっている村人たちを、一瞬青白く染め上げたかと思うと、耳をつんざくばかりの雷鳴がとどろきわたった。はっとなって天空を見上げる彼らの表情には、おびえの色がはつきりと窺えた。

「魔界が近づいておるぞ。トライフォースを早く取りもどさねば！」

長老の声が震えていた。

村人たちは、われがちに自分の家へと逃げ始めた。

夜半になつても、雷鳴はやまなかつた。

水車小屋の窓から時おり青白い雷光が差しこみ、かまどの傍らかたわに座る白髭しろひげの長老とリンクの顔を闇の中に浮かび上がらせた。

ふたりの前には旅の老婆ろうばがまだ横たわっていた。裏の小川から水を汲くんできたマイアが、冷たい水に布切れを浸ひたしてから強く絞り、老婆の額にそつと乗せた。インパの意識はいまだにもどらなかつた。この分だと、この先ずつと長い間昏睡こんすい状態が続くのもかもしれない。

マイアは代々村に伝わる薬術すべに長けていたが、それでもこの老婆の意識を取りもどす術は知らなかつた。

長老が立ち上がつて、かまどに薪まきを入れて火を大きくした。

「リンク、わしはお前に隠していたことがある」

しばしの沈黙を、彼のしゃがれた声が破つた。腰をかがめながらかまどに火箸ひばしを差しこむ老人の後ろ姿を、リンクがじつと見つめている。

「——お前の父上からのことづけじゃ。大人になるまで隠しておいてくれと言われたが、もうお前も十二の歳。そろそろ話してもよからう」

インパの傍らつに付き添そっていたマイアが、そつと顔を上げた。

「長老様。あたし、帰ります」

氣を利かせてマイアが言ったが、白髭の老人は首を振った。

「ちよūdōどよい機会じや。マイアも聞きなさい」

「何のことだい？」

土間で膝を抱えて座るリンクがたずねた。

「お前の父上のこと。そしてそのさらなる先祖のことじや」

「ぼくの……先祖」

最後の薪をくべ終えて、かまどの蓋を閉め、長老が向き直った。

「今より千年の昔、あの魔王ガノンがこの世界の征服を企んで、深き地の底より現れた。奴はある場所に安置されておったふたつのライフォースを手に入れようとしたが、危ういところにある劍士によって阻まれた。それが伝説に詠われた勇者、すなわちリンク、お前の先祖のことなのじや」

「ぼくの父は劍士なんかじゃなかった。旅の商人だったはずだよ」

「じやが、勇者の血は絶えることなく続いておる。お前のその体を流れる血も、まぎれもなく勇者の血なのじや」

「そんな……」

呆然とつぶやくリンクの頬を、窓から差しこむ稲光が青白く染める。時を置かずして、激しい雷鳴が水車小屋を揺るがした。

「いつかは村を出てゆかねばならぬ。それがリンク、お前の定めなのじゃ」

悲しげな顔をした少年が、近くにゐるマイアを見つめた。少女は一瞬だけリンクと顔を見合わせた。すぐに横たわる老婆を見下ろし、籠かごに入れていた薬草をその足の傷に当てた。

インパはまだ昏睡こんすいしていた。この調子だと、当分目を覚ますことはないだろう。それはむしろ好運だった。傷が癒えぬうちに目覚めれば、毒がもたらすさまざまな苦痛くるしみに苛まれることになる。

リンクは膝を抱えたまま、前後不覚に寝入る老婆を見下ろしている。

アッサムの王女、ゼルダ姫。魔王からトライフォースを守るために、魔物どもと勇敢に戦ったという。だが、力はつき、彼女もまたひとつのトライフォースと一緒にガノンにさらわれてしまった。

リンクはまだ顔も知らぬその娘のことを思っていた。

夜空にとどろく雷雲のあなた——このハイラルのどこかにある伏魔殿ふくまでんに、ゼルダ姫は幽閉ゆうへいされているのだ。恐ろしく孤独な時間が流れる中、彼女はそれでもいつか自分を助けにきてくれる誰かを待ち続けているに違いない。

少年はそつと立ち上がり、水車小屋の窓から夜空を見上げた。

低く垂れこめる暗雲のそこかしこに、青白い稲光が走っていた。

翌朝、リンクは村を旅立った。

手には愛用の弓矢と一振りの剣。そして盾がひとつ。背負った小さな雑囊には、わずかばかりの食糧と水が入っている。村の出口に、長老やマイアをはじめとして村人たちが何人も立ち並び、リンクの出立を見送った。

ゼルダ姫の乳母インパは、まだ病床に伏していた。

リンクが留守の間、マイアや村人たちが入れ代わり立ち代わりで彼女の面倒を見ることになった。意識さえはつきりしていれば、リンクの旅立ちに必要な、いくつかの貴重な情報を彼に授けることができただろう。だが、リンク自身もそれを知るのは、ずっと先になってからのことだった。

雷は去ったが、ハイラルの空はまだに不吉な黒雲をまとっていた。

風は穏やかで、遙かに望むホーリーマウンテンの方角から吹き降ろしては、野原の草花をそよがせている。

スターウッドの森の入り口にさしかかると、あのインパという老婆を助けた大きな木立の並ぶ林が見えてきた。弓で射倒した三匹のモリブリンの死体はなかった。おおかた猛禽類や森に棲む獣たちによって、きれいきっぱりと片づけられてしまったのだろう。

ただ、魔物たちの持っていた弓矢や剣だけが、草むらや林の下生えの中に無秩序に散らばって落ちていた。

森を抜けると、広大な平原が目の前に開ける。

その平原を緩やかに蛇行しながら流れる川沿いに歩くと、やがてはアッサムの街へたどり着くはずだ。

脳裡を占める不安を振りはらうように、リンクは急ぎ足で歩き出した。

PART2

魔の領域

霧……。

乳白色の濃い霧が、荒涼とした原野を包みこんでいた。

リンクはその中を、ひとり歩き続けている。

草むらも立木も、何もかもが白い闇の中に沈んだシルエットとなってみえる。ハイラルには、このような濃霧はめつたに現れることはない。だからこれも、あの魔王ガノンの魔力ゆえのことなのだろうか。

方向を指し示すものがないため、リンクは文字どおりの五里霧中の旅を続けていた。

足元の道はぼんやりと見えるが、それが一寸先になると白い闇に溶けこんでしまふ。しばらく歩き続けていくと、前方の霧の中に標識らしいものが浮かび上がって見えた。

アッサムの街の方向を示す矢印が描かれていた。

ほっとした矢先、リンクは背後に奇妙な物音を聞きつけて振り返った。

視界ゼロの中に、目を凝らしてみる。

ずるりずるりと、何か重々しいものを引きずるような音。

人間の立てる音じゃない。

そう悟って、とっさに腰の剣の柄に手をやった途端、濃霧の中から伸びてきたものが、リンクの左足に巻きついた。毒々しいまでに真っ赤な色をした、それは丸太の太さほどもある巨大な触手で

あつた。

その体表には、無数の吸盤きゅうばんがある。

巻きつかれた足に、激痛が走った。見れば、リンクのはいたズボンが、白い煙を上げている。吸盤ぶんびつが分泌する酸が、服の生地きじを焼いているのだ。

剣を抜き、触手を斬ろうとした時、濃霧の奥底から数本の触手がずるりと伸びてきた。とっさに判断し、新手あらてを先に斬りつけた。鋼鉄の剣は、いともあっさりとは触手を寸断した。だが、斬っても斬っても、別の触手が伸びてくる。

そうこうしているうちに、リンクの胴体や手足は数本の触手に巻きつかれてしまった。にじみ出した酸が、たちまちのうちにリンクの身体を焼き始める。

苦痛に顔をゆがめながら、

「くそっ！」

なおも剣をふるう。

胴体に巻きついた触手の間に剣先をこじ入れるようにして斬り落とした時、霧の向こうに怪物の本体が姿を現した。丸い大きな胴体に、らんらんと輝くふたつの目と醜しゅうあく悪に突き出した大きな口がある。そしてそれは異様なまでに真っ赤な色をしていた。

オクタロックというタコの化け物である。

かつては海洋に棲む、おとなしい生き物だったという。それがこうして陸上までやってきて、旅人を襲うようになったのは最近のことである。魔王ガノンの呪いの力は、そんな生き物を醜悪な化け物に変えて、ハイラルじゅうにとき放ってしまったのだ。

オクタロックはその柔らかな胴体をくねらせながら、触手で捕らえたリンクを自分の近くへ引き寄せ始めた。かっと開いた巨大な口の奥に、うねうねと動く無数の鬚がある。あそこにのみこまれたら、あつという間に身体が溶け去ってしまう。

引きずられるリンクは、必死に両手を伸ばしてつかまるものを捜し求めた。だが、努力の甲斐もなく、彼の身体は怪物の口にあとわずかというところまで引き寄せられてしまった。

こうなれば、最後の手段しかない。

リンクはイチかバチか、持っていた剣を捨てた。

背中にかけた弓を取り、矢筒から抜いた矢をつがえさま、オクタロックを狙いながら弓弦を引き絞った。らんらんと光り輝く大きな目のひとつを狙って、ひょうと矢を射た。

濃霧を突いて飛んだそれは、狙い違わず、怪物の左目に突き刺さる。

すさまじい咆哮が、白い闇の中にとどろいた。

リンクの身体を束縛していた触手が力を失い、その隙に彼は吸盤だらけのそれらを振りほどいて立ち上がった。大地に落ちていた剣を見つけて拾い上げると、片目に刺さった矢が抜けずに悶え苦

しむオクタロックに斬りかかった。

切っ先が柔らかいものにめりこむ、嫌な感触——。

眉間を剣に貫かれた怪物は、ついに動きを止めた。ぐにやりと形を崩して、巨大なタコが大地に

崩れた。化け物の断末魔である。

リンクはしばし、呼吸を乱しながら立ちつくしていた。

あたりには、切断されたタコの触手と、その切り口から漂う異臭が立ちこめている。

と、彼のすぐ近くで、また物音がした。

ずるりずるりと触手を引きずる音。

霧の向こうから、さらに数匹のオクタロックがリンクめがけて這い寄ってくるのが見える。真っ

白な濃霧に、無数の毒々しい赤色がにじんで見えた。

こっしちやいられない。

「ちくしょう。逃げるが勝ちだっ！」

少年は剣を持ったまま駆け出した。

獲物が逃げ出したとみるや、怪物たちは怒りのあまりに異様な声で叫びざま、いつせいに口をす

ぼめて身を縮めた。と、思いきや、それぞれの口から、青白い火球が飛び出した。

ごう、と音を立てて、リンクのまわりを灼熱の炎の球が掠める。それがぶつかった立木は一瞬

にして燃え上がり、岩はどろどろに溶けた。

執拗に背後から飛んでくる火球が、何度もぶつかりそうになる。

リンクは後をも見ずに、走り続けた。

道を離れ、小川をばしやばしやと渡ると、茨の群生する野原に転げこんだ。身体じゆうを引つかく刺にもかまわず、走り続ける。ただっ広い平地に出ると、遠くに岩山らしいシルエツトが見えてきた。全力疾走でそこまでたどり着き、両膝に手を当てて、せいせいとあえぎながら振り返った。

オクタロックたちが追いかけてくる様子はない。

村からそう遠くない場所に、こんな恐ろしい魔物たちがひそんでいようとは。

少年は、ふと自分の頬を伝う温かい血に気づいた。見れば、手足や顔に無数の傷がある。茨の野原を突き抜けたためだと気づいた。そんな痛みも感じないほど、少年は夢中になって逃げ延びてきたのだった。

リンクは、奇妙な気持ちになった。

ゆっくりと流れる霧の中、白骨のような枯れ木が枝をねじ曲げながら立っていた。ごつごつと荒れた岩地。荒涼とした大地の真ん中に、少年はたったひとりでいた。

「まったく……こんなことになるんなら、出かけてくるんじゃないよ」

リンクはそつと自分の肩を抱き締め、不安げに周囲を見わたした。

ふいに孤独感が襲ってきた。

今までリンクはこんな寂しい気持ちにかられたことはない。いつだって仲間がいたし、彼は誰にも負けたことがなかったからだ。そしていい気になって得意がっていた。

どうしてぼくは、ここにいるんだろう。

やがて、風が吹いてきた。

目の前にわだかまる深い霧が、音も立てずに地面を這っていった。

アッサムは、大きな川の畔ほとりにある。

リンクがこの街へやってきたのは、村を出て五日が経過した日のことだ。

かつては旅の吟遊詩人ぎんゆうしじんをして、ハイラル一の美しきオアシスといわしめたこの大きな街は、今は

もう昔日せきじつの面影おもかげもなく、無惨な廢墟はいきよと化していた。

荒れ果てた街路に無数の鳥が羽を休め、家々には人の生活の気配もない。破れた窓。崩れた煉瓦

塀べい。ひび割れた石畳。そして路地のいたるところには、野鳥に屍肉つばを啄つばまれた白骨が転がっていた。

本当にここが、ハイラルの首都アッサムなのだろうか。

リンクは往來の真ん中に立って、呆然とあたりを見わたしている。

ふいに一陣の風が通りを抜けてゆき、近くの家の扉が、ばたばたと派手な音を立てて踊った。ころころと転がっていく回転草が、横倒しになって無数の果物をまき散らしたままの露店の屋台にぶつかった。

子供のように父親に死に別れてずいぶんと長い。ようやくまた人間に会えると期待があつたが、それも儚い夢だったのか。あの老婆が話したとおり、アッサムは本当にゴーストタウンと化していたのだ。

ふと、遠方を見ると、街路のかなた——朝の濃い靄に霞んで、噂に聞いたアッサム城が見えた。無数の尖塔を天空に向けて突き立てている。ゼルダ姫が住んでいたという城。彼女の乳母インパは、あの城からはるばるリンクたちの村まで逃げ延びてきた。

城へ行ってみよう。

思い立って、彼は歩き出した。

街を見下ろす小高い丘の上に、アッサム城はある。

深い堀割りには、太い二本の鎖で支えられた跳ね橋が落とされたままになっている。橋を渡って大きな城門を抜けると、広い中庭に出た。無数の見張り小塔や絶壁のような胸壁に囲まれたそこも、餌食となった兵士や市民たちが死屍累々と横たわっていた。

城塞の入り口にある落とし格子はなかば引き上げられていて、リンクはそこから城の中に入った。通路という通路は、兵士たちの原形をとどめぬ死体でいっぱいだった。流れた血が床一面にたまり、どす黒い絨毯を敷きつめたように見える場所もある。

敵国の兵を捕らえるや、その首をはね、また死体を杭に串刺しにしてさらしたという無慈悲な太古の王ですら、ここまで残酷な仕打ちはしないのではあるまいか。無論、これは人のなせるわざではない。いわずもがなではあるが、兵士たちを皆殺しにしたのは、ガノンの配下である魔物たちだった。

王の居室だった大広間に足を踏み入れると、そこは凄惨な戦いの場だったのだろう、何人かの兵士たちが折り重なるように倒れ、壁や天井が瓦解している場所もある。

「何者だ？」

突如、背後から聞こえた男の声に、リンクが振り返った。

広間の入り口に、黒衣を着た老人が立っていた。

僧侶であった。

顔の下半分は濃い白髭に覆われていて、口元は厳しく引き結ばれている。その思慮深げな目の奥底には、殉教者を思わせるような燃える炎があった。

「ぼくの名前はリンク。スターウツドの森からはるか山を越えてやってきました」

少年が名乗ると、僧侶はじつと彼を見つめた。

「この死んだ城に何の用じゃね？」

「インパという名の老婆ろうばに、この街のことを聞きました」

リンクの言葉に、一瞬、僧侶の双眸そうぼうが大きく見開かれた。

「そなたは乳母うば様をご存じなのか」

「ええ。モリブリンたちに追われているところを、ぼくが助けました。今は魔物の矢の毒で昏睡こんすい状態じょうたいなんですけど」

「そうか……。で、わざわざこの街に来てくれたのじゃな」

言いながら、彼はリンクに歩み寄った。

少年の前に立ち、まじまじとその顔を見た僧侶が、ふいにあつと言わんばかりの表情を浮かべる。

「まさか……そなたは……」

リンクはしばし啞然あぜんとなって彼を見つめていたが、ふいにあることに気づいた。

自分を見つめる僧侶の目が、あのモリブリンどもから救われた時の乳母インパのそれと同じだったからだ。あの時、インパはリンクの頬ほおに枯れ木かきのような手を当てながらさめざめと泣いたのだ。

スターウッドの森に日が暮れると、文字どおりに森の上空には無数の星々が瞬く。

だが、ハイラルの空に不気味な妖雲が滞空して以来、夜になっても美しい星々が現れることはない。相変わらず低く垂れこめた鋼色の雲がゆっくりと渦巻いていた。

昏々と眠り続けるインパの傍らで暖炉の火を絶やさないうように薪をくべていた長老は、ふとマイアの姿が小屋から消えているのに気づいた。老婆を氣遣って心配げにしばらく見つめていた長老だが、やがてひっそりと水車小屋の外に出てみた。

曇った夜空を背景に、森の影が黒々とのしかかるように見えている。

その手前にある大木の切り株の上に、ホビット族の少女がひとり座っていた。

「どうしたね、マイア」

長老が近づくと、彼女は振り返った。

「何でもないの。ちょっと疲れただけ」

「リンクのことを心配しておるな？」

凶星を指されて、少女はうつむいた。

夜風が音もなく少女の髪を揺らしていた。その白い頬ほおに涙のあとがある。

「長老様。どうしてリンクじやなければならなかったの？」

そう言うことから、マイアは彼の顔を見上げた。

「リンクはあたしと同じ歳。まだ子供なのよ。あんな危険な旅にたったひとりで出すなんて。いくら何でも残酷ざんくだわ」

長老はしばらく黙っていたが、やがてため息をつきながら、どんよりと曇った夜空を見上げた。

「仕方ないのだ。リンクはわしらにはない力を持つておる。あやつは人間じやが、その人間の中でも唯一ゆいいつ〈夜のものども〉を滅ほろぼすべく生き続けてきた種族まっえいの末裔まっえいじや。この世にあの忌いまわしきガノンが復活した今、ハイラルを、いや世界全体を救うことができるのは、あのリンクしかおらん」

「生きて帰ってくるの？」

「それはわからん。じやが、リンクが死ぬということは、この世が再び魔の領域になるということを意味する。だから、わしらは信じるしかないんじやよ。あやつが魔王を退治たいじし、無事に生きてもどってくるのを信じて待つておるしかないんじや」

「残酷な運命……」

「そう。少年のあやつには、ちと荷が重すぎようて。じやが、わしはリンクが帰るのを待つつもりじや」

「じゃ、あたしも待つ」

少女はひっそりと息をついてから、夜空を覆う雲を見上げた。

いつもならば、そろそろ満月なのに、とマイアは思った。ハイラルの上に現れるふたつの月は、今はどちらも真円に近い姿をとっているはずだった。

☆

アッサムの城塞の中ほどに、地下へ通じる秘密の階段がある。

ゼルダ姫の居室からインパが脱出した地下通路もそうだが、このアッサムの城にはいくつもの隠し部屋、隠し通路がある。

城の土台となっている岩盤をくりぬいた通路は狭く、天井は頭を下げねば歩けないほど低い。おまけに足元には泥の混じった地下水が湧き出し、ひどくぬかるんでいる。

初老の僧侶は階段の脇に用意していた松明に火を灯し、リンクを先導して通路を歩いた。時おり彼の手元から滴り落ちる炎が、足元の泥水にじゅつという音を立てた。

「あなたは どうして ぼくを こんな 場所 へ……？」

リンクにたずねられると、僧侶はしばらく黙っていたが、やがてぽつりと言った。

「見せたいものがある」

「え？」

「そなたはまぎれもなく伝説の勇者。あの魔王ガノンを倒すことのできる、ただひとりの戦士じや」

さすがにリンクも辟易へきえきとした顔で困り果てる。

「ぼくはただの人間です。ホビットの村の長老が、この街の様子を確かめるために寄こしただけのことです」

「そうは思えん」

通路の突き当たりまでやってきた僧侶が、そこにある朽ちかけた木の扉とびらを開いた。

扉の向こうにだだっ広い部屋があった。

四方を石壁に囲まれたそこには、大きな祭壇さいだんや巨大な円柱などがある。どうやらかつて地下に作られた大神殿だったらしい。が、今は別の用途で使われているらしい。

リンクは松明の淡い光に照らされる、いくつかの円柱に支えられた高い天井や自分のまわりの壁を見わたして立ちすくんでいた。

そこはまさに芸術の宝庫といってよい。天井を区切り分ける格子目こうしめの中には、数え切れないほどの彫刻画があり、壁にはさまざまな絵画、その手前に整然と並んで置かれているのは彫像であっ

た。

「ここは元々アッサムの王が代々参拝にくる秘密の地下神殿じゃった。それが、いつからかこのよ
うな国中の絵画や彫刻を集めて保管する美術庫になっておった。ほとんどは百年から五百年も前に
描かれたり彫られたりしたものじゃ」

僧侶は一方の壁に松明の明かりをかざした。

「あれを見るがよい」

言われるままに目をやったリンクは、次の瞬間、凝然ぎょうぜんとして立ちすくんだ。

そこに目を見張るほど見事な芸術がある。

壁のほとんどを占めるほどの、横長のタペストリーだった。

それは有史以前から始まる、絵で綴つづられたハイラルの歴史書といってもよい。神に遣つかわされたひとりの聖者が、ハイラルのいちばん最初の王に国を作ることを諭さとす場面。いくつかの戦争。天災。飢饉ききん。そして魔物たちとの戦い。中でもすさまじいのが、巨大な翼つばさを持つ異様な姿をした化け物であつた。

それが無数の魔物たちを率ひきいて襲来し、ハイラルの街や村を焼きつくし、人々を惨殺する場面は
壮絶であつた。

「あれがガノン。暗黒の魔王じゃ」

僧侶が説明した。

リンクが呆然ぼうぜんとなつて、その醜しゆうあく悪な姿に見入つていた。

「そして——」

隣の絵を僧侶が指差した時、リンクはあつと叫んでしまふ。

「あれが〈魔を討つもの〉の勇者じゃ」

それは巨大な翼を広げ、獐猛どうもうに牙を剥き出して襲おそいかからんとする魔王ガノンに向けて、巨大な弓の弦つるを引き絞り、今まさに矢を放たんとするひとりの少年の姿であった。その相貌そうぼうは、そう、まさにリンクのそれとまったく同じだったのだ。

「あれは……ぼくだ」

茫然自失ぼうぜんじしつしたまま、リンクがつぶやいた。

僧侶はそんな少年の横顔をじつと見つめ、微笑んだ。

「そなたはまぎれもなく〈魔を討つもの〉の一族の末裔まつえい。そしてまさにあの勇者の生まれ変わりなのじゃ。そなたはとらわれのゼルダ姫を救い出し、あまつさえガノンの手から〈力〉のトライフォースを奪い返さねばならん。そのためには、〈知恵〉のトライフォースを捜さねばならん。トライフォースなしに、あの魔王を倒すことはできないのだ」

「でも、ぼくにそんな大役は果たせないよ」



リンクはあのおそるべきタコの怪物オクタロックと戦った時のことを思い出した。あの時はすんでのところで殺されるところだったのだ。しかしガノンの配下にはもっと恐ろしい怪物がいよう。そんな奴らを相手に、リンクひとりは何をすればいいというのか。

「そなたにはできるはずじゃ」

じつと見つめる僧侶の前で、リンクは唇をかんだ。

「ぼくにはどうすればいいかわからない。姫様がどこにいるのか、それにあんな恐ろしい魔王に本当に勝つことができるのか……」

「勇者への道に教科書はない。そなた自身の冒険を通して学んでゆくことじゃ」

期待とは裏腹に、僧侶は冷たく言い放つ。が、それは正鵠を得た言葉ではあった。

リンクはタペストリーに描かれた勇者の姿をまた見つめた。

自分とまったく同じ顔の少年が、恐ろしい魔王と勇猛に戦っている。

彼もまた、自分と同じようにひとりで旅をしたのだろうか。孤独や恐怖と戦いながら、どうやってその勇気を身につけていったのだろうか。

ひんやりと張りつめた地下神殿の空気の中で、リンクはまたもひどい孤独感にさらされていた。

「ひとつだけ、そなたに教えてしんぜよう」

僧侶の声に、リンクが振り返った。少年の手に松明を手渡しながら、彼は重厚な声でこう言っ

た。

「この街の南にあるウイジャグムントという名の山の洞窟どうくつに、カシムという仙人が住んでおる。会いにゆくがよい」

「ウイジャグ……ムント」

思わず舌をかみそつになる名前だった。そこにインパが持ち出したというトライフォースが隠されてるのだろうか。

「さ、時は一刻を争う。早くゆくのだ」

僧侶はリンクを神殿の外に連れていった。出口で踵きびすを返したその黒衣の背中に、リンクが声をかける。

「あなたはこんなところに残ってどうするのですか？」

「わしはこの神殿の番人。ここで静かに余生を過ごす。いつか新しい伝説が生まれるならば、それをここに記すためにな」

庄厳そうげんともいえる男の静かな表情を見つめたリンクが、やがてうなずいた。

「またお会いできますね」

「たぶん」

松明を持ったリンクが通路を去っていくと、ひとり残された僧侶は少年のちっぽけな後ろ姿をじ

つと見つめていた。そしてふいに口元をゆがめて声もなく笑った。それはまったく奇妙な感じのする笑いであった。

☆

暗闇の中で、ゼルダ姫は目を覚ました。

さつきから感じていた冷たい感触は、どこかから滴り落ちる水が頬に当たっていたからだ。ぽつりぽつりと落ちる水滴で、少女の頬は濡れきっていた。

一瞬、自分がどこにいるのだろうと思った。

まず蘇よみがえってきたのは、恐怖という感情である。

それが引き金となって、さまざまな記憶が意識の底から姿を現し始めた。

魔王ガノン。

そう。あの恐ろしい魔界の主に、自分はさらわれたのだ。

鉤爪かぎづめのある巨大な手で身体をつかまれ、天空高々と運ばれた。顔を打つすさまじい突風の中で、彼女は意識を失ったのだ。あれからどこへ連れ去られたのか。

空気は身を切るように冷たい。

身を起こしてあたりを見回す。

薄暗い天井から無数の石筍がぶら下がり、床にも刺の山のように突き立っている。

ひんやりと冷たい空気が首筋に当たり、振り返ると背後の壁に四角い窓がうがたれていた。つま

りここは、鍾乳洞を利用して作った牢獄のようであった。

ゆっくりと立ち上がり、背伸びしながら窓の外をのぞいた。

ごつごつした岩ばかりの通路があるだけだ。

はるか向こうで松明が点り、ゆらゆらと揺れる炎に荒々しい岩壁がシルエットを踊らせていた。

人の気配はない。見張りはどうしたというのだろうか。

ゼルダは自分がいる部屋の出口を捜して、もう一度部屋を見わたした。

ところが、不思議なことに扉や入り口に類する物は見当たらない。

四方はごつごつとした岩壁で覆われ、無論であるが天井や床にもそれらしいものはないのだ。外

へ通じているのは彼女の傍らの小さな窓だけだが、これとて人ひとりが出入りできるほど大きなも

のではない。

ゼルダはいったいどこからこの石牢に入れられたのだろうか。

(こんなばかなことってないわ……)

彼女は四方の壁に歩み寄り、手探りで出入口を捜そうとした。たとえこちらに出入りする方法が

なくても、岩の亀裂や凹凸部が見つかるはずである。だが、いくら慎重に捜してもそれは見つからなかった。

壁はすべて一枚岩。

彼女は出入口のないこの石牢に閉じこめられていたのである。

途端に、これまでにままして、耐えがたい恐怖が襲ってきた。

壁から離れて、床の真ん中に座りこみ、両手で顔を覆った。

——ゼルダ姫……。

その時、外から男の声が聞こえた。

何度もしりフレインしながら重々しく、遠くからしだいに近づいてくる。ゼルダは窓から外を見たくなったが、恐怖という感情は身体を制し、彼女を立ち上がらせようとはしなかった。

小さな窓の向こうに影が差しかかると、そこに顔が現れた。

死人のように青白い男の顔。濃い髭を生やし、鷲のように尖った鼻をしている。それがまた低い声で彼女の名前を呼んだ。

「ゼルダ姫。お目覚めのようですね」

「あなたはいつたい……」

彼女は後ずさりながら震える声で誰何した。

男は答えず、蠟細工のような無表情な顔をゼルダに向けたままである。

と、次の瞬間、男が前進した。

一瞬にして岩壁を突き抜けた。

まるで水の中を通り抜けたように、何の抵抗もなく石牢のこちら側に姿を現したのだ。おびえるゼルダ姫にゆっくりと歩み寄りざま、彼女の前に立ち止まった。

「私の名前はリユグエル伯爵。ごらんのとおり人間ではない」

伯爵と名乗った男は、背後の冷たい壁まで後ずさるゼルダ姫を氷のような目で見下ろしていた。

「だが、私はあなたの味方です。ゆえあって、ここからあなたを出すわけにはいかないが、この部屋ならば魔王の手も届きません。ご安心なされ」

ゼルダは唇をかみしめ、勇を鼓してリユグエル伯爵を見上げた。

「魔王はどうしたのです？ 私はガノンにつかまったのに」

「大丈夫です、姫。このわたくしめが、あなたをここへお連れしたのです」

彼は渋い漆黒のマントをゆったりと身にまとい、腰には長大な剣を吊るしていた。顔はやせ細り、妙に青白かったが、ふとその双眸に浮かんた優しげな光が、ゼルダ姫の心から緊張を解きほぐした。

「私を……ガノンの手から救い出してくださいましたのですか？」

彼女の問いに、リュグエル伯爵は複雑な表情を見せた。

「残念ながら、ここはまだ魔王の牙城がじょうです。しかし魔王もまさかあなたがここにいるとは思わないでしょう。今ごろ魔王は魔物どもを引き連れて、ハイラルじゅうを血眼ちまなこになってあなたを捜しているでしょうが」

「なぜ……逃がしてくださらないの？」

「ここにはガノンの手下が多くおります。窮屈きゆうくつでしょうが、ほとぼりがさめるまでしばしここにおりなされ。衣食住の心配ならご無用です。私の部下のムルチが、何なりと承うけたまわりますので」
踵かかとを返した男の背中に、ゼルダが声をかけた。

「もし……。あなたはどうして、わざわざこの私を助けてくださったのです？」

すると、リュグエル伯爵が肩越しに振り返った。

「あなたのようなお美しい方を、みすみす魔王の餌食えじきにしたくはない。それだけの理由では納得できませんか？」

呆然ぼうぜんとするゼルダの目の前で、伯爵は岩壁に向かって歩き出した。

出現した時と同じように、彼の姿は忽然こつぜんと壁に吸いこまれ、一瞬にして向こう側に突き抜けた。そして外の通路から窓越しに彼女を見つめ、やがて去って行った。

まだ夜が明け切らぬうちに、リンクは城を出発した。

アッサムの街を出ると、高原があった。

密生する丈の低い草の海の中に、ところどころ立木が枝葉を伸ばしている。そんな中に蠢く無数の影があった。

毒牙を光らせながら飛び跳ねる蜘蛛の怪物テクタイト。花卉のような翼をひらめかせてふわりと宙を舞うピーハット。他にもいろいろいな奴がいる。まさにそこは魔物たちの巣といってもよかった。

いくら勇者の生まれ変わりといっても、やはりおっかないものはおっかない。

リンクは魔物たちに遭遇しないように回り道をして、だだっ広い高原を抜けた。やがて岩山にさしかかると、あたりの景色はいっそう荒涼としたものとなった。仙人の住む岩山というのは、このあたりにあるのだらうか。

切り立った崖に挟まれたその一画は、やや開けてはいるものの、ごつごつとした岩塊が大地に無秩序に転がり、なにやらえらく殺風景な感じがする。天空の灰色の雲は、その崖の間に低く降りて

くるように思える。

不安に立ち止まるリンクは、前方に妙なものを見つけた。

無数の石像。

それも盾と槍を持ち、甲冑を着こんだオブジェが全部で百体以上、整然と並んで立っている。

が、それは人間ではなく、牙を生やした怪物の顔であった。

いったいこのようなものが、どうしてここにあるのだろう。

リンクは興味半分でオブジェに近づき、そのひとつに手を触れようとした。

その時――、

――触っちゃだめ！

突如として、リンクの頭の中に女の子の声があった。

「え？」

声をあげたが、もう遅い。リンクは甲冑を着こんだ石像のひとつに手を触れてしまった。途端に

それは、かっと青白い光を放った。

あっと叫んで後ずさった途端、地面の岩に足をとられ、彼は仰向けにすっころぶ。

そのはずみに、彼の身体がもう二体の石像に触れた。

閃光のような青白い光が一瞬網膜を貫く。次の瞬間、彼は大きく口を開けてしまった。目の前に

三匹の魔物が立っていた。それはついさっきまで石像だったはずの、甲冑の化け物である。

むき出された顔だけが、獣面だった。

——だから、言ったのに。アモスの像は人の手が触れると蘇よみがえってしまつたのよ。

頭の中でまた女の子の音がする。

「き、君はいったい……」

言いかけた途端、怪物がいっせいに襲おそいかかってきた。

風を切つて突き出された槍をとっさにかわし、立ち上がりざまに腰の剣を抜いた。間髪入れずに槍を突いてくる二匹目の攻撃を、左手の盾で受け止めた。

がきつ。

渴かわいた音とともに火花が飛び散った。

怪物は槍を引きもせず、ぐいぐいと押してくる。すさまじい力である。

(つく……)

森や野山で鍛きたえた身体とはいえ、リンクは小柄であった。必死に盾で押しもどそうとするが、ぐいぐいと力まかせに突いてくる。大地を踏みしめているはずの両足が、ずるずると地面の上を滑すべつてゆく。

そこへ三匹目の怪物が突進してきた。

防ぐ手だてがない！

槍を防ぐ盾をとっさに離して、横っ飛びにかわそうとしたが、そこへ突っこんできた怪物の槍が、リンクの左足を貫いた。

「……！」

鮮血を噴き出す足を押さえて地面に倒れながら、リンクは剣を投げ捨てた。そして、背中にかけていた弓をとって矢をつがえた。そのままぐいと弓弦を引き、襲いかかろうとする怪物を狙った。

——あいつは目が弱点よ！

突然、あの女の子の聲が頭の中に響いた。

言われるまま、リンクは甲冑の怪物の左目を狙い、ひょうと矢を射た。

弱点を貫かれた怪物が、断末魔の絶叫をあげながらどうと仰向けに倒れる。が、仲間の死体を乗り越えて、残る二匹が走ってきた。頭上でくると槍を旋回させると、奇声とともに地を蹴ってジャンプする。

リンクはふたつ目の矢をつがえる余裕がない。

視界の端に、さつき落とした剣が見えた。

それを拾い上げざま、渾身の力をこめて突き上げた。

ぎやああっ！

甲冑から唯一露出した顔面を刺し貫かれて、怪物がのけぞる。

そのため、リンクの手から剣が離れてしまった。残る三匹目が怒りに燃える声を発しながら襲いかかる。かっと開かれた口から涎が流れ出していった。

リンクには弓矢しかない。が、矢をつがえる余裕はない。

——槍を拾って！

女の子の声にはっとなったリンクは、素早く身を起こすと大地に横たわって息絶えた怪物の手から、長大な槍を拾い上げた。それを気合いもろとも最後の一匹の胸に向けて突き出す。

がつ。

すさまじい手応えとともに、リンクの槍が折れた。怪物の甲冑があっけなくはじき返してしまつたのだ。

——ばか。顔を狙わなきゃだめじゃないの！

「くそっ。わかつているさ。狙う暇がなかったんだ」

忙しい中、リンクは正体不明の頭の声に答えている。

だが、怪物の突進はそれで止まり、おかげでリンクは背中から一本抜き取ることができた。とっさに弓につがえさま、ぐいと弦を引いた。

「てっ！」

放たれた矢は、狙い違わず怪物の眉間に突き刺さる。

ぐがおっ！

石像の怪物は驚愕に目を見開いたまま、どつと大地に倒れた。

「ふう……」

ため息をつきながら剣と盾を拾い、背後の石像によりかかろうとして、あわてて振り返る。怪物兵士の石像は、まだ数え切れないほど残っている。触ったりしたら、また実体化して襲いかかってくるどころだった。

リンクは膝の傷を見下ろした。

槍が刺さった場所に大きな孔が開き、そこから血が流れ出している。

深い傷ゆえに神経が麻痺しているのだろう、痛みはほとんど感じない。が、じきに絶えがたい疼痛となって襲ってくるはずだ。

リンクは背負っていた雑囊から布切れを引っ張りだし、それで太ももの上をきつく縛りつけた。出血はこれで止まるはずだ。

——そんなことじゃだめよ。

ふいにまた、あの声の頭の中に響いた。

「君は誰なんだ？」

リンクが叫ぶ。

まわりは荒涼とした岩地で、人影はない。あるのはアモスの石像と呼ばれた、おっかない怪物の像だけである。

——あの槍には人をしびれさせる毒が塗^ぬつてあるの。まもなくあなたは動けなくなるわ。そうならないうちに、早く泉にいらっしゃい。

「泉？ どこにあるんだ？」

リンクはまわりを見わたした。見えるのはごつごつとした岩ばかり。水の一滴もあるわけじゃない。

——あなたがいる場所から、太陽が沈む方角に向かってちよつと歩いたところよ。ツユノミのなる大きな木が見えたら、その向こうにあるわ。

「やれやれ、だ」

立ち上がろうとすると、ふいに身体の自由が利^きかなくなっていることに気づいた。

よろよろとよろめいたはずみで、またアモスの像に触れそうになってしまう。視界がぐるりと回転し、どざりとまた倒れた。

これじゃ、泉どころかこの荒れ地から出ることすらできない。

——しっかりするのよ。

「だめだ……。身体が動かないんだ」

大地に仰向けあおむけになったまま、リンクはどんよりと曇った空を見上げた。灰色の曇り空がくるくると回転して見えた。

「このまま寝かせてくれ。目が覚めるころには、きっと動けるさ」

——ばかね。毒が心臓に回ったら、あなたは死ぬのよ。しっかり意識をもって、立ち上がるの。泉までそんな距離じゃないわ。這はってでもくるのよ。あたしじゃなければ、その毒は消せないの。

「君がここへ来ればいい」

——あたしは泉の中に閉じこめられているの。畔ほとりまできて、呪文じゅもんを唱となえてくれなければ出ることができないのよ。

「他の人に助け出してもらうんだね。ぼくは眠い……」

——ばか。まぬけ。眠ると死んじゃうのよ！

「ひとつだけ訊きいてもいいかい？」

リンクは目を閉じたまま、はや呂律ろれつの回らぬ声で言った。

——なによ。

「さっきから頭の中に響いてくる声はものすごくチャーミングだけど、ひょっとして君ってかわいい？」

——ええ。そんじよそこらの女の子なんか、めじやないわよ。

すると、リンクが突如として両目を開いた。さつきまで力の抜けた表情だったのが、急に真顔まがおになつてゐる。大地に落ちてゐる自分の剣を片手でつかむと、切っ先を地面に突き立て、それを支えにして必死に立ち上がった。

「どうわあお！」

剣の柄つかにもたれるように立ち上がり、リンクはぜいぜいと肩を揺らして息をついた。

「万難ばんなんを排はいして、そこへゆく！」

彼は剣を杖つえにしながら歩き出した。

——ねえ。あなたって、ひよつとして相当にいいかげんな性格してない？

と、頭の中の女の子が言った。

ハイラル亀よりもかなり遅く、限りなく毛虫に近い速度でよたよたと歩き、やがて彼は岩場を抜けた。

驚いたことに、岩場の向こうには緑の葉叢はむらを風にそよがせる林があつた。

ツユノミの木は、その林の中でもひとときわ高く、目立って見えた。ハイラルの北部によく見られる樹木で、枝葉に無数になる実が滴しずくの形によく似てゐるところから、この名前がついたという。

——頑張^{はげ}つて。もう一息よ。

声に励^{はげ}まされながら、リンクは歩き続けた。

そのころになると、視界は霞^{かす}むどころか一面陽炎^{かげろう}が立ち昇るようにゆらゆらと揺れて見えた。ツユノミの木を目標に歩き続けると、やがて林の奥から微^{かす}かに清涼^{せいりょう}な水の匂^{にお}いが始^{はじ}めた。

その香りには、天国にいるような心地よさがある。

リンクは怪我^{けが}した足を引きずりながら、無心に歩き続けた。

繁みをかき分けて立木の間を抜けると、うっそうと茂る葉叢の向こうに目の覚めるような清冽^{せいれつ}な水をたたえた小さな泉があった。彼はその畔^{ほとり}にひざまずきぼんやりとした意識の中でこれは現実だろうかと思っていた。

それほど泉の清らかさは幻影然として見えたのだ。

そつと水面をのぞきこむと、そこにリンクの顔が映っていた。

「君は……この中にいるのか？」

声を絞り出すようにして訊^きくと、あの声が響いてきた。

——あなたのすぐそばにいるの。お願い、これからある呪文^{じゅもん}を言うから、そのとおりに唱^{とな}えて。そうすれば、あたしはここから出られる。

返事をしようとして、彼ははたと思いとどまった。

ひよつとして、これは畏わなじやないのか。

身体に入った毒を消せるなんて、あまりにも都合がよすぎるじやないか。

だが、この声の女の子はほくを助けてくれた。殺すつもりならば、あのまま放っておけば間違はなく死んでいたはずだ。だから、この子はほくの味方だ。

「いいとも。言ってくれ」

リンクが答えると、泉の中にいるという女の子は呪文を唱えた。

——クルガン、プリソマラ、ケルタルゴルト。

その言葉をそっくり繰り返すように、リンクがゆっくりと唱える。

すると、突如として泉の水が渦うずを巻き始めた。同時に、あたりを揺るがすような轟然ごうぜんたる地響きがとどろいた。リンクは本能的に泉から離れた。大地に突き立てた剣にもたれかかりながら、なかば朦朧もうろうとする意識の中で、眼前のすさまじい光景を見た。

泉全体が、白色に輝いていた。

やがて目も眩くらまんばかりの強烈な光に彩いろどられる。と、鳴動めいどうしていた地鳴りがびたりとおさまった。

驚くリンクの前で、泉の水面から何かが飛び出してきた。

きらきらと七色に光る鱗粉りんぷんのようなものを振りまきながら、それは透明な羽を羽ばたかせてリン

クの前に飛んでくる。

小さな妖精ようせいだった。

赤い服を着て、ブロンドの髪を肩まで伸ばしている。ぽっちゃりとしてふくよかな頬ほおに微笑みを浮かべ、右手にミニサイズのステイックを持ったまま、泉の畔ほとりにある岩の上に降り立った。

「助けてくれてありがとう」

妖精はスカートの手端をつまんで、ちょこんとおじぎをした。

「まさか……君が……さっきの声の……？」

リンクは目の前がくらくらとなるのを感じ、そのまま意識をフェード・アウトさせていった。

☆

ゼルダ姫が目を覚ました時、目の前に男が立っていた。

はっとして思わず後あとずさると、その男は苦笑を浮かべて困ったように肩を持ち上げてみせる。

「お目覚めですか？　ゼルダ姫」

リユグエル伯爵はくしやくだった。

片膝かたひざを折ってかしまり、さっと一礼をする。



ゼルダは壁に背中をつけたまま、彼をにらみつけた。魔王ガノンの手より助けしてくれたというが、考えてみれば随分と理不尽だ。依然、彼女はこんな地下牢のような場所に閉じこめられたきりだし、それに男の彼はノックもなしにここに入り自由なのだから。

「お風呂の用意ができております」

伯爵がうやうやしく言ったので、ゼルダは驚いた。

「え——？」

彼の後ろに小柄な老人が控えていた。

どうやら、召使いのムルチらしい。

丈の長い地味な礼服を着こみ、白髪混じりの髪を肩の後ろに長く伸ばしている。両手には、着替えらしい白い服を持っていた。

「さ、こちらへ。姫」

「ちよ、ちよっと待ってください！」

リユグエル伯爵に手を取られ、ゼルダは壁に向かって歩き出した。

このままでは壁にぶつかる。この男たちは壁をすり抜けられるのだろうが、ゼルダはあいにくと生身の人間なのだ。

きゅんと叫んで目を閉じた瞬間、ゼルダ姫は何の抵抗もなく岩壁を通過していた。

そつと目を開けると、そこは外の通路だった。やはりごつごつとした岩壁が、狭い道を挟むように遠くまで続いている。ところどころで松明が赤々と燃えていた。

「いったいここは……?」

ゼルダの問いかけにもかまわず、伯爵は彼女の手を引いて歩き出す。その後ろを、礼服の老人が付き添って歩く。奇妙なのは、ふたりの足音がまるで聞こえないことだった。狭い岩の通路に響くのは、ゼルダの足音ばかりだ。やはり彼らはどちらも人間ではないのだろう。

長い坂道だった。

それを下り終えると、いくつか折れ曲がった道をゆく。そうして行き着いたところは、まさに地下の入浴場である。それも、目を眩るばかりの広さ。高い天井まで湯気が立ちこめ、壁に彫りこまれた獅子の大きな口から、とうとうと音を立ててお湯が落ちていく。

あちこちに人や動物をかたどった見事な大理石の彫刻があり、場内を照らし出す無数の多灯架は金の燭台であった。

その美しさに、ゼルダ姫はしばし我を忘れた。

「ごゆっくり、おくつろぎください」

リユゲル伯爵が一礼して立ち去ると、老人が着替への服を置いて彼の後に続く。ただっ広い浴場にひとり残されたゼルダ姫は、呆然と立ちつくしていた。

窓ひとつないが、それでも安心はできない。

どうしようかと迷う。

自分が着ているのは、甲冑かっちゅうの下につける戦闘用の衣服。それも血や泥や埃ぼじりにまみれているし、あちこちがほころびてさえた。ゼルダはもう一度あたりを見回してから、汚れた服を脱ぎ始めた。

広い湯船に身を沈めると、生き返ったような気分になった。

湯は熱くもなく、ぬるくもない。

肩まで浸つかったまま、天井に向かって立ち上る白い湯気を見ていると、奇妙な気分になってくる。

いろんなことがありすぎた。魔物たちの襲しゅうらい来。父である国王ウイルヘルム三世が殺され、そして近衛兵長のジュゼツこのえ へいちようペまでもが倒れた。

そのあと、ゼルダは魔王ガノンの巨大な鉤爪かぎづめにとらわれ、天空高く運び去られたのだ。それが

今、なぜこのような場所にいるのだろうか。〈知恵〉のトライフォースを持って城を脱出したインパは無事に逃げ延びることができたのだろうか。

いろんな考えをめぐらせているうちに、ゼルダはふと得体の知れない不安に駆られた。

あのリユグエル伯爵という男。本当に味方なのか。

これは魔王の奸計かんけいなのではあるまいか。

湯船の中で立ち上がり、出ようとした時、ふいに妙な気配を感じて、ゼルダは背後を振り返っ

た。

視線――。

はつとなつて白い胸を隠す。

が、浴場の中には誰もいない。湯気の向こうに見えるのは、大理石の壁や彫像ばかり。窓ひとつあるわけではない。それなのに、何者かの視線を感じたのだ。

「誰？」

高い天井にゼルダの声が響く。

答える者はいない。

☆

意識の中を、霧が流れている。

その向こうに、森の中にひっそりと沈む故郷の村がある。赤茶けた煉瓦れんがの煙突から夕餉ゆうげの煙がたなびき、家々の軒先のきりから肉や野菜を焼く何ともいえない匂いが漂ってくる。

大きな水車をゆっくりと回し続ける小屋の扉とびらが開き、白髭しろひげの長老が杖つえについて姿を現した。それに続いて、村医者むらいしやの娘むすめマイアが出てくる。

リンクはふたりに向かって手を伸ばす。

だけど長老もマイアも気づかない。ふたりは小屋を離れて小川に行き、大きな水桶みずおけに清水を汲くんでいる。きつとインパがまだ昏睡こすいしているからだろう。

ふたりに向かって大声で叫んでみたが、長老もマイアもこっちには気づかない。だからリンクは悲しくなった。

長老も、それにマイアも、ぼくのことを忘れてしまったんだ。

小川の水は陽光を照り返してきらきらと光り、マイアの長い髪がその中でシルエットとなつて踊っていた。リンクはふたりに向かって駆け出そうとしたが、目の前には彼が走るべき道はなかった。

はっと思つた途端とたん、眼前の光景は素早く遠ざかり始めていた。

おじじ！　マイア！

声なきリンクの叫びも虚しく、ホビットの村は霧のかなたへと去っていく。

かわりに、後ろから自分の名前を呼ぶ声があった。

女の子の声。

聞き覚えがあるような気もするが、そつでないようでもある。振り返ると、そこに奇妙な光景があった。洞窟どうくつのような岩に囲まれた空間。その真中にさかんに白い湯気を上げる温泉のようなも

のがある。

ひとりの少女の裸体が、その真ん中に見えた。

髪は輝くような金髪、そして青い瞳。歳はリンクと同じぐらいに見える。

いったい、この女の子は誰だ？

夢——。

これが夢や幻覚だとしても、あまりにもリアルすぎる。女の子はおびえたような顔でじつとこちを見すえていた。大丈夫。そう言っただけであげたかった。ぼくは敵じゃない。

だが、少女はただただおびえきっているようだった。

やがて彼は目を覚ました。

清冽な水をたたえる泉の畔ほとり。赤や黄色の花を咲かせた草むらに、リンクは仰向けに横たわっていた。空は相変わらずどんよりとした曇りだったが、その花々のおかげで、あたりは随分ずいぶんと明るく見えている。

「気がついたのね？」

女の子の声にはっとなった。また女の子の声。だけど、それはさっきの少女のものではない。今度ははっきりと聞き覚えのある声だった。

見れば、目の前の岩の上に小さな妖精ようせいが座っている。

ウェーブのかかった金色の髪。ふっくらとした頬ほお。赤いスカート。そして背中からは透明な羽が伸びている。

「君は……」

上半身を起こすと、軽い頭痛が襲おそった。どうやら魔物に打ちこまれた槍やりの毒が、まだ完全に消えていないらしい。左足を見下ろすと、槍で受けたはずの傷はほぼ完全にふさがっていた。

「ひよっとしてこれは？」

妖精の女の子が羽ばたき、リンクの肩の上に乗った。

「あたしの名前はファニー。そう。あたしが治なおしてあげたのよ。呪文じゅもんを唱となえて、この泉の底から助け出してくれたお札にね」

その時になって、リンクはようやくやくすべてを思い出した。この妖精はテレパシーのようなものを使って呼びかけ、危あやうく死ぬところをここまで導いてくれたのだ。あの声がなければ、彼はとつくの昔に死んでいただろう。

「ぼくはリンク。君こそ、危あやないところを助けてくれてありがとう」

そして、はっとなって小さな女の子を指差した。

「しかし、君がぼくを呼んだ……」

「人間の女の子だとばかり思っていたんでしょ？ どうせ、あたしはちっぽけな妖精よ。これでも

魅力という点では、そんじよそこの人間の女の子には負けないつもりなんだけどね」

「しかし、なあ」

「なによお、このスケベ」

腕組みをするリンクに、ファニーが口をとがらせた。

「最初からあたしが小さな妖精だって言ったら、来てくれなかったくせに」

「いやあ……そのお……」

ぽりぽりと頭をかきながら、彼はごまかすように言った。

「ところで、ファニー。君はどうして泉の中になんかに捕まっていたんだ？」

「魔王の呪いに捕らえられたの。ガノン^{のろ}はあたしたち有羽族^{ゆううぞく}の妖精を恐れているから、あちこちの泉にあたしたちの仲間が封じこめられているわ」

「どうしてガノンが？」

「ガノンの呪いはあたしたちに効かないの。それどころか、あたしたちはガノンがこのハイラルに振りまく呪いを解くことができるのよ」

ファニーは手に持った小さなスティックを振りながら、背中の透明な羽を羽ばたかせてみせる。

きらきらと七色に光る鱗粉^{りんぷん}が、風に乗って流れていく。その粉が荒れ果てた大地に落ちると、そこに一輪の花が咲いた。

「へえ。こりやすごいな」

感心するリンクに、ファニーが笑ってみせた。

「ねえ、いっしょに旅に連れていってくれる？」

「君を……？」

啞然あぜんとなってリンクが指差す。

「あたしはこれからハイラルじゅうを回って、同じように捕らえられている仲間を助けなきゃならないの。たくさんの有羽族の妖精を助け出したら、ハイラルはきつと元の美しい世界にもどるわ。それに、あなたが怪我けがをしたら、さっきみたいに治すことができるでしょ？」

「う、うん」

とは言ったものの、リンクは考えこむ。

何だかこいつ、結構口うるさそうなんだから。

「あに考えてるだよ」

ファニーが肩から飛び上がって、リンクの顔の前で腰に手を当てた。

「君はテレパシーが使えるんだろう？ だったら、ぼくの考えていること、わかるんじゃないのかい？」

「あら。あたしがいつそんな力を持っているって言ったの？ こっちからあなたの頭の中に呼びか

けることはできるけど、あなたの頭ん中の構造なんかわかんないわよ。スケベ心って項目だけ、何となくわかるけどさ」

口うるさい奴だなあ。

リンクは思わず困り果ててしまふ。

スケベといえ、さっき気を失っていた時、リンクは女の子の幻覚ばかり見ていた。村に残してきたマイア。それから……あの洞窟どうくつの温泉のような場所で彼を見つめていた少女は誰だろう？

「ねえ、なににやにやしてんのよお？」

ファニーが腰に手を当てて、リンクの顔を見上げた。

「何でもない何でもない。ところで、ウィジャグムントの山の洞窟って、知っているかい？」

「え？」

きよんとした顔で、ファニーは肩をすくめた。

ぽかんと口を開けているところを見ると、彼女も知らないのだろう。

「なんだ、まだまだ歩かなきゃならないのかあ」

疲れ切った顔でつぶやくリンクの前で、ファニーが後ろを指差した。

「そうじゃなくて、あれ。ほら、あれよ」

「ん？」

見れば、ほんの目と鼻の先にある低い岩山の中腹に、洞窟が口を開けていた。

「あれがそうだけど？」

と、ファニーがきよとんとした顔のままと言った。

岩山には険しい一本道があり、めまぐるしく曲がりくねる峻険なその山道を登ると、果たして洞窟まで続いていた。

それは明らかに人の手によって掘られた洞で、入ってすぐのところ、石段が刻まれている。長い石段を降りると、まっすぐ伸びる通路があり、リンクは肩にファニーをとまらせたまま、片手に剣を持ちながら、おっかなびっくりで歩き出した。

怪物の一匹もいそうな雰囲気だが、幸いそんなものには出くわさず、通路の突き当たりまでやってきた。

そこに一段と天井が高くなった部屋があった。

吐く息が白くなることに気づいた。

洞窟の中の空気は、ひんやりと冷たく張りつめている。そう気づいた途端、寒さが襲ってきた。こんな場所に入りこんだことを後悔したその時だ。

ふいに前方に何かが光った。

それも、ふたつ。

燭台しょくたいの炎である。その光は洞窟の部屋の中を照らし出し、燭台の後ろに敷かれた絨毯じゅうたんの上に座る、赤い衣服を着た白髭しろひげの老人の姿を、闇の中にくっきりと浮かび上がらせていた。

リンクは剣を両手でかまえ、緊張しながら近づいた。

「カシムというのは、あなたですか？」

狭い洞窟に、リンクの声が反響する。

途端に天井から落ちた冷たい水滴が鼻先に当たり、リンクはひどくびっくりして後あとずさり、肩にとまっていたファニーがその拍子に飛び上がった。

——ふははははは。

ふいに洞窟に笑い声が響く。

——失われたトライフォースを取りもどすために旅立った勇者というから期待すれば、なんのことはない、ただの小倅こせがれではないか。

「なんだと？」

リンクがむっとなった。

「小倅で悪かったな！」

——じゃが、よい目をしておる。その燃えるような目はまぎれもない、戦士の目じゃ。いかに

も、わしはウィジャグムントの仙人カシム。お前さんの来るのを長い間待っておった。神々がこの世を作った日と同じぐらい古くから、な。

「そんな昔から、こんな場所でどうやって暇つぶしてたの？」

リンクの率直な質問に、老人はむっとなった顔をした。

——よけいなお世話じゃ。

そっけないはずの老人の態度だが、なぜかどこかに、愛嬌あいきょうのようなものがある。

「あなたに会えと、アッサムの城の僧侶そうりよに言われたんだ。あの人からぼくのことを聞いたんだね？」

——わしら仙人には、千里眼というものがある。お前さんがハイラルの北の小さな村で生まれた時から、わしはいつかお前さんがここへ来ることを知っておった。あの忌まわしき魔王ガノンと戦うということも、じゃ。

「千里眼持つてるなら、この物語の結末がどうなるか、教えてくれない？」

妖精ようせいのファニーが意地悪く言うのと、白髭しろひげの老人はむっとなって彼女をにらんだ。

——ばか者。そう都合よく未来のことなぞわかってたまるか。

一喝いつかつされたファニーが肩をすくめて、舌をぺろりと出した。

——わしら仙人は、あのガノンに深い恨みを持つ。きやつめはさんさんにわしらのテリトリーを

荒し回ったからの。よって、リンクよ。わしらハイラル仙人共せんにんきょうさいくみあい、済組合さいくみあひ、略してハイ仙共組せんきょうそは、お前さんの討伐旅行とうばつりょを全面的にバック・アップすることにした。

「そりゃ、ありがたいけど。テキトーにほどほどに戦って、かなわなきやさつさと退散するつもりだよ」

——そういう白け世代の若者的思考は、わしゃ好かん。お前さんは、いずれは魔王ガノンと戦うことが宿命づけられておる。

「勝手に対決さすな、勝手に」

——いんや、お前さんはガノンと対決する。

老人は頑がんとして言つてのけた。

——そこで、わしはお前さんにこいつを渡そうと思つておつた。

カシム老人は脇に置いていた物入れから、縦に細長い木箱を取り出した。リンクが受け取ると、ずつしりと重い。何が入っているのだろう。

「蓋ふたを開けるとぱつと白髪の爺さんになるとか、そういうのなしだね？」

——なし、じゃ。

リンクは渡された木箱の蓋を開けてみた。

中には一振りの剣が入っていた。

柄つかを持って目の前にかざしてみると、よく磨きこまれた刀身がざらりと氷のように冷たく光る。鋼鉄の剣だが、リンクが持っているものよりも、はるかに出来がいい。

「リンク、それはホワイトソードよ！」

「ファニーが透明な羽を羽ばたかせながら言った。

老人がにやりと笑う。

——いかにも、それはホワイトソード。白鉄鋼より削り出された逸品いっぴんでな。魔を討つため、高名な刀かたなかじ鍛冶かたなかじによって作られたものじゃ。

「魔を討つ？」

——そう。切れ味もさることながら、剣に封じこめられた魔法で、太陽と同じ温度の灼熱しゃくねつのビームを連続して発射することができる。その柄の握りのところにボタンがあるじゃろ？ それを押すと……。

「これね——」

説明を聞く間もなく、リンクはボタンを押してしまった。

「わっ！」

刀身がかつと輝いたかと思つと、ホワイトソードは光線を発射した。

鋭角の光線は、たまげてのけぞったカシム老人の頭を掠かすめるや、背後の岩壁に命中して、派手な

爆発を起こした。

「すごい威力いりよくだなあ」

がらがらと音を立てて崩れ落ちる瓦礫がれきの雨の中に、リンクの声がした。

——ばか者。感心しとる場合か。下手に発射すると、とんでもないことになるぞ。お前なんぞに、やるんじやなかったかもしれんな。

はあはあとあえぎながら、仙人が言う。

「え？ なあに？」

剣を持ったまま、ぼかんと口を開けたリンクが振り向いた。

——ボタンに親指をかけたまま、こっちへ向けるなっちゅうに！

後あとずさるカシム老人の前で、リンクは腰に差していた剣を抜き、かわりに新しいホワイトソードを差しこんだ。

——しっかし、これじゃ先が不安でならんな。

「何か言った？」

——向けるなっちゅうのに。こっちへよ。

ひっと身を飛ばう仙人にウインクをして、リンクは手を振った。

「じゃ、これ。喜んでいただくね。そんではバイバイ」

——待たれい！

老人の声に、リンクたちが振り返った。

「まだ、なにか？」

老人は絨毯じゅうたんの上に座したまま、リンクを見つめている。

——ちと前に小耳にはさんだ。ロツテルベルグという街の近くに、ここと同じような洞窟がある。その奥深くに隠された迷宮に、トライフォースの破片が隠されておるはずじゃ。まずはそれを見つけい。

「ロツテルベルグか。ありがと、おじいさん」

少年と小さな妖精が洞窟を出ていくと、あとにひとり残された白髭しろひげの仙人がひゆうと息をついた。

——あやつ、わざとやりおったな……。

そして、ぽりぽりと頭をかき、不安げな眼差まなざししで暗い天井を見上げた。

——つたく、あんな少年が本当にこのハイラルを救えるものかいな。神はとんでもない輩やからを、救世主を選びよったのではあるまいな。まっ、いいか。なるようになるさな。ふおっ。ふおっ。ふおっ。

笑い声がふいに小さくなるとともに、仙人の姿がかき消えるように見えなくなった。

洞窟は最初から誰もいなかったかのようになり返った。

☆

入浴を終えて新しい服に着替えると、ゼルダは岩壁にはめこまれた大きな姿見に自分の姿を映してみた。

白いドレス。いつどこで計ったのか、それは完全に彼女の身体にフィットしている。

長い髪を後ろで結んでポニーテイルにしてから、もう一度鏡をのぞきこむ。その瞬間、ゼルダは火照った軀を硬直させた。

いつの間にか彼女の後ろに老人が立っている。

ムルチだった。振り返ったゼルダに向かってうやうやしく一礼する。

「姫様。お着替えなさったら、おいでくださいまし。伯爵様はくしやくさまがお待ちでございまする」
しゃがれた声で言うてから、老人はくるりと背を向けて歩き出した。

その姿が浴場の出口の外に消えると、ゼルダは不安な顔のまま白いドレスの裾すそを軽く上げながらムルチの後を追った。

長い階段を昇らされると、やがて扉とびらがある。

ムルチはその扉の横で一礼をした。

入れ、ということなのだろう。

ゼルダが扉を開いて中に入ると、向こうは意外に広い部屋だった。

天井から大きなシャンデリアが吊るされ、そのまばゆいばかりの光芒こうぼうに照らされて、貴族しか使
用できないようなさまざまな高価な家具調度が絨毯じゅうたんの上にすえられている。長椅子も鏡台も、見
事なまでのアラベスク模様の彫刻が彫りこまれていて、その上に金箔きんぱくを貼られて燦然さんぜんと光り輝いて
いた。

「これはどうして……?」

ゼルダがつぶやくと、奥の扉が開いて黒マントを着たりユグエル伯爵が登場した。

「すべてがあなたのもの。しばしの間、姫にこの部屋でくつろいでいただきたく、用意しました」

「リユグエル……伯爵」

名を呼ばれて、長身の男が微笑んだ。

「何でございましょう? 姫」

「どうして、私を逃がしてくれないのです?」

「それは申したはず。ここはまだ魔王ガノンの勢力下なのです。もしも魔王の配下のものに見つか
れば、そなたは二度と地上へはもどけませんぞ」

「私はアツサムの城へもどりたいのです。部下たちが心配して待っているはずです」

「お気の毒ではございますが、アツサムの城は壊滅いたしました。生存者はひとりも残っていないと聞きます」

伯爵の言葉を聞いた途端、ゼルダ姫は長椅子に突っ伏して泣き崩れた。

「ゼルダ姫。お聞きなさい。あなたの乳母であるインパが持ち出したへ知恵のトライフォースさえあれば、いつかこの国にまた平和がもどるではありませんよう」

優しく声をかける伯爵に、ゼルダが向き直る。

「インパのことを知っているのですね。あれからどうしたのですか？」

「乳母様は、へ知恵のトライフォースを城より持ち出したと聞いております。ですが、そののち、乳母様は追手の魔物の毒牙にかかって命を散らしたとか」

ゼルダの目が大きく見開かれた。

「何というむごたらしい……」

はらはらと大粒の涙を落とす姫の頬を、リュグエル伯爵が見つめていた。が、ふいに手を伸ばして、ゼルダのドレスの肩にそっと手を置いた。

「麗しの姫。このリュグエルめにできることがございましたら、何なりとお申しつけください」

ゼルダ姫は顔を上げて、自分を見つめる伯爵を振り返った。

伯爵の優しげな相貌^{そうぼう}。彼女はそれをじっと見つめる。

「お願いがあります。インパはトライフォースを持っていたはずです。あの〈知恵〉のトライフォースがガノンの手に渡ったら、この世は完全な闇に閉ざされます。何としても、それだけは防がねばなりません」

リユグエル伯爵は、しばらく黙ってゼルダを見ていたが、やがて口を開いた。

「で、この私めにどうしろと?」

「インパが……亡くなる前に、〈知恵〉のトライフォースを隠したかどうか、確かめてもらいたいです」

「お安いご用です」

伯爵はゼルダの手をとって口づけをする。

「さっそく部下を放って、確認させましょう。して、〈知恵〉のトライフォースはどこへ隠しているのですか?」

ゼルダ姫はゆっくりと立ち上がる。

両手を胸の前で組み合わせたまま、少女はその澄んだ瞳を黒衣の伯爵に向けた。

PART3

闇の地下迷宮

海に近づくと、港町が見えてきた。

広い湾の中ほどにある小さな街である。ここがロッテルベルグという街なのだろうか。それにしても、閑散とすぎている。

丘を下る一本道を降りると、リンクとファニーはその街に入った。港に何隻もの漁船は停泊しているが、棧橋さんほしやはしけに人影はない。街の石畳の往来にも、行き交かう人の姿が少ないのはなぜか。

港湾の上に海鳥が舞い、寒々とした景色だった。

「この街の人たち、いったいどうしたのかしら」

リンクの頭の上にいるファニーが、不安げに囁ささやいた。

幾艘かの小舟が乗り上げたままの砂浜を歩いているうち、リンクは船小屋の中でひとりの老人が投網とあみを編んでいるのを見つけて近づいてみた。

「あのお……」

老人が皺しわだらけの臉まぶたを開けて、リンクを見つめる。

「なんじゃ、よそ者か。こんな街になんぞ来るもんでねえ」

冷たく言い放って、また網を編み続ける。

「ここはロッテルベルグですか？」

「ここはグルドの街だに」

老人がそう答えたので、リンクはちよつとがっかりした。

「ロッテルベルグに行きたいんですが、どう行けばいいかわかりますか？」
すると老人はしゃがれた声でこう答える。

「知らんだで」

「ところで、街のみなさんはどうしたのですか？　船も全然沖に出ていないようですし、今日は安息日かなにかですか？」

老人はまたリンクを見つめた。

「そんなもんでねえだよ。最近、ここいらの海に、おっかねえゾーラが出るようになった。あいつらのおかげで、漁師は食い殺されるわ、魚は全部食べられちまうわ。ろくなもんでねえ」

「ゾーラ？」

首をかしげるリンクに、ファニーが説明した。

「半魚人のことよ。大昔は深海の底に棲むおとなしい種族だったんだけど、魔王が魔力を使って突然変異を起こさせたの」

「そうだったのか」

リンクは沖合いの水平線を見つめた。

鈍色にひいろの空の向こうで、風が渦巻うずまいていた。

グルドの街にある建物は、そのほとんどが廃れたものだった。

多くの人々は、とうの昔にこの港町を見捨てて他へ行ってしまったらしい。閑散とした街路を挟んで、廃屋が並んでいる。その間を空つ風が吹き抜けていた。

「気味悪い街ね」

肩をすくめながら、ファニーがつぶやく。

人を捜して、ロッテルベルグへ行く道を訊かないといけない。リンクは往来の真ん中に立って、街を見わたした。雑貨屋や食品店。それらはどれも入り口を固く閉ざし、客の姿はない。しばらく歩くと、唯一人の声が漏れている場所があった。

酒場である。

リンクは子供だから、もちろん酒なんかには無縁だ。で、おっかなびつくりで入り口から中をのぞいてみた。腕に入れ墨をした漁師らしい屈強な男が数人、狭い店内にある丸テーブルのひとつを占めて、酒を酌み交わしていた。

突然店内に入ってきた少年を見て、そろって奇妙な顔をしている。

「何でえ、おめえはよ？」

野太い声で訊かれて、リンクは答に窮した。

「アッサムからやってきたんです。ロツテルベルグという街に行くには、どうしたらいいかわかりますか？」

しんとなっていた男たちが、次の瞬間、げらげらと笑い始めた。

「何かと思えば、ガキとチビの妖精か。おれたちにものをたずねるなら、こいつが入り用だぜ」と、ひとりが親指と人差し指で輪を作ってみせる。

ところがリンクには、ろくな持ち金がない。若干の持ち合わせは、貴重な食糧などの買いこみに使わなければならない。

困り果てていると、漁師のひとりが立ち上がり、彼の前につかつかと歩いてきた。天を突くような大男。顔の下半分は真つ黒な髭ひげでもじゃもじゃである。

「なきや、もうひとつだけ手段があるぜ」
にやりと笑って、リンクの前で丸太のように太い腕に力瘤ちからこぶを作ってみせる。

「——ロツテルベルグはこの海を渡った向こうの大陸にある。もしもおれっちと腕相撲して勝ったら、おれの船で連れてってやらあ」

リンクの顔におびえの影が差した。だが、彼はあえて言う。

「本当に……腕相撲で勝ったら連れていってくれるんですね？」

「ちよっとお。どうするつもりなのよ。あんなすごいのに腕相撲で勝てると思っているの？ 腕を

へし折られないうちにやめときなさいよ」

ファニーが心配そっな顔で言う。

「そうだ、ちっこいのの言うとおりでせ、少年。そのグレッグって野郎は、ハイラル熊でも投げ飛ばす野郎だ。おめえ、身体中をばらばらにされちまうぜ」

テーブルにいる男のひとりが言っつて、またげらげらと笑う。

リンクは黙って、入り口脇に置いてあるテーブルの前にかがみこみ、片肘ひじをその上に乗せた。挑戦されたと知って、グレッグという男が太い腕をぶんと振り回し、

「どうれ、手加減なんぞしないからな。坊や」

リンクの正面にどっかりとかがんで、彼の小さな腕をとる。

「うははは。坊主ぼうず、掌てのひらに汗かいてるじゃねえか」

漁師が笑いながら肩越しに仲間を振り返った。

「アレフ。合図しな。この小僧を空の向こうまで吹き飛ばしてみせてやろう」

「リンク！」

ファニーが羽ばたきながら叫ぶ。が、彼は素知らぬ顔でグレッグを見た。

「行こうぜ、おっさん」

「GO！」

漁師のひとりが合図すると同時に、グレッグがリンクの腕をテーブルに押しつけようと力を入れた。が、その瞬間、グレッグの視線とリンクの視線が合った。

お互いの腕はぴくりとも動かない。

「おめえ……」

ふいに生真面目な顔になったグレッグである。

漁師の太い腕が動かないのをいいことに、リンクは力まかせに彼の手をテーブルに押しさえつけた。

どん、と派手な音がして、漁師の大きな手が板に打ちつけられる。

満面に汗を浮かべたリンクが、男たちに向き直った。丸テーブルの漁師たちは啞然あぜんとなって凍りこおついていたが、すぐに全員がだっと立ち上がった。

「てめえ、いったい何者だっ?」

「ぼくはホビット族の村から来たリンク」

「ホビット族?」

リンクは額の汗を拭ぬぐって笑う。

「ぼくは人間だよ」

「化けの皮を剥はいでやらあ」

殺気だった漁師たちが、リンクに近づこうとした時

「待て……」

グレッグがリンクの横に歩いてきて、並んで立った。

「約束は果たす。おれは確かにおめえに負けたよ。だから、さっき言ったとおり、おめえをロツテルベルグに送ってやろう」

豪放磊落な偉丈、夫の漁師が、髭の間から白い歯を剥き出して笑った。

ぱたぱたと羽ばたいて飛んでいたファニーが、こわごわとリンクの肩にとまった。

「ねえ……どんなトリックなの？」

「さあ、ぼくにもわからないんだ」

少年が肩をすくめてみせた。

グレッグの舟は、もう三十年近く使われた木造のものだ。

舳先から艫までひとつ跳びできそうな小さな代物だった。もっともこのハイラルの世界でこの時代、そんなに大きな船なんてめったになかったわけだが。

グレッグは甲板に有象無象に積み上げていた網や釣り道具を岸に降ろし、代わりにリンクとファニーを乗せた。

ひようひようと音を立てて波の上を風が舞い、黒雲が水平線に迫るように落ちていた。波濤は魔物の牙のように白く、荒々しい。ファニーが不安な表情を浮かべながら、リンクを見つめる。

リンクはとんがり帽子を目深に被り、仙人にもらったシルバーソードの柄に手をやってかなたを見ている。

「さあ、ロツテルベルグへ向かって出帆するぞ」

グレッグが一本帆柱に白い帆を張ると、それは吹きつける風に大きく膨らんだ。

舟は荒々しい波を舳先で碎きながら、大洋に向かって進み出した。

帆柱に手をかけて波のかなたを見つめるグレッグに、リンクがこう問いかけた。

「ねえ、おじさん。さっきはどうしてわざと負けてくれたの？」

「わざと負けてなんていねえ」

髭の漁師が優しげな双眸で少年を見た。そうしてあの、丸太のような腕を見せる。

「この腕の力じゃ、確かにおれっちのほうが上がった。だが、おめえの目の中にや、強い意志の力があつた。何かをやり遂げようとしているのがわかつた。おれはおめえのその目に負けたのさ」

「ぼくの……目に……？」

不思議な顔をするリンクのとんがり帽子を取って、グレッグは少年の髪をくしゃくしゃにした。

そうしてかっかと大声で笑つた。

「おめえの目は戦士の目だ。いずれ大物になる人間さ」

ぼん、ととんがり帽子を勢いよくリンクにかぶせたグレッグを、フアーニーが妙な顔で見ている。
「ふーん。男の世界なのね」

外洋へ出ても、波濤は猛り狂ったように舳先にぶつかり、舟はゆりかごのように大きく揺れる。
風は相変わらず唸りを上げて強く吹き、立ち上がった波が砕けてできる飛沫が、リンクたちの顔を
情け容赦なく濡らす。

「ロツテルベルグにや、日が沈むまでに着くだろう。だが、問題がひとつある」

グレッグは帆柱に手をやったまま、神妙な顔で前方を見つめている。その右手が、海のかなたを
指差した。そこに影があった。

何だろう、とリンクは見る。

水平線のちょうど真ん中あたりに、それに向かって突き立つ一本の柱。それはリンクたちが乗っ
ているものと同じような、舟の帆柱である。やや、海中から突き出し、左に傾いたまま、波に揺れ
て左右にゆっくりと動いていた。

「いったい、あれはどうしたんだ？」

ぽんぽんと、呆然とつぶやくリンクに、グレッグが答える。

「ゾーラどもにやられたのさ」



半人半魚の魔物だ。浜にいた漁師の老人の口から、その名前を聞いたばかりだった。

グレッグの舟が近づくと、帆柱を立てる舟は半ば海中に沈み、かしいでいるのがわかった。海面の下に沈む甲板の上に、漁師らしい男の死体がうつ伏せの姿勢で浮かんでいる。

死後ずいぶん経っているのだろう、体のいたるところ、無惨にも魚に食い荒らされてしまっている。が、明らかに魚じゃない、深い傷もたくさんあった。

「ひどい……」

リンクの後ろで、ファニーが顔を覆う。

「奴らがこの辺に現れるようになってからというもの、魚はさんざん食い荒らされる、おれたちだって襲われる、おかげでグルドの街の漁師どもはめったに海に出なくなった。酒場で漁師どもが荒くれているのは、そのせいだ」

「それなのに、あなたはぼくらを……?」

グレッグはもじゃもじゃの髭の中に歯を見せて笑った。

「だから、さ。おれは約束したことあ破らねえんだよ」

リンクもファニーも、この無骨な漁師が心底頼もしいと思った。

☆

ハイラルの西の果てに、ガラン溪谷けいこくと呼ばれる場所がある。

鳥も通わぬ深山のさらに奥。草木の一本もない荒れ果てた谷。切り立つ断崖だんがいに挟はさまれたそこには、黄色い有毒ガスを噴き上げる間欠泉かいつせんがあちこちに点在し、迷いこんだ動物の白骨がたまにころがっているばかりだ。

そんな溪谷を、幾人かの人影が歩いていった。

ほとんどがボロ切れのような衣を頭からすっぽりとかぶり、杖つえを突いている。フードの下にわずかにのぞく顔は黒く、両の目だけがらんらんと赤く光っている。とすれば、彼らは人ではないのか。

先頭から二番手をゆくひとり、天を突くような長身瘦軀ちようしんそうく。真つ黒なマントを羽織り、顔の部分を鋼鉄の仮面で覆おおっていた。その人影がはたと立ち止まり、仮面を額のあたりまで持ち上げる。リユグエル伯爵はくしやくであった。

魔族に属する彼だから、この死の谷を歩けるのである。だが、さすがの伯爵も、あたりを覆おほつすさまじいばかりの毒気はたまらぬと見える。痩やせ細ほそった顔はいびつにゆがみ、血の気もつけている。

「この先の岩山でございます」

先頭をゆく魔物のひとりが前方を指差す。

崖がけの途中にぽっかりと口を開けた、それは小さな洞穴ほらあなであった。

リユグエル伯爵と部下の魔物たちは、ためらうことなくその洞ほらに足を踏み入れる。鍾乳石しようにんゆうせきが無數の氷柱つららのように頭上に並び、足元は黄色い毒ガスが低く流れている。部下のひとりが松明を掲げ、彼らは黙然と歩を運びながら洞窟の奥へと向かった。

天井から無数にぶら下がっているのはキースと呼ばれる蝙蝠こうもりの魔物どもだ。だが、リユグエル伯爵一行に恐れをなしているのか、赤い目を光らせたままその場でじっとしたままにいる。

狭苦せまくるしい洞内どうないを進むと、やがて突き当たりの大きな石室にやってきた。

床の真ん中に地下へ降りるらしい石段がある。伯爵たちはその前で立ち止まった。

「ゼルダ姫の言ったとおりならば、この下にトライフォースが隠されているはずだ」
静けさの中にリユグエル伯爵の低い声が響く。

彼らは松明を掲げたまま、急ぎ足で石段を降り始めた。

押し迫ってくるように見える左右の石壁は、地下水が漏もれているのか濡ぬれて光っていた。それが松明の炎の明かりを乱反射させ、伯爵たちの顔が闇の中に揺れ動く。

石段を降りきると、狭い部屋があった。その真ん中に金属で作られた大きな箱かたが置いてある。蓋ふたに錠じょうがかけられ、ぴっちり閉じられていた。

「あれがそうなのか……」

リユグエル伯爵が顔につけた仮面をむしり取り、両目を大きく開いて笑った。

つかつかと箱に近寄り、右手を箱の蓋ふたに向ける。と、その指先から青白い光が迸ほとばしり、金属製の大きな錠が鋭い音を立てて弾はじけ飛んだ。

「へ知恵」のトライフォースよ。ついに我がものになったか」

興奮に顔を輝かせながら、伯爵が蓋に手をかける。

ゆっくりと蓋を開いた途端とたん、その顔が驚愕きょうがくに凍りつき、そしてしだいに醜みにくくゆがみ始めた。鼻の上に幾筋もの皺しわが生じたかと思うと、口が耳まで裂さけて両端から鋭い牙きばがせりだしてくる。

箱の中は空だった。トライフォースはここではなかったのだ。

「おのれ……ゼルダ。わしをだましおって」

醜い魔物の姿に変化した伯爵が立ち上がる。と、その目がららんと光りだした。顔に剛毛じょうもうが生じ、耳が大きく尖とがり出す。そして服がびりびりと破れたかと思うと、背中に真っ黒い巨大な翼つばさが生えた。

——おろかなり、魔王ガノンよ。

突如、洞窟のどこかにしやがれた声があった。

伯爵——いや、正体を現した魔王ガノンがゆっくりと振り返る。彼らの背後、石壁を背にして、

法衣を着た白髭しろひげの老人がそこに座っていた。その姿は闇の中に、ぼうと青白く光っている。

「何者だ？」

ガノンの誰何すいかに、老人が三日月のように目を細めて笑った。

——わしはこの荒れ果てた山に住む仙人じや。アッサムの姫にまんまとだまされて、かような地の果てまで出かけてきおったか。いかな魔界の王といえども、欲みじにつられると惨めな失態をおかす。情けないものだの。

「こしやくな！」

魔王がかつと口を開き、そこから紅蓮ぐれんの炎を吐き出した。しかしそれは老人の体を突き抜け、背後の石壁にぱつと散っただけだった。

——うははは。無駄なことじや。わしは幻にすぎん。

老人の姿がすつと薄れてゆき、そして見えなくなった。が、声だけは狭い洞内に響いている。

——地の底へもどるがよい、ガノン。さもなければ、お前は倒されるぞ。

「ふつ。伝説の勇者か。ばかめが。返り討ちにするだけだ」

魔王がいきまいたが、老人の笑い声はしばらく響きわたっていた。そして、それも消えてしまふと、彼らのまわりを取り巻く闇と静寂せいじやくだけになった。

「ムルチ、あのインパとかいう乳母うば。どこぞで見失ったと言ったな」

布切れをフードのように被った魔物が、すつとガノンに身を寄せた。

「北のスターウッドの森の中にございまする」

「こうなったら、仕方ない。追手を差し向けい。草の根を分けても捜し出し、あの乳母からへ知恵のトライフォースの在処を聞き出さねばならん」

「御意」

魔王は鼻に皺を寄せたまま、空の箱を振り返った。

その箱は、ガノンににらみつけられた途端、無数の火の粉を散らして粉々に吹き飛んでしまった。

☆

リンクたちの乗った舟は、夕刻間際にもうひとつの大陸に着いた。

ロツテルベルグは港から少し歩いた山の麓にある。舟で待っているというグレッグを残して、リンクはファニーと一緒に街へ向かった。

暮れなずむ黄昏の時刻、平原の真ん中に広がるロツテルベルグの街は、まるで絵のように美しく見えた。街はアッサムに負けないくらい大きく、賑やかなところである。もっとも、今のアッサム

にそんな光景は望むべくもないが。

目抜き通りにあたる幅の広い石畳の道を歩いていると、向こうからひとりの女が歩いてくる。ちようどいい、訊いてみよう。そう思っ、リンクは声をかけた。

「あの……この街の近くに洞窟があると聞いたのですが」

女は立ち止まって、リンクの顔をまじまじと見つめた。

はて、まずいことでも訊いてしまったかな、と思った。しかしたかが洞窟のことである。リンクは妙な気持ちになって、女を見た。

髪が長く、細面の中年の女性だった。頭からすっぽりと被る形の服を着ていて、左の腕にきらきらと光る大きなブレスレットをつけていた。その彼女が、ややあつてようやく口を利いた。

「あなた……どこから来たの？」

唐突な質問に、今度はリンクが驚いてしまふ。

「アッサムの街から、いやスターウッドにあるホビットの村から来たんです」

「ホビット……？ 妖精ね」

「ええ。ですが、ぼくは——」

人間ですと言おうとした時、ふいに女の背後から声が出た。

「ダイアン。そんなところにいたのか？」

見れば、道の向こうに大きな牛に荷車を引かせた数人の男女がいる。どうやら、旅の一行なのだろう。三台もある荷車には白い幌ほろが張はつてあり、何やらいっぱい積みこまれているようだった。メ
ンバーの中には小さな子どももまじっていて、母親らしい女性に手を取られて、リンクたちを見つ
めていた。

ダイアン、と呼ばれた女は、彼らに向かつて歩き出し、ふいに立ち止まってリンクを見た。その
目が妙に優しげだった。

「洞窟は街の東、大きな池の近くにあるって聞いたことがあるわ。連れて行ってあげたいけど、も
う街を出ななきゃならないの」

女が一行のもとに歩み寄ると、荷車に乗った彼らが出発した。

リンクは牛車ぎしやの白い幌ほろが、薄闇の向こう、街の外に見えなくなるまでぼかんとして見つめてい
た。

「リンク……?」

ファニーの声で、はっと我に返る。

もう一度、彼らが去った街路のかなたを見てから、リンクはなぜかため息をついた。魔物まぶたが徘徊はいかい
するこのハイラル。きつと危難いなんに満ちた旅だろう。そんな旅を、彼らはどうして続けているのか。

「ねえ。あんな中年女の色香いろかに惑まどわされちゃったんじゃないでしょうね?」

ファニーがリンクの前を飛びながら、腕組みをしている。

「ばっかっ！」

むっとなったリンクが、ファニーの頭を軽くこづく。

「洞窟の場所はわかったんだ。さっそく行くぞ」

「えー？ だって、もう日が暮れちゃうのよ。どこかに泊まって行こうよ」

「ぐずぐずしていると、ガノンがふたつ目のトライフォースを見つけちゃうんだ。そうになったら、

いくらなんでも勝ち目がないんだぞ」

いそいそと歩き出すリンクを、ファニーが仕方なしに追った。

迷路探検に必要なものを街で買った。松明代わりたいまつがに使う大きな蠟燭ろうそく。壁を壊すこわための爆弾。なけ

なしの金がたちまち底をつきかけたが、こればかりは入手しないわけにはいかない。

さてロツテルベルグを出ると、道は一本道になった。

平原をまっすぐつつきり、やがて旅の女が言ったように池があった。それは実に美しい——水の澄み切った大きな池で、もしも空が晴れていたら、水鏡のように満天の星空がそこに映し出されていただろう。

池を過ぎたところに岩山がある。果たしてそこに、地下迷路の入り口らしい洞穴ほらあなが口を開けてふたりを待っていた。

足を踏み入れると、すぐに石段があつた。

蠟燭に火を点け、リンクは慎重に降りてゆく。地下に着くと、道が三方に分かれていた。天然の洞窟と違い、壁も天井も幾何学的な直線で構成されている。こういつた地下迷宮は、古代の先住民族が長い年月をかけて造つたものだといわれている。

迷宮の奥に宝を隠しておくためだ。それを目当てに盗賊がうっかり足を踏み入れようものなら、二度と出てこれられないような複雑な造りになっているらしい。だが、今はこんな真つ暗な地下坑をいいことに、さまざまな獐猛な獣やもつと恐ろしい〈夜のものども〉が棲みついているのだという。

「リンク……何だか、ここ嫌」

不安そうなファニーの声が、狭い通路に響いた。

妖精のファニーでなくとも、このあたりに満ち満ちている邪気は察することができるとリンクは腰の剣を抜き、真ん中の通路を選んで歩き出した。床の上に時おり散らばっている白いもの、それは骨であつた。迷いこんで死んだ動物のものなのか、それとも――。

天井から滴り落た地下水が、ちょうどファニーの頭の上に当たつた。

「きゃっ！」

彼女が悲鳴を上げて、リンクの肩にとまつた時、

「しっ——」

リンクは目を細めながら、闇の向こうを見つめていた。

そこにぼうつと青白く光るもの。それは骸骨^{がいこつ}だった。長い剣を持った骨の化け物が数体。ゆらゆらと揺れながらこつちにやってくるのだ。ファニーがまたきやつと叫んで、リンクの後ろに隠れ、彼は勇敢^{ゆうかん}に剣を構えて魔物をにらみつけた。

「くかかかか。生きた人間の匂^{にお}いがする」

「くかかかかか。久しぶりにご馳走^{ちそう}にありつけるて」

骸骨たちは甲高い声^{かなたか}でしゃべり合いながら、リンクのすぐ前までやってきた。

そうして、かちやかちやと耳障りな骨の音をさせながら、剣を振りかざしてかかってくる。一体の剣をとっさに盾^{たて}で受けて、素早く骸骨の背後に回りこんだ。背中からえいとばかりに剣を突き入れたが、切っ先が肋骨^{ろっこつ}の間を通過して向こうに抜けてしまった。

「リンク！ スタルフォスは首をはねなきや倒せないわ！」

天井近くに避難したファニーが叫ぶ。

「ちくしょう。早くそれを言えっ！」

剣を骨の間から抜きざま、彼は骸骨の化け物スタルフォスの頭^{ずがい}骸を一気にはねた。

石の床の上を骸骨の頭^{かむ}が濁いた音を立てて転がると、続いて胴体^{かむ}ががしゃがしゃと音を立てて床



に崩れ落ちた。

行ける――。

リンクはホワイトソードを振り回し、二体、三体目のスタルフォスの頭を斬り落としていく。最後の一体を倒したところで、リンクは疲労のあまりに床の上に座りこんだ。

ところが、である。

「リンク。後ろっ！」

ファニーが空中を飛びながら指差す。

肩越しに振り返ったリンクが、次の瞬間、あつと叫んだ。

すさまじい羽ばたきの音とともに、闇の向こうから無数の赤い光がこっちへ押し寄せてくるのだ。よく見れば、それは目であった。蝙蝠こうもりの大群、いや蝙蝠によく似た姿の魔物キースの大群が、絹を引き裂くさような奇怪な声で鳴きながら、リンクめざしていつせいに飛んでくるのだ。

「うわっ！」

彼はとっさに立ち上がり、再び剣を構えた。

その時、彼はふいにホワイトソードのもうひとつの使い方を思い出した。

切っ先を魔物の大群に向け、柄つかの部分にある小さなボタンを押すと、刀身から迸ほとほとった青白い光の矢がキースめがけて飛んだ。

ぎやつ！

一度に数匹がきりきり舞いして床に落ちる。

「こいつはいいっ！」

リンクは次々と剣から光を発射させ、襲いかかる魔物をやつつけていく。だが、いかんせん敵はその数にものをいわせ、彼めがけて確実に迫りつつある。こうなると何匹倒してもきりが無い。

「ファニー！ どこかに協道は？」

「あるわ。右手に石の扉とびらみたいなものがある！」

「開けてくれ！」

「あたしじゃ無理よお！」

矢継ぎ早はやに剣から光を放ちながら、リンクは彼女が言った石の扉に駆け寄った。

蠟燭ろうそくで照らしてみると、扉の脇にスイッチらしい金属の丸いものが取り付けられている。彼は躊躇ちゆうちゆうなく、それを力いっばい押した。

ごうん。腹の底に響く重々しい音とともに、石の扉が横にスライドした。

「飛びこめっ！」

リンクとファニーが扉の向こうに入った途端とたん、それはまた重々しい音とともにぴしやりと閉じた。

ふうつ。

ふたりそろって、深いため息をつく。

そこは狭い石室だった。まっ平らな壁や天井が、ふたりに迫っている。蠟燭でよく照らし出してみると、反対側の壁に同じような石の扉があるのがわかった。その扉の近くに白骨が転がっている。

リンクははっとしたが、それは人間のものだった。迷宮で迷って死んだ誰かなのだろうか。あるいはさっきのような魔物に殺されてしまったのか。その骨の手には、一枚の紙切れが握られていた。

「何だろう？」

取り上げてみると、ごちゃごちゃと複雑に入り組んだこの迷宮の、入り組んだ部屋や通路の配置を示した図が描かれていた。ずいぶんと古いものらしく、あちこちが破れかかっている。この人は気の毒だけど、リンクたちにとってはまさに好都合だ。

見れば見るほど、複雑怪奇な迷路だった。

リンクははたと考えた。あの乳母^{うは}が、もしも自分でライフフォースを運んだのでなかったら？

そう、四つの断片に分けたライフフォースを一時にハイラルのあちこちに隠すためには、これを手分けして運ばせなければならぬはずじゃないのだろうか？

そこでリンクは改めて、白骨死体を見つめた。

彼が思ったとおりだった。死体の腰には剣が差してある。その剣の柄つかには、これはまぎれもないアッサムの国王の紋章が刻まれているではないか。

「なんてことだ……」

リンクは死体を前に、黙禱もくとうした。

「どうしたの？」

たずねるファニーに、こう答えた。

「この人は、〈知恵〉のトライフォースの断片のひとつを、この迷路のどこかに運びこんだんだ。そうして、ここで死んだ」

「どうしてなの？」

「おそらくは、自分で毒を飲むかどうかして果てたんだと思う。そうしなきゃ、いつかは魔王の配下に捕まって、この場所を吐はかされることになるから」

「そんな……かわいそう」

ファニーがはらりと涙を落とした。

「さ、行こう。早いとこトライフォースを見つけないと」

ふたりは次の石の扉を開いた。

この迷路は、同じような石室がいくつも並ぶ構造になっていた。隣の部屋への扉はいくつもあり、それをしつかりとチェックしていないとたちまち迷ってしまう。リンクは新しい部屋に入るたびに地図にチェックマークを入れた。

数え切れないほど部屋を抜け、いよいよ最奥部の大広間に到着した。そこでリンクを待っていたのは――、

☆

村の中央広場に三つの松明たいまつが灯ともされ、長老はその赤々とした照り返しを頬ほおに受けて立っていた。どんよりした夜空には今も妖雲よううんが渦巻うずまき、時として不気味な雷光をきらめかせている。

「リンクが旅立ってから、はや二週間が過ぎた」

杖つえをつく長老の声に、村人たちが耳を傾けていた。

「〈夜のものども〉の跳梁ちやうりやうは、相変わらずやむことを知らぬ。先日も森に近い山道で、街の人間が何人か殺されておった。魔物どもが現れるのは、このハイラルに邪悪なエネルギーが満ちておるからじゃ」

「長老。奴らを地の底へ追い返すには、トライフォースをそろえるしかないのか？」

ひとりの村の男の問いに、長老がうなずく。

「だからリンクをやったのじゃ。伝令の言づてによれば、ハイラルの方々を回っておるようじゃが、いまもってトライフォースを見つけ出してはおらんらしい。だが、皆のもの。ことここにいたって、ひとつだけ吉報を伝えることができるようになった。インパ殿が、先刻ようやく長きにわたる昏睡から醒めた。トライフォースのことを知っておるのは、このハイラル広しといえども、あの乳母だけじゃ」

おお、と村人がざわめく。

「まだ口を利けるほどではないが、じきに回復するじゃろうて。そうすれば、〈知恵〉のトライフォースを隠した場所を聞き出し、リンクに伝令を放つこともできよう。あの魔王を倒すためには、何としても〈知恵〉のトライフォースを手に入れなければならん」

「だが、長老。それはガノンも狙っているはずだ」

「リンクが手に入れる前にガノンの手に渡ったら、この世は本当の闇に閉ざされるぞ」

ざわざわと騒ぐ村人を制するように、長老が片手を上げた。

「リンクを信じることじゃ。あれはきつとやりとげる。わしは信じておる」

そうだそうだと声を上げる村人たちの騒ぎは、広場からやや離れた水車小屋にまで聞こえていた。その小屋の中で、少女マイアがインパの世話をしていた。

老婆の体を冷やさぬように暖炉の火を保ちながら、忙しそうに薬の調合をしている。悪夢でも見ているのだろうか、インパは時おりうなされては寝返りをうつ。そのたびに、マイアは老婆に毛布をかけなおし、またすり鉢の中の薬をすりこぎで挽く。

「姫様……」

老婆の寢言に、マイアが振り向いた。

インパは毛布を握りしめて、苦しそうにあえいでいる。すぐに寝台に歩み寄って、老婆の額の汗を拭いてやり、はだけた毛布を掛けなおした。すると、インパがはっと目を覚ました。

あわてて上体を起こそうとしたところを、少女に止められた。

「大丈夫。ここはホビットの村です」

大きく目を開いていた老婆の視線が、マイアの顔を捉える。インパはようやく安らかな顔になって、再び横になった。

「そうじゃった……。わしはあの子に助けてもらったんじゃ……」

そうして小屋の中に視線をめぐらせた。

「あの子……リンクとやらは、どこへ？」

「旅立ちました。魔王ガノンを倒すために」

少女の声に、老婆が不安な顔を浮かべた。

「魔王を倒すためには、隠された〈知恵〉のトライフォースを回収せねばならん。すべての在処^{ありか}を知るのには、このわしだけじゃぞ」

「はい。あたしたちに教えてくだされば、村から伝令を放ちます。そうすれば、きっとリンクはトライフォースを見つけ出すでしょう」

老婆はまた毛布をはねのけて起き上がった。わなわなと唇^{くちびる}を震^{ふる}わせ、青ざめた顔でマイアを見ている。苦渋^{くじゆう}にゆがんだ表情のまま、インパはマイアの手をつかんだ。

「トライフォースを隠した場所は、どこも危険なところじゃ。あの子ひとりで幾多の魔物や恐ろしい罠^{わな}を突破してゆけるのか？」

「はい。私は信じてます。リンクなら、きっとそれができる」

マイアの澄み切った瞳に、インパがはっとなった。

その時だった。

水車小屋の外から、突如として阿鼻叫喚^{あびきょうかん}が聞こえてきた。そして人々が走り回る音。無数の矢が放たれる風切り音。

「まさか……追手が来たのでは……」

マイアがつぶやいた。

小屋の外で騒々しい足音がし、入り口の木の扉^{とびら}が派手^{はで}な音を立てて蹴破^{けやぶ}られた。はっと振り返る

マイアとインパの目の前、水車小屋の入り口から長大な剣を構えた数人の男たちがどやどやと押し入ってきた。

蒼白そうはくになって、少女が立ち上がった。

☆

広い石室を揺るがすような、大音声だいおんじょうほうこうの咆哮ほうこうがとどろいた。

その場に凍りつくリンクとファニーの目の前、そこに巨大なふたつの頭を持つ緑色のドラゴンがいた。全身を覆う分厚い鱗うろこは、リンクの持つ松明たいまつの明かりを反射させてぎらぎらと光り、かっと開かれた口から、すさまじい熱気を漂わせながら炎がちらちらと漏れ出している。

「こいつは、グリオークだっ！」

リンクが叫んだ。

魔物まぶつに疎い彼でも、グリオークのことは知っていた。

廃れた古城や廃墟はいきょの地下に棲みつく、魔力を持ったドラゴンである。数万年から数十万年の寿命があり、口から吐き出す炎は岩をも溶かす。そしてひとたび巨大な翼つばさを広げれば、音よりも早く空を飛翔ひしやうすることができるという。

「あんなのにはかなわないわ。逃げようよ、リンク！」

「ばっ。トライフォースはあいつの後ろにある扉とびらの向こうだっ！」

リンクが地図をかざして言う。

ドラゴンの真後ろに、錆さびびついた鋼鉄製のドアがあった。〈知恵〉のトライフォースの第一の断片は、そのドアの向こうに隠されているはずなのだ。だとすれば、グリオークを倒す以外にそれを手に入れる方法はない。

そうこうしているうち、怪物がふたつの首をぐつとたわめ、大きく開いた口から真っ赤な炎を吐き出した。ごうつとすさまじい音を立てて、とっさにリンクがかざした鋼鉄の盾たてにぶつかる。炎は四散したが、盾の把手とってがたちまち熱くなった。

「くそっ。こうなりやイチかバチかだっ。戦たたかうぞ！」

盾を捨てて、リンクは床を蹴けった。

ドラゴンが吐き出す炎の塊かたまりをかくぐり、怪物に最接近してその首のつけ根のあたりをホワイトソードで貫つらぬこうとした。が、固い音とともに、剣は跳ね返されてしまふ。間髪入れず、返す刃で胴体に斬りかかった。

がっ！

火花が飛び散り、次の瞬間、リンクは床の上にすっころんでいた。

「リンク、立って！ 危ないっ！」

天井近くを飛びながら、フアニーが悲鳴を上げる。

とっさに起き上がった瞬間、間近まで迫っていたグリオークの首のひとつが炎を吐き出した。ごう、と音を立てながら球状の炎がリンクを襲う。それを危うくかわしざま、彼は両手で構えた剣で執拗な攻撃をくわえる。

右の首にうちかかった。

たまさか、そこが鱗のいちばん薄い場所だったらしい。剣は首にめりこみ、傷口から緑色の血が音を立てて迸る。素早く剣を抜きざま、

「ていつ！」

気合いもろとも、その首を一気にはねた。

グリオークの右の首は、どざりと重々しい音を立てて床に転がり落ちる。

だが、怪物はしぶとかった。残された左の首をしきりにくねらせながら、リンクめがけて炎を吐き出す。そうして重々しい胴体をずるずると引きずりながら、彼を石室の隅にじわじわと追いつめにかかった。

リンクはとっさに剣の切っ先を怪物に向け、柄のスイッチを押す。

立て続けに放たれた青白い光の矢が、グリオークの首を貫いた。怪物はぐわつと唸りを上げて首

をよじらせた。リンクはここぞとばかりに、ホワイトソードの光をグリオークに飛ばす。

だが、その攻撃に夢中なリンクは、自分に迫った危険に気づかなかつた。

彼が斬り落としたグリオークの頭。それがかつと目を見開いたかと思うと、突如として空中に浮き上がり、リンクめがけて襲いかかってきたのだ。

ファニーが悲鳴を上げた。

それに気づいたリンクが、とつさに剣で打ちはらう。

宙を舞うドラゴンの首は攻撃を巧みにかわし、反転しながら再びリンクに向かって飛んできた。

同時に、グリオークの本体も彼に向かって残された首を回した。

完全な挟み撃ち^{はさみうち}。かわす余裕はとてもない。

こうなれば、方法はひとつ。肉を切らせて骨を断つ。

宙を飛んできたグリオークの頭が、リンクの右肩を襲う。一本一本が鋭い短剣のような無数の牙^{きば}が肩に食いこみ、肉を引きちぎる激痛。だが、リンクはそれに臆することなく、前から迫ってきたグリオークのもうひとつの首を一気に斬り落とした。

ふたつの首を本体が失った途端^{とたん}、宙を舞っていた首は床に落下した。

同時に、リンクはがつくと膝^{ひざ}をつく。

グリオークにかみ切られた右肩から、大量の血が流れ出している。腕がもぎ取られなかったのが

奇跡のように思える。だが、利き腕はもう使いものにならない。

リンクは苦痛に顔をゆがめながら、ファニーを振り返った。

「やっぱり……ちよつと、無茶だったかな……」

「リンク！」

ファニーが羽ばたきながら降りてきた。

彼の体から血が流れ出すにつれ、意識も遠のいているらしい。リンクは眠るように目を閉じて、床に倒れ伏した。このままだと、リンクは死んでしまう。

妖精のファニーはリンクの生命エネルギーを回復させる術を知っている。だが、それには清冽な水が少々必要なのだ。これに呪文をかけて〈命の水〉と化したものを飲ませれば、リンクの傷はたちまち癒えて、生気もどつてこよう。

だが、水はどこにある？

ファニーはあたりを見わたした。

泉の妖精であるファニーは、水の匂いに敏感だ。それはどこからか微かに漂っている。近くに水があることは間違いない。

巨大なグリオークの死骸の向こうに、リンクが行こうとしていた鉄扉がある。彼女はリンクが握りしめていたホワイトソードを引っ張るようにして扉に向け、柄の部分のボタンを思い切り強く蹴

飛ばした。

刀身がかつと光り、迸った光芒が矢となって扉を貫く。一瞬後、それは粉々になって吹き飛んだ。爆炎がおさまると、ファニーは素早く羽ばたいて飛んだ。扉のあつた穴を抜けると、向こうは狭い部屋になっていた。

その部屋の床の真ん中を細い水路が走っていた。

地下水をそのまま通しているのだろう、水はあくまでも透明で、澄み切っている。ファニーはリンクのところにもどると、彼の背囊から水筒を取り出した。蓋を取って中の水を捨ててから、両手で引きずりながら後ろ向きに歩き出す。

長い時間かけて水筒を水路の畔まで運び、中身の半分ほど水を入れてから呪文を唱えた。そして、今度はリンクが倒れている部屋まで、それを必死に運んでいく。

「リンク、リンクっ！」

彼の名を呼ぶと、微かに目をしばたかせた。大丈夫。まだ息がある。

ファニーはリンクの口をこじ開けて、水筒を傾けながら中の水を飲ませた。

ごふっ。ごふっ。

最初は激しく咳こんだものの、リンクは水筒の水をうまく飲みこんだ。

すると、みるみるうちに彼の頬に血の気がもどってきた。肩から流れ出していた血がぴたりと止

まり、うずいていた傷の痛みがすつと引いていく。同時に、お腹のあたりから活力が湧き出し、リンクはやおらむつくりと起き上がった。

「あれ……？　いったいどうしたんだ？」

肩の傷口のあたりをさすると、怪物にかみ切られたあとは、最初からなかったようにふさがっていた。ただ、服だけが破り取られているだけだ。

「よかった」

ファニーが安心して笑う。

魔法の水の効果はてきめんだった。リンクは立ち上がり、不思議な顔で自分の体を見下ろしている。そして首を斬り落とされたグリオークの死骸の向こう、迷宮のいちばん奥の部屋を見る。

ファニーが水を汲んだ水路に囲まれるように、石座がある。その上に黄金色に光る小さな三角錘さんかくすいの石が安置してあった。

「これが？」

リンクが部屋に入り、石をつまみ上げた。

「へ知恵のトライフォースの断片なのか？」

「あ、リンク！」

ふいにファニーが叫んで、石座の隣を指差す。

そこに床に穿^{うが}たれた井戸のような穴があった。のぞきこむと、ずいぶんと深い場所に水面に映るリンクたちの顔が見える。どうしてこんな場所に？ リンクが不思議に思っていると、ファニーが呪文を唱え始めた。

クルガン・プリソマラ……

それは前にリンクが唱えたことのある呪文だった。

ファニーの声が、深い井戸の底に降りていくと、突如として井戸の底がまばゆい光芒^{こうぼう}を放つ。直後、きらきらと光る七色の光の粒をまき散らしながら、数人の小さな妖精^{ようせい}が井戸の底から飛び出してきた。

ファニーそっくりの衣装で、透明な羽を羽ばたかせながらリンクの頭上を舞うと、口をそろえて美しい音色で歌を唄い始めた。もちろん、リンクが聞いたこともない歌だったけど、それは何だか心が休まるような気持ちのいいメロディーだった。

「ガノンの魔力で、あたしたちの仲間はみんなこんな場所に封^{ふう}じこめられてしまっているの。だから、呪^{のろ}いの井戸からとき放たれて喜んでいるのよ」

リンクの肩の上でファニーが言った。

やがて妖精たちは金色の鱗粉^{りんぷん}を撒^まきながら、迷宮の外へ向かう通路へと向かった。

「彼女たちについて行けば、ここから出られるわ」

フアニーの言葉にうなずいて、リンクは歩き始めた。
手にしたばかりのトライフォースの断片を、大事に握りしめたまま。

☆

水車小屋に押し入ってきた男たちは、みな黒づくめの衣装をまとい、長い剣を持っていた。
乳母うばインパを見つけた途端、彼らの目が異様に光った。

「そのババアをもらってゆくぞ」

いっせいに小屋の中に足を踏み入れた。

マイアは男をにらみつけながら、暖炉だんろの脇の柵たなの後ろから、自分の身長ほどもあろうかという長大な剣を引っ張り出した。それを青眼せいがんの形に構え、男たちの前に立ちふさがる。

彼らはふっと鼻で笑った。

「ホビットの小姐こむすめ風情ふうせいが、こしやくな」

斬りかかってくるひとりの剣を素早く横に打ちはらい、マイアは目にも止まらぬ早さでその腹を横一文字にかき切った。鋼鉄が肉を断つ音とともに、青色の血がマイアの顔に飛んだ。

剣を構えなおしながら、マイアが残る男たちをにらんだ。

「魔物か」

「いかにもそうだ。なかなかの腕だな、小娘」

男たちの姿がみるみる変貌し始めた。空間がねじ曲がったように顔がぐにやりと変形し、口が耳まで裂け、鼻面が前にぐいと突出した。醜悪にたわんだ唇の間から、鋭い牙が伸びてくる。

モリブリンであった。

「おとなしくババアを渡さねえと、その綺麗な顔の皮をひん剥いてやるぜ」

獣面の口元をゆがめながら、モリブリンどもがマイアに襲いかかってきた。その剣を跳ね返し、魔物を斬り捨てながら彼女が叫ぶ。

「インパ様。早くお逃げくださいっ！」

乳母はその場に凍りついたようになっていたが、マイアが指し示す裏口の扉を見つけて走り出す。

一方マイアは、二匹、三匹目を倒してから、最後の一匹——いちばん屈強そうなでかいモリブリンと剣を交えた。鏢迫り合いのさなか、さすがに怪物はその巨軀にものをいわせ、小柄なマイアを押しさえにかかる。

じりじりと押されるままに後ずさった彼女は、暖炉の近くに置きっぱなしになっていた薬の鉢を見つけた。素早く剣を手放すや、さっと身をかがめて鉢を拾いざま、モリブリンの顔に調査した薬

の粉をかける。

ぐおつとのけぞって目を覆う怪物。その隙をついて、マイアは床から剣を拾い上げ、モリブリンの胸の真ん中を一気に刺し貫いた。背中まで貫通した剣を自分で引き抜こうと怪物はあがいていたが、やがてそのままどっかりと仰向けに床に倒れる。

「インパ様っ！」

マイアは裏口に向かって駆け出した。

扉の近くの壁に、ボウガンが立てかけてある。その本体と矢筒を取って、彼女は急いで水車小屋の外へ出た。

往来には阿鼻叫喚の地獄が現出していた。

人々は長剣を持った男たちや、その正体を現した怪物に襲われ、惨殺されている。女や子供とて容赦はない。中には武器を取って勇猛果敢に戦いを挑む男たちの姿もあったが、敵は圧倒的に強い。

インパはどこへ逃げたのか。そして長老は？

マイアはボウガンを構えながらあたりを見回す。家々は次々と火を放たれ、漆黒の夜空に向かつて炎を勢いよく立ち昇らせ始めている。魔物どもはインパを捜すという大義名分も忘れ、ただひたすら殺戮や破壊のみに夢中になっているようだった。

「乳母様！」

マイアは声を限りにインパの名前を呼ぶ。
返事はない。

敵に捕まってしまったのか。そんな不安が脳裡を掠めたその時、彼女は往來の向こう、小屋の壁のところに重ねられた樽の山の後ろに、老婆の姿を認めた。油断なくボウガンを構えたまま、マイアはインパのところへ走る。

「乳母様。ご無事で」

インパは皺だらけの顔を涙に濡らしていた。

「すまぬ……、このわしのために、村の人々を……」

「逃げまじよう、乳母様。あなたが捕まれば、みんなの犠牲は無駄になります」

マイアは老婆に肩を貸し、村の出口に向かって走り始めた。

村は紅蓮の炎に包まれるように燃え上がり、その明かりが夜空に赤々と映えていた。中央広場のあたりでは、人々の逃げまどう姿。そして襲いかかる魔物どもの影が蠢いて見える。その中、横倒しになって燃える松明の傍らに倒れる長老の姿があった。

「長老様あ！」

マイアが駆け寄ると、白髭の老人は槍で胸を貫かれていた。光を失いかけた目で彼女の姿を捉え

ると、ひゅうひゅうと息を漏らしながら最後の声を押し出した。

「リンクを捜すのじゃ……。〈知恵〉のトライフォース……。の在処を……」

そうして、がつくと息絶えた。

マイアは涙を拭きながら、立ち上がった。立ちすくむ老婆を助けて走り続ける。

深い森の奥に分け入ると、やがてふたりを静寂が押し包んだ。

PART4

試練

ロッテルベルグの街を過ぎて港へもどつたのは、翌日の夕刻ゆうごくだった。

たそがれの光の中で、グレッグは約束どおり舟を埠頭ふとこうに繋つないで待っていてくれた。そして元気そうなりリンクたちの姿を見て、その丸太のように太いふたつの腕で力強く抱き締めた。

「無事に生還してくれたか！」

そうしてリンクの持っていた〈知恵〉のトライフォースの断片を見て、この屈強な漁師はふと思案にくれた。

「どうしたの？」

少年に訊きかれて、グレッグはこう言った。

「それと同じようなものを持った兵士を、おれの仲間の漁師が見たそうだがぞ」

「え？」

「ハイラルの中央部にレムール高原ってえ場所がある。そこに廃墟はいきよがあつてな」

リンクもそれは聞いたことがある。廃墟とは失われた古代文明の遺跡である。グレッグの仲間が見た兵士とは、おそらくインパに依頼されてトライフォースの断片を運んだ部下のひとりであろう。だとすれば、その廃墟の奥深くに、第二のトライフォースの断片が隠されているということになる。

リンクにとっての試練は始まったばかりだった。

トライフォースのもうひとつの在処ありかはこうしてわかったが、他の隠し場所がまったく不明だった。

「さ、もどるぜ」

グレッグが舟をつなぎ止めた繩なわを外はずし、帆ほを張った。

穏おだやかな順風だったが、舟は波の上を滑すべるように進み始める。西の空に夕焼けが燃え、鏡のように澄み切った海面を毒々しいまでの赤色に染め上げていた。

「おれは漁師だ。海に生きて、海に死ぬ。だから、陸の上のことなんぞ、これっぽっちも知りはいねえ」

グレッグは帆を操る綱を持ったまま、夕風に髪をなびかせていた。

「だが、げんにおれっちはあのゾーラどものせいで、漁はぱったりだし、この世の中、妙な具合に狂い始めている。それはよくわかる。リンクとやら、おめえはこの狂った世の中を正すことができるのか？」

「ぼくにはわからない」

リンクは海のかなたを見つめながら言った。

「——伝説の勇者とか、トライフォースの魔力とか、ぼくにはまだぴんと来ないんだ。だけど、も

しもあの恐ろしい魔王をぼくが倒すべく運命づけられているなら、ぼくはやっぱりその運命に従おうと思う」

「おめえは立派だよ」

グレッグが髭ひげだらけの口で笑った。

「——最初見たときはただのガキだと思ったが、おめえには何ちゅうか器量きりょうつちゅうもんがある。今に、おれなんぞ手の届かないどえらい人間になるんじゃないかってな。そんな気がするんだよ」

「ぼくはそんな……」

頬ほおを染めるリンクの肩の上で、ファニーが得意満面な顔をしてみせた。

「なんたって、リンクは伝説の勇者の血を引いてんだもん」

なおも顔を赤くしたリンクが、何の気なしに暗い波間を見た時だった。

海面にぼつんと浮かんだいくつかの黒い影。それが夜目あざにも鮮やかな燐光りんこうのごとき双眸そうぼうを光らせた。頭やこめかみの後ろの部分に鱭ひれのようなものをつけ、顔面は無数の鱗うろこでぎらぎらと光っている。それが、鋭い牙きばを無数に並べた大きな口を開いた。

「グレッグ！」

リンクが指差す方を見て、屈強な漁師が悲鳴に似た声を放った。

「ゾーラだっ！」

それはまぎれもなく、半魚人のゾーラであった。

舟を取り囲むように、波間にいくつもの顔を浮かべている。どれもが夜光虫のように青白く目を光らせ、時おり、白い牙を見せて大きな口を開く。と、その口からいつせいに白色に光り輝く球体が放たれた。

「うわっ！」

リンクが、そしてグレッグがあわてて身をかがめて避ける。光球は海面にその姿を映しながら、波間すれすれに舟に向かって飛ぶ。いや、一瞬高くせり上がった波すら突き抜け、彼らを襲う。危ういところをかわしたリンクたちが体勢を立て直す間もなく、第二、第三の光球がおそるべき速度で波間を走ってくる。

某大学教授が提唱するように、世にあるUFO現象のすべてがこれで解決できるとはずいぶんと無理な理論ではあるが、この光はまごうことなきプラズマの輝き。すなわち怪物ゾーラは体内でプラズマを発生させ、それを獲物めがけて飛ばす力を持った魔物なのだ。

リンクは剣を構えたが、金属板すら貫通するというプラズマ現象を、盾ではらいのけたり剣でたたき斬ったりはできない。彼はとっさに背中への矢筒から一本抜き取り、甲板に置いていた弓を拾ってこれをつがえた。

ぐいと弓弦を引き絞り、波間に顔を出すゾーラを狙う。

ひようと射た瞬間、ゾーラは海中に身を沈めた。矢は怪物の浮かんでいた海面に白い飛沫しぶきを上げただけで終わってしまった。その素早い動きには、とても追いつけない。怪物は反撃とばかりに、輝く光球を四方八方から舟に向けて放つ。

そのうちの一発が、リンクの脇を掠め、帆綱ほづなを取っていたグレッグにもろに当たった。たちまち彼の背中がめらめらと青白い炎を発して燃え上がる。グレッグは熱さのあまりに、夜の海にざんぶとばかりに転がり落ちた。

リンクははっとなって、腰の剣を抜いた。

プラズマ光球の襲撃しゅうげきをかわしながら、ホワイトソードの刀身から青白い光の矢を放った。一瞬後、ゾーラの一匹が頭を吹き飛ばされ、ゆらゆらと揺れながら暗い海面下に沈んでいった。

リンクは向き直りざま、二撃目、三撃目を波間の怪物に向けて放つ。

立て続けに数匹が剣の光に葬ほうむられると、その威力いりよくに恐れをなしたのか、ゾーラはいつせいに海面下に身を沈め、二度と浮かび上がってこなかった。

「グレッグ！」

リンクが甲板に剣を置いて、波間に飛びこんだ。

屈強な漁師の体は、暗い海の底に向かってゆっくりと沈んでいく。その背中には——恐ろしいこととまだ炎が揺らめいていた。リンクは必死に水を掻かいて深く潜もぐり、グレッグの体を持ち上げるよ

うにして浮上しようと足で水を蹴った。

船縁ふなべりに彼の体を持ち上げ、甲板の上にようやく引き上げた時、グレッグの背中でした。こく燃えていた炎はようやく消え去った。彼の背中は広範囲にわたって無惨にも焼け焦やげていた。水中に飛びこんだにもかかわらず、プラズマの炎は燃え続けたのだ。

しかしてこの男にはまだ意識があった。

「ファニー！ 命の水をくれ！」

小さな妖精ようせいはうなずいて、水筒の水をリンクに渡す。

「早くして、リンク。生命の炎がほとんど消えかかっている」

水筒の蓋ふたを取るもどかしく、彼はグレッグの口に命の水を飲ませた。と、屈強な男の顔にみるみる生気がもどり、彼はゆっくりと目を開いた。そうして、霞かすむ目で少年の姿を捉とらえると、その腕でリンクを抱き締めた。

「助けてくれたんだな……」

「礼なら、ファニーに言ってくれ。ぼくも一度ならず命を助けてもらったんだ」

グレッグは優しげな目で、小さな妖精を見つめた。

「ありがとうよ、お嬢さん」

「ごめんね。ぼくらのためにこんなことになって……」

リンクのか細い声に、屈強な髭の漁師はかすれた声で笑った。

「かまやしねえって。おめえの役に立てただけで本望さ。なんだって、偉大な戦士がおれの舟に乗ってくれたんだからな」

「ぼくは……そんな人間じゃないのに」

「いんや。おめえにはその器量があるさ」

彼は甲板の上上半身を起こし、またがっしりとリンクの体を抱き締めた。

「困った時にやいつでも力になるぜ、相棒よ」

☆

ゼルダは夢を見ていた。

はつらつとした顔の少年。緑色のとんがり帽子を被り、背中に弓矢をしょっている。そして腰には大人も抱えきれないような大きな剣をつけていた。肩にとまっているのは小さな妖精のようだ。

その彼が、ゼルダに微笑みかけている。

——リンク！

彼女はまだ逢ったこともない少年の名前を、夢の中で呼んだ。

そうすると、何ともいえないような温あたたかな感情が胸の奥に湧き出してきた。彼こそが伝説うたに詠うたわれた勇者の子孫、そして生まれ変わりなのだ。そして魔王ガノンを倒せる唯一ゆいいつの人間。

リンク……。早く逢いたい。

ゼルダは胸をときめかせていた。

広いベッドの上で、はっと目を覚ました。

高い天井近くまで、ステンドグラスの大きな窓がある。床一面に敷きつめられた絨じゅうたん毯たんの色は、赤。それは血を思わせるような、毒々しいまでの赤色である。

豪華な家具かぐ。そして、壁に取り付けられた大きな鏡。その真ん中に、ベッドから上半身を起こしているゼルダ自身の姿すがたが映りこんでいた。アッサムの城にいたころにくらべると、ずいぶんと頬ほおの肉がそげ落ちた。それでも、姫の美貌びぼうは衰えるべくもない。

今しがた見ていた夢。あれは何だったのだろうか？

しばし虚ろうつろな目のままで考えていたゼルダだが、やがて彼女は自分の身に迫っている危険を思い出した。あの男がここを出て行ってから、どれぐらい経たったのだろうか？

リユグエルという伯爵はくしやく、奸計かんけいに長けた男だということにはわかっていた。

いくら優しげな声をかけてきても、瞳の奥にある邪よこしまな炎は消すことはできない。ましてやゼ

ルダ姫はそういつたことを見抜く、一種の才能を持っていた。ガラン溪谷けいこくといえ、入って出てきた者のいないといわれる場所。別名、地獄谷とも呼ばれている場所だ。

地の底より噴ふき出す瘴しやうき気は、いかな魔物であろうともその生命を奪うばい去ることができるといふ。リユグエルは、トライフォースに関する偽にせの情報を信じて、あの恐ろしい谷へと向かった。

だが、もし彼が生きてもどつてきたらどうする？

だまされたと知ったりリユグエルは、ゼルダを放つてはおくまい。

無論むろんであるが、ゼルダ姫自身には自分を守る術すべはない。また、この恐ろしい伏魔殿ふくまでんから脱出することができないのだったら、そして最後の最後に唯一ゆいいつ彼女にできることがあるとすれば、この身が汚けがされぬように自らの命を断たつことであつた。

彼女はベッドから床へそつと降り立ち、だだっ広い部屋の中を見わたした。

外へ出る扉とびらの類はいつさい見つからない。ばかげたことだが、ゼルダ姫はこの部屋の扉を開けて入ってきたはずなのだ。その扉があつた場所には、白い壁しかなかつた。

リユグエルは扉を消滅させることができるのか。

いかなる妖術をもつて、そんなことができるのだろうか。

ゼルダは壁に近づき、そつと手を当ててみた。確かに冷たい石の壁の感触がある。あくまでもはつきりとした実感だつた。たたいてみると、鈍い音すらした。

壁にもたれたまま、彼女は泣き崩れる。

もし伯爵が生還したら？ 今度彼が姿を現した時、自分の身に何が起るかを考えると、恐ろしさに身の毛もよだつ。それまでに何とか脱出しなくては。伯爵と同じように壁をすり抜けることができればいい。実際、前にゼルダは伯爵たちと一緒にあの牢獄ろうごくのような部屋の壁を抜けたことがあるではないか。

ゼルダは目を閉じて、精神を集中した。

ここに、壁はない。

本当は廊下に通ずる出入口があるのだ。

ゆつくりと、目を開けてみた。

果たして、そこには四角い出入口があった。はつきりとした実体となつて、彼女の目の前に見えるのだ。ゼルダは駆け寄つた。途端に景色が揺らぎ、再びそこに見えるのは無慈悲むじひな壁ばかりとなつた。

彼女はその冷たい感触に手を触れた。

さつき確かにここに出入口があった。あれは怯懦きようだの心や焦しょうそう燥が創り出した幻覚なのだろうか。

いや、断じてそんなことはない。

もう一度、精神を集中してみよう。

壁から数歩離れて、ゼルダが目を閉じた。

次に目を開いた時、壁はさっきのように忽然と消滅し、天井まであるはつきりとした出入口が見える。その向こうには、壁にかけられた多灯架たとうかにいくつもの小さな炎を灯す蠟燭ろうそくまで見えていないか。

焦あせってはならない。

ゼルダはゆつくりと足を踏ふみ出す。

出入口は存在する。それを脳裡のうりにしっかりと刻みつけながら、彼女は一步、また一步と歩き続ける。そして、ついに壁のあった場所を抜けた。何の抵抗もなかった。廊下に出るなり、振り返ると、さっきまでゼルダが閉じこめられていた部屋が見えている。

と、

ふいにまた何の音もなく石の壁が出現し、部屋の景色が見えなくなった。

しかし彼女は廊下に出ていた。

早くここから逃げ出そう。気がかりが焦あせる。が、ゼルダはどこをどう歩けば外へ出られるのか、まるで知らない。自分のカンのみに頼らなければならぬのだ。しかもこの建物には魔物どもも多おほくくいる。無事に逃げられる可能性はほとんどない。

だが、ゼルダはやらねばならなかった。



レムール高原。

そこはハイラルのほぼ中心、広大な面積をほこる高地である。

刺とげのように鋭く切り立った山々が荒涼こうりょうとした景色にいつそこの寂寞感せきばくかんをくわえている。あちこちに白骨はくこつのような枯れ木が林立し、火山性の荒々しい岩が大地のそこかしこに無秩序むちつじよに落ちてゐる。

そんな高原にたったひとつ。蛇へびのように曲がりくねる細道がある。

リンクとファニーはその道を進む間、なにひとつしゃべらなかつた。彼が村を出てまだ幾日も経たっていないというのに、いろいろなことが立て続けに起こつた。しかも彼らの前にはまだまだ幾多の難関が待ち受けているだろう。そのことが、ふたりの心にさながらハイラルの空を覆おおう暗雲のようなものうなものを投げかけている。

唯一ゆいいつの救いは、いつでも助つ人に参じると言ってくれた漁師グレッグの豪快な笑い顔である。これから先、辛いつらことがあるたび、リンクはグレッグの顔を思い出すことにした。だが、いつまでも彼に頼たのっているわけにはいかない。なぜならば、これはリンク自身の旅なのだから。

緩ゆるやかな坂道を上り続けると、やがて遠く夜霧よぎりに霞かすむように廢墟はいきよの街が見えてきた。

倒れかかった円柱や、倒壊した石の建物。

まぎれもなく、それは古代の遺跡だった。

グレッグの言葉によると、この中にふたつ目のトライフォースの断片がある。それを思うと、リンクの心の中によろやく一筋の光条が差しこんできたようだった。

廃墟に足を踏み入れ、瓦礫を踏みしめるように歩くと、墓地があつた。狭い場所だが、白い墓石が点在している。だが、その墓石のいたるところで青白く燃えているのは何だろう。

磷りんが自然発火して燃えるという鬼火であろうか。

リンクは油断なく墓地に近づいた。

鬼火のひとつが、ふいに意思をもったようにリンクのほうへ音もなく飛んできた。と、それはみるみる人の形をとったのだ。白いフードを頭に被かぶつた亡霊。男も女もいる。それらが青白い顔でふたりを見すえながら、大地からわずかに足を浮かせて飛んでくる。

リンクはとっさに剣を抜いた。

ホワイトソードが一瞬白光を放つ。

「こいつらはギーニっていう墓場の守り主よ！」

ファニーがリンクの肩で叫んだ。

「——実体のない幽霊なの。だから剣の攻撃は通用しないわ」

「どうしろってんだ！」

「そんなこと、あたしに訊いたって知らないわよお！」

戦いと混乱のさなかに、ふたりはようやくよく本来の会話を取りもどしていた。だが、ギーニどもは情け容赦なくリンクたちに攻撃を仕掛けてきた。青白い顔でかつと口を開くと、吸血鬼のような鋭い牙が剥き出しになる。

「くそっ。お前らの仲間になんかならないっての！」

リンクが剣を構えたまま翔んだ。墓石のひとつにとん、と着地すると、青白い魔物たちがいっせいに振り返った。大上段に剣を振りかぶり、襲いかかるギーニに打ち降ろした。が、それは魔物の体を素通りしてしまふ。

しゃかりきに剣を振り回すが、まるで効果はない。

そうこうしているうちに、数体のギーニが彼のまわりに集まってきた。鋭い牙と爪の攻撃をかわすべくリンクが跳ぶ。拍子にその肩を離れたファニーが、必死に羽ばたいて近くの墓石の上に降りた。

するとどつた。

墓石がぐらりと傾き、ゆっくりと横滑りし始めたではないか。

「あれれ？」

再び空中に舞い上がったファニーの眼下、墓石があった場所にぼっかりと四角い口を開けた、これはどうやら地下への入り口らしい石段。その瞬間、ファニーの顔がぱっと輝いた。

「リンク！ 見て見て！」

彼は魔物と戦いながら、彼女が指差す場所を見た。

「それが地下室への入り口だっ！」

だつと駆け出すや、リンクが穴に飛びこんだ。すぐにファニーがその後を追う。と、墓石は最初と同じように重々しい音を立てながら横にスライドを始め、やがてぴしやりと閉じてしまった。

ギーニたちは獲物えものを見失ってしばらく墓石のまわりをうろろろしていたが、やがて諦めたのか、それぞれの場所でぱつと青白い火の玉となり、闇に吸いこまれるように消えてしまった。

「おい、ファニー。背囊はいのうから蠟燭ろうそく出してくれえ」

「何さ。偉えいそうに命令しないでよね」

「くだくだ言っていないで、早く出してくれれば。暗くて天井に頭ぶつけそうなんだ」

「いっそ、ぶつけちゃいなさいよ」

「いて！ 本当にぶつけた」

「そこまた石段になつてる」

「え？ あ！ いてててて。下までおっこちたあ。早くそれを言えよ」

「蠟燭見つけた。火打ち石はどこ？」

「その辺にあるだろう？」

「あったあった。火、つけるわよ」

「ちよつと待て！」

「なによ」

「何だか嫌な予感がするんだけど……」

「くだくだ言ってるのは、そっちじゃない。つけろとか、やめろとか。どっちなのよ。ええい、もうつけちやお」

「ま、待てっ！」

フアニーが火打ち石をたたき、蠟燭に小さな炎を灯した。

ほのかな明かりが、狭い石壁に挟まれた地下通路を照らし出す。すると突如として背後から、ぐるるといふ唸り声とともに強烈な鼻息がかかった。それでフアニーもようやく悟ったらしい。

リンクと一緒に、おそろおそろ後ろを振り返る。ぐるぐるるるる。

甲冑かっちゆうのような表皮をまとったサイの怪物が、そこにうづくまっていた。鼻の上に、先端のするどく尖とがった角がある。夜行性なのか、ファニーが抱えている蠟燭の光を、眩まぶしげに見ている。

こいつは超有名な、廢墟はいきよの地下に棲すむという伝説の怪物——、

「ど、ど、ドドンゴだあ……」

くるりと踵かかとを返したリンクが、全力疾走を始めた。ファニーが光る鱗粉りんぷんを撒まきながら、その後を追って飛ぶ。

「待ってよお。怪物と戦わないの?」

「ばかっ。あいつは剣も弓矢も通じない奴だ。しかも光を向けられると猛烈に怒り狂うんだよっ。やっつけられるかっ!」

言った途端とたん、リンクの背後ですさまじい地響ちびやうきが聞こえ始めた。

見れば、思ったとおりである。ドドンゴは狭せまい石の回廊かいろうに埃ほこりを巻き上げながら、どかどかと足音を立ててふたりに向かって走ってくる。速度は人間の走行の二倍以上。追いつかれるのは時間の問題である。

「むひー!」

回廊の交差点を見つけて急いで左折した。直後、ドドンゴはそこを曲がりきれずにやみくもにまっすぐ走り続け、そのまま突き当たりの壁に頭から激突してしまふ。地下迷路全体を揺るがすよっ

な衝撃しゅうげきとともに、耳をつんざく轟音ごうおんを立てて瓦解がかいした天井の石材あめあられが雨霰そそと降り注ぐ。

サイの怪物はその下に埋もれてしまった。

「わーっはっはっはっは」

リンクたちが腹を抱えて笑った。

「ばかな奴だなあ。自滅しちまいやんの」

と、

突如として恐ろしい勢いで瓦礫がれきが吹き飛ばされ、怒りに目を燃えさせたドドンゴが土埃つちぼこりの中から出現した。

「なははは……」

気まずい顔で見つめ合うリンクとファニー。そこへ、
がおー。

ドドンゴが叫ぶなり、ずどずどと足音を立てて再び突進を開始した。

その場に凍りこおついていたらリンクは、ドドンゴの顔が間近に迫るなり、ようやく実感がわいた。空中で静止したままのファニーの肩を人差し指でたたき、顔を見つめ合う。

「に、逃げろーっ！」

どたどたと足音を立ててリンクが走る。その後ろをファニーが追う。

だが、結果は同じである。ドドンゴのほうが速力二倍。あっという間に背後に接近してくる。

「リンク、なんとかしてよお！」

「つて言ってもなあ……」

ファニーはリンクの背中を見て、雑囊ざつのおうの蓋ふたが開きつぱなしなのを見つけた。中には携帯用食糧けいたいようしよくである乾パン類かんぱんが入っている。彼女はそれを引き出すと、追いかけてくるドドンゴに投げつけた。

「がおー。」

ドドンゴは食糧を食ってから、また突進を再開する。

次にファニーは野宿に使う毛布の束を見つけて投げつけた。ドドンゴは床に落ちた毛布をしばらく嗅かいでいたが、

「がおー。」

またまた、これを食って突進を開始した。

「おめえなあ、何でもかんでも投げるんじゃないやねえぞ！」

「るさいわねー、ちよっとでもあいつのスビードを鈍ふらせなきゃ踏ふみつぶされちゃうでしょ？」

次にファニーが見つけたのは、黒い球体である。

「あー、それ爆弾だぞお」

「いいのよ、何でも！」

ファニーは火打ち石で導火線に火を点けて重たそうに両手で持ち上げ、背後から迫るドドンゴに向けてえいと投げつける。怪物はまた床に転がるものを見つめ、しばらく眺めていたが、
がおー。

結局食ってしまった。

リンクが走るのをやめた。背囊はいのうにまたがるように乗っているファニーも、それを見た。
直後、ドドンゴの腹がばふっという音とともに丸く膨れ上がり、口と鼻の孔あなから白煙が噴き出した。サイの怪物は目を丸くしていたが、唐突とらとつに横倒しになり、動かなくなってしまった。

リンクがおそろおそろ近づく。ファニーが真っ先に怪物の腹の上に舞い降りて、ブーツの靴先で
つんつくつんしてみた。ドドンゴは完全に息絶えてしまっていた。

「あんだろな、こいつ」

呆れた顔で、リンクがつぶやいた。

地図のおかげで迷宮の奥へは楽にゆけた……わけではない。無我夢中でドドンゴから逃げ回った
ため、せっかく地図があってもリンクは自分たちがいる場所がわからなくなっていたのである。

さんざん迷路の中を徘徊した。部屋を見つけて入ると、そこに無数の魔物がうじゃうじゃいたり
する。で、あわてて扉を閉めてもどおり、別の部屋の扉を開けてみる。そんなこんなで行きあたりば

つたりに歩き回り、彼はようやく迷宮の奥底へと到着したのだった。

最後に行き当たった壁を爆弾で破壊すると、そこに部屋があった。

——よう来たの、リンクよ。

石壁に囲まれた狭い部屋に、突然しゃがれた声が出た。

見れば、部屋の真ん中に赤い法衣を着た老人が座っているではないか。顎の下から白い髭を生やし、つるつるの頭にふたつの松明の眩しい明かりが映えている。

「あんたは……確かカシム……」

——いんや、わしはそのカシムの従兄弟のカジムじゃ。

似たり寄ったりでややこしい名前ではあるが、どうやらこの老人もあのウイジャグメントに住む老人同様に仙人なのであろう。ハイ仙共組というわけだ。

——よくぞ、ここまで来たの。おぬしのレベルは、もうずいぶんとアップしておるはずじゃ。じやが、ガノンを倒すには、まだまだ修行が必要。これからはもっと感情をおさえることを学ぶべきじゃな。かっかっかっか。

笑い終えてから、カジムは部屋を出てゆこうとするリンクの後ろ姿に声をかけた。

——待てい。他人の話はちゃんと最後まで聴けい。

「つたく、こっちは時間がないっていうのに、なんだよ」

振り返ったリンクに、老人は一本の笛を渡した。

——いつか、これが役に立つ日が来よう。

「ぼくが破産した時、流しの笛吹きになれてことだね」

——ガキのくせに、かわいげのない。その笛は魔力を秘めた音を出す。迷宮の中で吹けば、たちまちにして一陣の風がお前を外へと運び出す。そして……待てい！

老人は笛を吹こうと口に当てたリンクを止めた。

——早まるなっちゆうに。今それを吹いたら、何のためにここへ来たかわからんだろうがに。

「あ、そうか。ぼくはトライフォースを取りに来たんだ」

——トライフォースはここにある。受け取ってゆけい。

カジム老人は、リンクに小さな木箱を渡した。蓋ふたを開けると、中には黄金色に光る三角錘さんかくすいの石が入っている。

それをつまみ上げ、先に手に入れたトライフォースの断片と合わせると、ぴちっとならって取れなくなった。リンクは自分の掌てのひらの上で燦然さんぜんと輝くトライフォースを見つめる。肩にとまるフアニーまで、うっとりとその光に魅せられてしまっている。

——不思議なものじゃな。その石を直じかに持って平気なのは、代々あのゼルダ姫の家系の女だけじゃった。仙人のわしでさえ、その箱に入れねば持つことはできん。石は自らその持ち主を選ぶ。勇

者としての人間をな。

「勇者ねえ。何だかずいぶんと危ない勇者だけど？」

意地悪く言うファニーを、リンクがにらむ。

——そろそろ、自覚を持ったほうがよいのではないかな？

「自覚って？」

妙な顔をするリンクの前で、仙人がふいに生真面目な顔になった。

と、彼らの目の前の岩壁に、ぱっと閃光が瞬いた。

驚くリンクとファニーが、後ずさる。

それは一瞬後、はつきりとした映像の形となった。そう、まるで映画でも観ているような、そんな情景である。ぼんやりと輪郭を持った四角いスクリーンの向こうには、どこまでも延びた広い通路がある。左右の壁のところどころにかけられた燭台の炎が、薄暗いその通路を照らし出している。

と、向こうから歩いてくるのは、ひとりの少女。

白いドレスをまとい、不安げな表情を顔に張りつかせたままひっそりとやってくる。

「あ……あの子は！」

リンクが叫んだ。

「ぼくの夢の中に現れた女の子だ」

——そうとも。今、おまえさんと彼女は精神交感でつながっておるからの。おまえさんが時おり夢にみるように、彼女の意識もお前さんの夢を見る。

カジム仙人の言葉にリンクが呆然ぼやぜんとなった。その脇から、ファニーがこづく。

「ねえ、リンク。あの子、なんなのよ?」

「あれは……」

リンクがゆっくりと指差した。

「あれが、ゼルダ姫だと思っ」

——ご明答じゃ。彼女は逃避行の最中のようじゃな。一刻も早く救いにゆかねば、姫の命が危ない。

「どこへ行けばいいの?」

——それはわしにもわからぬ。今、こうして映し出しておるのは、お前の心がゼルダ姫の意識とつながっておるからじゃ。だから、彼女自身が自分のいる場所を認識しないかぎり、お前にもわからんじゃろうて。

「じゃあ、ゼルダ姫の居場所を見つけるには、こうして精神交感が続けていけばいいんだね」

——他に方法はなからう。

と、ふいに岩壁に投影された映像が、ゆつくりと消えうせていった。

仙人が少年に向き直る。

——さて、リンク。お前さんが次にゆくべき場所はサゴスの街じゃ。そこに第三の迷宮がある。

トライフォースのひとつがそこに隠されておるはずじゃ。ぐずぐずしておる時間はないぞ。早く行
けい。

次の瞬間、カジムと名乗った仙人の姿は忽然こつぜんと消滅していた。

「急がなきゃ。ファニー、つかまって」

彼女を肩にとまらせたまま、リンクは仙人にもらった笛を口に当てて吹いた。

たちまち一陣の風が巻き起こり、リンクたちはそれに包みこまれて迷宮の外へと運び出された。

☆

広大な平原にしんしんと夜露が降りていた。

星もない真つ暗な空の下、荒れ果てた大地を這はいずる小さな生き物たちの息づかいさえ感じられ

る。丘からゆつくりと降りてきた冷たい風があたりを吹き抜けると、また静寂せいじやくが訪れる。

と、

東から延びる荒れ道を、何かがやってきた。

がらがらと騒々しい音を立てているのは、大きな牛が引く荷車。それが三台。

牛を操る馭者ぎよしゃを除いて人の姿がないのは、夜風が氷のように冷たいせいだ。それが証拠に、荷車を引つ張る牛の鼻は、真つ白な息を闇に散らしている。旅人たちは荷台を覆う幌ほろの中に入っているのだろう。夜もとつぷりとふけたこの時間、おそらくそろって眠っているに違いない。

それぞれの馭者台の上に座る男たちは、いずれも屈強そつな大男。時おりしなやかな鞭むちで牛の背をたたく。この真つ暗な夜の世界でも目が利きくのだろうか、荷台の脇に吊るされた側灯に照らし出される顔は、油断なく前方の荒野を見すえている。

その先頭の牛車の馭者が、ふいに緊張した表情で遠くを見すえた。

はるか地平線のあたり、そこに小さく無数に光るものが蠢うごめいていた。

金色に輝くそれらは、まるで地面から飛び跳はねているように不規則に上下に動いている。しかも、牛車隊に向かってやってくるように見える。

「テオ殿。こちらへ！」

馭者の男に声をかけられ、荷台の幌の中から白髪の初老の男が姿を現した。

テオと呼ばれた彼は、馭者台の隣に座り、闇の向こうにじつと目を凝こらす。

金色の無数の光はしだいに数を増している。しかもそれらが彼らのほうへ近づいて来つつあるこ

とは、今や確実のようだった。大地を蹴けつては大きく飛び跳はねながら、どんどんと接近している。

「テクタイトどもだ」

テオがその名を言った時、馭者の男の顔から血の気が引いた。

砂漠に棲すみつく怪物のことだった。巨大なひとつ目の蜘蛛くもで、鋭い毒牙どくがを持っている。それが何十匹も、牛車隊めがけてやってくるのだ。

荷台の幌はが跳はね上げられ、弓矢や剣を持った男たちが身を乗り出した。女や子供たちは抱き合っあって震ふるえている。蜘蛛の怪物はそろって地を跳はねながら牛車隊めがけて襲おそいかかった。男たちがいっせいに構くえた弓を向け、矢を投じた。

二、三本が怪物の大きな目に突き刺さり、それらはばったりとひっくり返って動かなくなつた。だが、残つたほとんどのテクタイトが荷台の人間たちに飛びかかる。男たちは剣を持って果敢かかんに戦たたかうが、敵は素早く身をひるがえしては鋭い牙きばで犠牲者ぎせいしやを作っていく。

先頭の車を引く牛が怪物の牙に倒れ、荷車が止まった。

そのため、一列に並んでいた後続の二台が停止してしまふ。テクタイトはここぞとばかりに波状攻撃をかけてきた。弓弦ゆづるが引かれるたびに何匹かの怪物が目を貫つらぬかれて倒れるが、奴らは恐れというものを知らないのか、倒しても倒しても飛びかかってくる。

先頭車の馭者が毒牙に倒れ、荷台で戦っていた男たちのほとんどが怪物に殺された。もはやこれ

まで、と人々が抱き合つて震えた時、ふいに丘の上から何かが白い土煙を曳きながら疾走してきた。

馬である。

ハイラルで馬を見るのは珍しい。南の暖かな国では馬を常用しているというが、この地方では人はもっぱら自分の足か牛に引かせた車で旅をした。その馬にふたり乗りしているのは黒髪をなびかせた少女と、そして老婆。

ホビット族のマイアと乳母インパであった。

「はッ！」

少女は猛々しい声とともに馬を操り、立ち往生をくらつた一行に接近する。

テクタイトどもが新たな獲物を見つけた時、マイアは肩がけしていた三連のボウガンを片手で構えて引き金を絞る。立て続けに三匹の怪物が地に倒れた。馬の手綱を引いていったん踵を返しなから、マイアはボウガンに次の矢を三本そろえて装填した。

怪物の群れが彼女の馬を襲おうとした刹那、再び空を切つた矢が正確にその目を射抜いた。その勢いに、牛車の男たちも闘志を再び燃やした。いっせいに弓や剣を取つて立ち上がるなり、蜘蛛の怪物に反撃を開始する。

戦いは数分で終わったが、それは数時間の長さにも感じられた。



疲れきってへたりこむ旅の一行の前に、マイアが馬を寄せた。

一行の長らしい馭者のひとりが立ち上がり、マイアの前に立った。

「危ないところをありがとうございました」

マイアとインパが馬を降りた。

「このあたりは夜は危ないわ。もうじき朝になるから、もうあいつらは襲ってこないと思うけど、油断は禁物よ」

人々が次々と荷台から降りて、深々と頭を下げる。

「私たちはランの村から来た旅の一行です。よろしければ、粗末なご馳走でも振る舞ってお礼をしたいのですが」

馭者の言葉に、マイアが微笑んだ。

「よかったわ。ちようどあたしたち、おなかですいていたところだったの。私はホビットの村から来たマイア。この人はアツサムのゼルダ姫の乳母インパです」

彼女が名乗ると、突然人々の中からひとりの女が出てきた。

マイアのような長い黒髪で、頭からすっぽりと被るような服を着ている。そして腕にはきらきらと光る大きなブレスレットをつけていた。

「スターウッドの森にあるホビットの村ですか？」

女の質問に、マイアたちが驚く。

「ええ、そつよ。リンクっていう男の子を捜しているの。緑色のとんがり帽子を被っていて、大きな弓を持っているんです」

「リンク……!」

女の目が大きく見開かれた。

「——ロツテルベルグという街で、ホビットの村からやってきたという男の子に逢あいました。とんがり帽子を被っていて、はつらつとした子です。でも、まさか……」

その女——ダイアンの目から大粒の涙がこぼれ落ちた。

「リンクは私の息子の名前です」

インパが彼女の前に進み出て、その腕にある大きなブレスレットを指差した。

「それは戦士の一族に伝わるパワーブレスレットじゃな?」

ダイアンはブレスレットを外はずし、老婆に渡した。

「これを……息子に」

するとマイアがこう言った。

「一緒にリンクを捜しましょうよ。ロツテルベルグの街にもどりませんか?」

「息子に渡すものもつひとつあります。これから私はランの村にもどつて、それを取つてこなけ

ればなりません」

マイアがはっとしてダイアンの手を取った。

「お互いが出歩いたら、行き違いになります。だから、あなたはランの村で待っていてください。私たち、きつとリンクを見つけ出して連れていきます。もし、あなたに逢えたら、リンクはとても勇気づけられるわ」

そこへ一行の長である馭者がやってきた。

「さあ、ここは寒い。私たちの車の中で話し合しましょう。命の恩人に食事も振る舞いたいし。あなたたちの馬もずいぶんと疲れている様子」

言われた途端^{とたん}、マイアは笑った。

彼女とインパはスターウッドの南にあるレムルという街で馬を買って以来、一昼夜も走り通しだったのだ。

☆

もつどれぐらい歩いただろう。

回廊^{かいろう}は幾重^{いくえ}にも折れ曲がり、さながら迷路のごとく入り組んでいた。

ひよつとして、同じ道を何度も行ったり来たりしているかもしれない。それでも、ゼルダ姫は諦めずに歩き続けた。右手には壁にかけてあった多灯架を持ち、時おり立ち止まっては薄闇に目を凝らす。

ひんやりと空気が張りつめたこの回廊に、ゼルダの他に人影はなかった。本当にここは魔王ガノンの伏魔殿なのだろうか。

魔物はおろか、鼠一匹見当たらないのがかえって不気味だった。

しばらく歩き続けて、彼女はようやくやく階上へ続く石段を見つけた。あたりを見回してから、急いで石段を昇り、錆びついた鉄扉をそつと開く。と、そこは今までとは明らかに違う光景。いくつもの円柱が並ぶ大きな通路である。

天井は高く、床は大理石で作られたようにぴかぴかに磨かれ、その天井の様子を映し取っている。そして壁にはいくつも並んだ大きな窓がある。

ゼルダは急いで通路を反対側に渡り、窓から外をのぞき見た。

外は朝である。

建物のまわりには峻険な山々がそびえ立っていた。が、この建物自体、その中でもひときわ高い山の頂きに建てられているようだ。

どこかの城のようであった。

それも、大昔に建てられたらしく、古く、そして朽ちかけている。

窓から身を乗り出すように眼下を見下ろすゼルダの髪を、崖下から吹き上がってきた一陣の風が大きく乱した。その時である。

「ゼルダ姫」

聞き覚えのある声に、彼女は蒼白な顔で振り返った。

いつの間にか、目の前にあのリュグエル伯爵が立っている。

瘦身に真っ黒いマントを羽織り、頬の落ちくぼんだ顔で彼女をじっと見すえていた。

「うるわしのゼルダ姫よ。どこへゆかれるのだ？」

伯爵はそう言うてから、ふいに口元をゆがめて笑った。

☆

「ゼルダ！」

リンクは自分の声で、はっと目を覚ました。

見慣れない部屋に一瞬、ここはどこだろうと思う。が、やがて徐々に思い出してきた。サゴスという街の宿屋である。リンクたちはこの大陸の果てにある小さな街にたどり着き、何日かぶりにべ

ツドに横になって死んだように眠ったのだった。

傍らの棚の上、小さな箱の中ではファニーがまだ眠りこけていた。

今しがた見ていた夢。あれはゼルダ姫の夢だった。

高峰の頂きにある古い城。大理石の廊下。そして窓の外にある断崖絶壁。

あの黒いマントを羽織った男は何者だったのか。

ゼルダ姫は、あの男の姿を見て、ひどくおびえていた。彼女自身の恐怖心はリンクにも伝わっている。おかげで彼はひどく寝汗をかいていた。両方の掌を見ると、爪が食いこんだあとがはっきりと残っていた。

リンクはベッドを降りて窓際へゆき、カーテンを開く。

窓越しに外を見ると、サゴスの街の目抜き通りが真下を横切っていた。人々は頻繁に行き交い、行商人たちが巧みに声をかけてはものを売りさばいている。空は相変わらずどんよりと曇ってはいたが、銀色の円盤のような太陽が中天のあたりにぼうつと見えている。

「しまった。ずいぶんと寝過ぎしたな」

リンクは気まずい顔でつぶやき、欠伸をした。

身体の疲れはすっかり取れていた。ほっと安心するとともに、空腹感を覚える。

彼は剣を腰に吊るし、弓矢や盾を点検してから、いまだ眠りこけているファニーを起こしにかか

った。

サゴスは街道に沿って長く延びる街だ。

そのために交易地として栄え、あちこちの大陸からいろんな旅人が訪れる。

リンクたちは目抜き通りにある店で、昼食をとった。メイン・ディッシュは鳥の肉。近くの野山で猟師がとってきたものを、店の主人が調理している。その猟師たちだろうか、リンクの座る隣のテーブルに、屈強な男たちが三人いた。

「どうも最近は何騒でかなわねえや」

ひとりと言いながら、朝っぱらから酒をあおっている。

「——ザックの野郎がくたばったのは、カテドルの街の近くだった。昔は奴ら、あんなところまで来やしなかったんだ。おれっちはあのデスマウンテン深くまで分け入って、あの古城のすぐそばで猟をしたもんさ。ところが今はどうだ。街の近くにまで、魔物どもがうようよと出現しやがる」

リンクは食事をやめて、男たちを見つめた。

デスマウンテンといえば、ハイラルの北にある大きな山脈のことだ。そんな場所に城があるとは初耳だった。

「どうしたのよ。また喧嘩でも売るつもりじゃないでしょうね？」

心配げなファニーだが、リンクはなにやら考えごとをしている最中だ。

男たちの言った古城という言葉から受けたイメージと、今朝がた見たゼルダ姫の夢に出てきた、古い石造りの建物のイメージ。それが妙に合致していた。これは決して偶然じゃない。

「行こう、ファニー。急がないと」

リンクはテーブルの上に勘定を置いて店を出た。

サゴスの街には武器を扱う店がある。リンクとファニーが入り口をくぐると、木造りのカウンターの向こうにいた店の主人は胡散臭うさんくさそうな目でこの少年と妖精を見つめた。

「子供の来るところじゃねえ。帰んな」

ところが帰るわけには行かない。リンクの背中の矢筒には、ほとんど矢は残っていないし、爆弾もつきた。おまけに大事なホワイトソードは、魔物の固い皮でぼろぼろになっている。これじゃ野菜だって切れそうにない。

「爆弾の三個セットと矢を二ダース欲しいんだけど」

リンクが言うと、中年の主人がまた訝いぶかしげな顔で彼を見た。

「そんなもんしよって、どうするね？」

「デスマウンテンの古城に行かなきゃならないんだ」

「デスマウンテン！」

主人が悲鳴に近い声を放った。

「——ばか者。あんな場所に行くもんじゃないやねえ。あそこは生きた人間の行ける場所じゃねえぞ。だいいち、城へなんぞ行って、どうするつもりだ？」

「魔王ガノンを倒して、とらわれの姫君を救い出すのさ」

リンクの言葉に、主人の目が光る。

「おめえ……まさか本気で……」

彼はしばらくリンクを見つめていたが、ややあつて後ろの棚たなから丸い爆弾が三つ入った木箱と矢のセットをカウンターに持ってきた。そして少年が腰に差している剣を見て、こう言った。

「その剣、えらく立派なものだが、随分と使いこんでいるな。どれ、貸してみろ」

リンクが抜いたホワイトソードを、彼は店の奥の部屋で丁寧ていねいに研とぎ始めた。そういえば、この剣、もう何匹もの怪物と戦ってぼろぼろになっていたのだ。いかな素晴らしい剣でも、無限に肉や皮を断ち切れるわけじゃない。腕のいい研とぎは必要なのだ。

「おじさん、急に態度が変わったわね」

不思議な顔をするファニーに、リンクが微笑みかけた。

「あのグレッグと同じさ。ある種の人間は、ぼくを見ると何かを見抜くらしい」

「へえ。あなたって、本当は偉いのね」

「どうだろ」

店の主人が綺麗に研ぎ澄ましたホワイトソードを持ってきた。

剣を腰に吊るすリンクの前に、爆弾と矢を差し出し、驚いたことにさらに三日月のような形をしたブーメランをくれた。

「こいつは当店の自慢の品だ。マジカルブーメランっていつてな。そんじよそこらの雑魚ざぎょの魔物なら一発よ」

「そんな……ぼくはこんなものまで買えるようなお金は……」

「黙って持っていきやいいんだ。爆弾も矢も、剣の研ぎもロハでいいってことよ。あんたは魔王を倒せる勇者に違えちがねえ。そんな立派な人から金取ったら、罰が当たらあ」

腕組みをしてふいと横を向く主人に、リンクが礼を言う。

「おじさん。ありがとう。ご恩は忘れません」

「いってことさ。さ、早いとこ、お姫さんを助けにいきな」

「うん」

リンクたちは意気揚々いっきようようとして武器屋を出た。

デスマウンテンは、この街のはるか北にある。歩けば二日かかる距離だが、今やリンクは確信していた。あの蒼茫そうぼうとそびえ立つ峨々ががたる連峰のどこかにある城こそ、この旅の終着点なのだ。

だが、そこへたどり着く前に、リンクにはまだまだ行くべき場所があった。

PART5

再会

サゴスの街の外に、小さな泉があった。

ファニーは仲間の呼びかけを聞きつけて、リンクとともに泉の畔ほとりに向かった。

彼女の呪文じゆもんで泉は強烈な光芒こうぼうに包まれ、数人の小さな妖精を解放した。

これまでの旅で、すっかりリンクと意気投合した相棒となったファニーだが、彼女は途中で泉や井戸を見つづけるたびに、このようにして封じこめられていた有羽族ゆううぞくの妖精たちを解き放つてきたのだった。

「ありがとうございます」

妖精のひとりがリンクとファニーに礼を言いに来てきた。

「ねえ。訊ききたいことがひとつあるんだ。この近くに大きな地下迷宮があると街で聞いたんだけど、入り口を知ってる？」

リンクの質問に、透明な羽を羽ばたかせて飛んでいた妖精のひとりが答えた。

「黒い森を抜けたところに、大きな枯かれ木がひとつあります。それを焼きはらってみてください。きつと地下への入り口が現れるでしょう」

妖精たちが飛び去っていくと、リンクとファニーは歩き出した。

黒い森とは、街の西に広がる広大な森林だった。天を刺すような針葉樹おおがうっそうと覆おおい繁しげり、下生したなえは背の高さほどもある。たとい晴れていても陽光が森の中に差しこむことはなく、ゆえにこ

こは黒い森と呼ばれているのだった。

リンクは研いでもらったばかりのホワイトソードで、下生えの草をなぎはらいながら進む。しばらく歩くと、森の木々が不気味にしなり、ひんやりとした空気の中に妖気が満ちてきた。

「フアニー。何かいるぞ」

リンクが身構えた時、繁みをかき分けて三匹の怪物が飛び出してきた。

真つ白な巨大な花弁を回転させ、なめくじのような胴体をぬたぬたと蠕動させている。それが木の間をふわりと浮遊しながらリンクに向かってくる。

「ピーハットだ！」

リンクがとっさにホワイトソードを向け、光の矢を放った。

それは一匹目の胴体に命中し、そのピーハットはくるりと空中でひっくり返って下生えの中に落下した。だが、あとの二匹は怯みもせずリンクめがけて襲ってくる。

二匹目を光で射抜いたが、次が間に合わない。リンクは剣を構えなおして、真正面から体をぶつけてきたそいつの胴体を、袈裟がけに斬り降ろした。

嫌な臭いのする体液を振りまきながら、最後のピーハットが落下する。

リンクは息ひとつ乱してはいなかった。旅に出たばかりのころとは違う、どこか超然とした落ちつきを、この少年は身につけていた。幾多の艱難辛苦の経験が、彼を少しづつ立派な戦士にしてき

たのだ。

さて、ようやく静かになったはずの森だが、周囲にはまだ妖気が満ち満ちていた。

ここは魔物の巣のようだ。

「さ、行こうファニー。早いとこ抜け出すぞ」

「待ってよ!」

足早に歩くリンクを、ファニーが追って飛ぶ。

森を出ると、妖精が言ったように大きな枯れ木があった。

野原の真ん中に一本、かつては泰然自若たいぜんじじやくとして屹立きりりつしていたのだろうが、落雷にあつたらしく、途中からぼつきりと折れてしまっている。それで枯れてしまったのだ。

「ファニー。背囊はいのうに火打ち石と油があつたらう?」

「ちよつと待って」

彼女はすぐに革袋に入れていた石と、瓶詰めびんづめの油を取り出した。

油はスターウッドの森の奥、深い井戸の底に沸わいていた燃える水から抽出したものだ。それを枯れ木に振り撒まき、火打ち石をたたいて点火した。

ぼつと音を立てて木が燃え始めると、あつという間だった。

枯れ木はみるみる形を崩しながら燃えつき、やがて根のあつた場所に真つ暗な空洞が口を開いた。立ち昇る煙にむせながらのぞきこむと、石段があるようだ。リンクは蠟燭ろうそくを用意し、ファニーと一緒に慎重に降り始めた。

迷路は例によつて、いくつもの部屋が複雑に重なりあつた構造をしていた。

蠟燭の光を頼りに進むと、暗がりに光る無数の目。

明かりをかざした彼らの前に姿を現したのは、頭からすっぽりとフードを被かぶつた魔物。顔の部分は真つ黒で、目だけが異様に赤く光っている。

「ここは人間の来るところではない。はようちに立ち去れい」と、魔物のひとりが言った。

「ところがそうはいかないんだ。ぼくはこの迷宮のいちばん奥に用事がある」

剣を抜きながら、リンクが答える。

「ならば、お前を、食くう！」

魔物たちはぼろ切れのような服から、そろつて両手を突き出した。同時にくぐもつた声で呪文じゆもんを唱となえる。ファニーがぱつと飛び上がつてリンクに叫んだ。

「気をつけて！ ウィズロープよ。呪文を聞くと体が動かなくなるわ！」

「早くそれを言え、早く」

魔物の放った呪文に、リンクの左腕が動かなくなった。これでは剣も弓も使えない。

だが、リンクには奥の手があった。

腰のベルトに挟んでいたマジカルブーメランを取る。それを右手で投じた。

ひゅんひゅんと音を立てて床すれすれに飛んだそれは、魔物ウィズロープの足元で急に上昇して一匹の顔を打ちのめし、リンクの手元にもどってきた。そいつは床に倒れこみ、ぴくりとも動かなかった。

続いて第二投。今度は二匹目のこめかみをもろに直撃した。

さすがに怖じ気づいた三匹目が逃げ出すと、リンクはブーメランを腰に挟んだ。

「すごいじゃない。そんな技、どこで覚えたの？」

ファニーが背囊から水筒を取り出しながら訊く。

「ホビット族は弓矢の他に、ブーメランを使って狩りをするんだ。ぼくは小さなころから仕込まれたのさ」

得意げに笑ったリンクが、片手で水筒に入っていた命の水を飲んだ。

すると魔力の効果がてきめんに現れ、リンクの左腕はすぐに動くようになった。

さて、迷路にさんさん迷わされてから、リンクはようやくいちばん奥の部屋にたどり着いた。

錆びついた鉄扉。

リンクはそれに手をかけて、力いっぱい引いた。

扉がわずかに隙間を開けた途端、そこから何か飛び出してきた。

驚いたリンクが飛び下がると、それは巨大な鋏だった。まるで金属でできているかのように、ふたつが合わさるたびに甲高い音を立てる。もし間に挟まれたら、岩でも寸断されてしまいそうである。

「いったいこれは！」

リンクが言った時、扉をこじ開けてそいつの本体が姿を現した。

巨大な鋏を四つ持った、これも大きな植物の化け物である。サボテンのような胴体に鋭い刺が無数にある。鋏は口の役割も果たすのだろう。そこから真っ赤な舌がちらちらと炎のように蠢いているのが見えた。

リンクは立ち上がりざま、背負っていた雑囊を降ろした。

そこから爆弾をつかみ出し、点火する。

「化け物め、そこをどけっ！」

火花を散らす爆弾を投じると、うまい具合に怪物の腹の下に転がりこんだ。

「ファニー、隠れろ！」

少年と妖精は、とっさに隣の部屋へ避難する。

一瞬後、すさまじい爆発音とともに、迷宮全体がぐらりと揺れた。吹きこんできた爆風と土煙にむせながら、リンクたちはさっきの部屋にもどってみた。

怪物はその見た目ほど強くはなかったようだ。一発の爆弾で体を粉々に碎かれ、天井や壁に青い血や寸断された怪物の皮膚がべつとりと付着している。ごろりと床に転がった大きな四つの鉄が滑稽けいな感じもした。

原形をとどめぬ怪物の死骸しがいを乗り越えて、最後の部屋にたどり着く。

床の真ん中にある台座。

その上には、何もなかった。

「あれ？」

奇妙な顔をしたリンクが、台座の後ろや床などを調べている。

「ねえ、トライフォースは？」

ファニーの前で、リンクは肩をすくめてみせた。

「それが……ないんだ」

どうなってるんだろ？

ふたりは静まり返った迷宮の奥底で、しばらく途方にくれてたたずんでいた。

海を渡ってきた塩辛い風にさらされて、グルドの街は暗く沈みこんでいた。

浜に打ち上げられたままの舟や、かわ渴ききった網を干したままの漁師の小屋、そんな殺風景な海沿いの道を、馬にまたがったマイアとインパがやってきた。

旅の一行と別れて半日が過ぎたが、あのリンクの母親をはじめ、みんな無事にランの村に到着しているだろうか。マイアは彼らと一緒に村へ行きたかったが、一刻も早くリンクを捜す必要があった。

街に入ったマイアたちは、かつてリンクたちがそうだったように、閑散とした街の様子に啞然あぜんとし、そして目抜き通りで一軒だけ栄えている酒場を見つけた。

入り口から中に入るや、屈強な男たちの喧噪けんそうがあたりを取り巻いた。

毛むくじやらの腕で酒をあおる者。入れ墨を彫りこんだ腕で腕相撲をとる者たち。

そんな中で、黒髪の少女と白髪の瘦やせ細ほそった老婆らうばという取り合わせは、妙に浮いて見えたことは確かだ。彼らは騒ぐのをやめて、入り口にたたずむふたりの女を見つめた。

「何でえ？ おめえらはよ」

禿頭とくとうの巨漢が立ち上がり、鼻の上に皺しわを寄せながら言った。

だが、マイアは怖じ気づく様子もなく、彼の前に歩み寄った。彼女の耳の先がわずかに尖っているのを見て、男たちが訝しげな顔をした。

「おめえ……ホビットか？」

彼女は答えず、最初に誰何した禿の巨漢の前に立ち止まる。

「私たちは男の子を捜しています。この港町にも立ち寄ったはずですし、しばし黙っていた彼らが、ややあつて大口を開けて笑い始めた。

「おれっちと腕相撲して勝ったら、教えてやってもいいぜ」

ひとりの男がからかい半分に濁声で言う。

と、

「待て——」

男たちの後ろから、ひとりの偉丈夫が進み出てきた。

顔の下半分が髭もじゃで、丸太のように太い腕をしている。へらへらと笑う禿頭の男を脇に押しやるようにしてマイアの前に立ち、彼は少女をじっと見つめた。

「あんた、もしかしてリンクを捜しているのか？」

すると、少女と、その後ろに立つ老婆の表情がぱっと明るくなった。

「あなたは知っているのね？」

マイアが訊くまでもない。

男の名前はグレッグ。つい昨日までリンクと一緒にいたのだから。

マイアたちの素性がわかった途端、屈強な男たちはそろって表情をなごませた。あの少年の知人と知って、ちよっぴり尊敬の目で見る男もいる。驚いたのはマイアだった。まさかリンクが、こんな荒くれどもの尊敬を集めているとは知らなかったのだ。

「なにやらその顔じゃ、早急にあいつに逢わねばならないって感じだな」

グレッグが言ってから、少女の後ろにいる老婆を見た。

「あんたが乳母のインパってわけだ」

「危険を承知で、ひとつ頼まれてくれんかね？」

老婆が言うと、グレッグが肩を揺すりながら呵々大笑した。

「危険だろうが何だろうが、かまわねえよ。この街でリンクの行き先を知ってるのは、おそらくおれだけだろう。つまり、あんたたちを連れてきやいいんだな？」

☆

無数の燭台に蠟燭が燃えている。

窓には大きなステンドグラスが飾られ、ずらりと並ぶ会衆席にさまざまな形をした魔物たちが寄り集まっている。そして祭壇に近い箱型の安置台には、白服をまとった少女が横たえられていた。

祭壇で魔法を詠唱するのは、リユグエル伯爵。

少女は無論、ゼルダ姫である。

伯爵の呪文に会衆席に座る魔物たちが唱和すると、壁際の燭台に点る無数の蠟燭が、いつせいに火を消した。と、少女の横たわるちようどその真上あたりの空間に、ぼんやりとした映像が浮かび上がってきたではないか。

どよめく魔物たちを制して、リユグエル伯爵——いや魔王ガノンが言った。

「今、この姫は意識を飛ばしておる。自分を捜し求める者のところへ——」

映像は荒れ地をゆくリンクの姿である。

その肩の上に小さな妖精がとまり、話し合っていた。

「あれが、伝説に詠われる勇者の生まれ変わりなのだ」

魔王の表情には、憤怒の形相がある。かつて自分を地の底へと追いやった勇者、今こうして映像に現れている少年は、その勇者にあまりにもそっくりだった。まぎれもなく、彼は勇者の生まれ変わりなのだ。

その時、ゼルダ姫がうわごとのように少年の名を呼んだ。

「リンク……」

魔王ガノンの目が光った。

☆

着した。
マイアと乳母^{うは}インパ、そしてグレッグ一行は、二日かけて旅をし、やがて山間^{やまあい}の街カテドルに到着した。

ここからだ、デスマウンテンはすぐ近くに迫っている。それは山脈というよりは、荒々しい岩でできた巨大な壁のように見えた。

カテドルは針葉樹林に囲まれて、ひっそりとした、箱庭のように小さな街だ。人口もさほど多くはないから、街というよりは村に近い。

屈強なグレッグや元気のいいマイアはともかく、老婆^{おっ婆}のインパには長旅はつらかったようで、ふたりはそれを気の毒に思っ、わざわざ予定外の投宿をするためにこの街に立ち寄ったのだった。

乳母^{うは}ひとり^ばを馬に乗せ、マイアたちは歩いて街に入った。

宿屋の裏に馬をつないでいると、マイア自身もずいぶんと疲れていることに気づく。村を焼き討

ちされて以来、休むことなく旅を続けてきたのだ。彼女は早くに両親を失っていたが、自分とリンクを親同様に育ててくれた長老は、あつけなく魔物どもの手にかかって殺されてしまった。その哀しみも、まだ背負ったままなのだ。

だが、マイアにはリンクに逢う^あという目的があった。

それに、ここまで自分たちを送ってくれた、あのグレッグという漁師の存在も頼もしい。だから、彼女は決してみんなの前では涙を見せなかったのだ。

宿屋にもどると、その入り口の手前でグレッグが通行人を捕まえていた。

「リンクって男の子を捜しているんだ。もしかして、この街を通ったかもしれないねえ」
通行人は猟師らしい男だった。弓矢を担^{かつ}ぎ、腰に獲物の鳥を吊るしている。

「リンク？ 聞いたことねえ名前だな。どんな奴だ？」

「ちっぽけで、とんがり帽子を被^{かぶ}っていて、弓矢と剣と盾^{たて}を持っているんだが」
すると、猟師はぼかんと口を開け、往來の反対側を指差した。

「するってえと、あんな格好をした奴か？」

彼らのすぐ目の前、道の向こう側に、その時ちようどリンクが到着したところだった。

「あら」

と、グレッグがつぶやいた。

積もる話に花も咲いた。

宿屋の部屋でリンクはマイアやインパとの再会を喜び、そして別れたばかりのグレッグにまた逢えたことを喜んだ。だがマイアの報告は、それを一転させて彼は暗澹たる気持ちになった。

「おじじが……死んだ……」

口を嚙むリンクを慰めてくれたのは、グレッグの丸太のように太い腕だった。

彼は少年をがっしと抱き締め、頭をこづきながらこう言った。

「元氣出せよ、相棒。勇者のおめえが泣いてちや仕方ねえぞ」

「ぼくは勇者なんかじゃない。おじじひとり助けられない勇者なんて」

「あとひとつ、あなたに話すべきことがあるの」

マイアが言ったので、リンクは涙を拭いて振り返った。

「あたしたち、あなたのお母さんに逢ったわ」

「え?」

リンクはひどく驚いた。

マイアは自分の腕に巻いていたブレスレットを外し、リンクの腕にそっとつけてやった。それは彼女がリンクの母ダイアンから渡されたものだ。そしてリンク自身、それを見たことがある。ロツ

テルベルグの街で出逢った旅の女性。彼女が腕につけていたものだ。

「じゃあ、あの時の女の人が……ぼくの母さん？」

マイアがうなずいた。

「ランの村にいるはずよ。あなたに授ける大事なものがあると言ってた。あなたが来るのを待っているわ」

もちろん、リンクには母親の想い出はない。旅の途中でホビットの村に立ち寄り、そこで死んだ父親の面影すらもほとんど消えかかっている。何しろ、リンクはまだ幼すぎたのだ。それでも、「母さん」という言葉は、彼の胸を強く締めつけた。

「村へゆくがよい、リンク」

インバの声がした。

老婆は椅子に座っていた。

が、ゆっくりと杖をついて立ち上がり、窓の外を指差した。

「じゃが、その前にトライフォースを得なければならぬ。あの森の向こう、ルダ河を遡った場所、廃墟がある。そこにそなたの捜し出すべき四つ目のトライフォースの断片が隠されておるはずじゃ」

太陽は西に傾きかけているのだろう、曇り空のかなたの薄明かりにややかげりがある。その下

に、うつそうと針葉樹を繁しげらせる森があつた。森の真ん中を大きな河が緩ゆるやかに蛇行だこうしながら流れ、遙か向こうまで続いている。

「だけど、三つ目のトライフォースを、ぼくは捜し出せなかつた。これじゃ四つ目をそろえても意味がないよ」

リンクが言つと、インパが首を振る。

「じゃが、ぐずぐずしておると、ガノンが奪うばいにこよつ。トライフォースの断片たりとも、奴に渡すわけにはゆかんのだ」

「そうだね。ぼくが捜しにいかなきゃ」

「おれも手伝おうか？」

肩をたたくグレッグに、リンクは首を振つた。

「大丈夫。君たちはここで待っていてくれ」

「じゃあ、こいつは景気づけだ。持っけ」

グレッグが押しつけたのは、ワインの小瓶こびんだつた。といつても、リンクはまだ未成年なのだ。こんなもの、どうしようというのだらう。

森を貫つらぬく河に沿つて歩くと、風はずいぶんと冷たい。

元来リンクは暑さ寒さには強いほうだが、妖精のファニーはちよいと気温に敏感だった。で、彼女はリンクの背囊の中に入りっぱなしである。

道はしだいに勾配になり、やがて山道となった。

途中で休憩するために背囊や弓矢を降ろし、岸边から河の水をすくって飲む。雪解け水のように冷たい。

「ねえねえ。さっきのマイアって娘。あんたの何なのさ」

背囊から首を出したファニーが訊く。

「幼いころから、一緒に育ってきたんだ。兄妹みたいなもんさ」

答えると、妖精の少女は訝しげな顔をした。

「ふうん」

「なんだよ、妬いてんのか？」

「ばか！」

その時、ぴゅうと音を立てて北風が吹きつけてきた。

「リンクう、寒いよー」

ファニーが背囊に身体を押しこみながら、心細げに言う。

「その袋の中にお酒が入ってるから、一口飲んでみなよ」

グレッグにもらったワインだった。

「あー、ホントにもらってやんの。いけないんだ」

「うるせー」

リンクは立ち上がり、また背囊と弓矢を背負った。

森に挟まれた道を上ってゆくと、やがて谷間に古い建築物がひしめき合うように並んでいる場所に到着した。古い神殿の残骸や崩れかけた石の壁。ここがインパのいう廃墟なのだろう。

瓦礫の間を歩いていると、大昔の祭儀に使われたらしい広場があった。その真ん中に太い石の台がある。リンクが近づくと、不思議なことに彼の腕に巻かれたブレスレットが光を放った。

驚いたリンクが振り返る。

と、重たげな石の台が、横にスライドを始めたではないか。それが止まると、リンクの目の前に地下に降りる入り口があった。このパワーブレスレットは、地下へ降りるための鍵だったのだ。

リンクは期待に胸が躍った。

と、同時に緊張感もある。

石段の下にある闇には、はつきりとした妖気が漂っていたからである。

彼は腰の剣を抜き、片手に蠟燭を持って慎重に一段一段降りてゆく。下まで降りきると、左右に通路があった。リンクはカンを働かせ、左の道を進む。さらに下へ降りる階段を見つけた。

そこを降りきったところは、石壁に囲まれた部屋である。

妖気は一段と濃く漂っていた。

いくつか部屋を抜けると、床に水路のある部屋にやってきた。どうやら行き止まりのようで、他に行く扉はない。爆弾で壁をぶち抜いてみようかと思つた時、ふいに向かい側の壁がゆらゆらと揺れて見えた。

「なんだ……」

緊張するリンクの目の前、突如として壁から巨大な青白い手がぬつと現れ、リンクをつかもつと迫ってきた。こいつはウォールマスターといい、この廃墟にしかけられたトラップの一種である。宝物を盗掘にきた人間を捕まえ、迷宮の外に放り出してしまふ。

「うわ！」

リンクはとつさにその部屋から逃げ出して、扉を勢いよくばたんと閉める。

だが、ウォールマスターはその扉をすり抜けるようにして出現し、音もなくリンクを追ってきた。

「あわわわわわ」

必死に駆け出し、あちこちの部屋を駆けめぐった。

最後に行き着いた場所は古代の祭壇のあつた部屋のようだった。

天井は高く、床は広い。祭壇のまわりには縦横に水路が張りめぐらされ、小さな石橋がかかっている。そこで一匹の魔物が彼を待っていた。

オレンジ色の巨大な球体。その真ん中に不気味なひとつ目が光っている。

戦わずとも、こいつは手ごわいとわかる。迷宮全体がゆがむような妖気は、この化け物が発散しているからであった。

「ファニー！ こいつ、いったい何なんだ？ 弱点を教えてください」

だが、返事がない。リンクは驚いてしよっていた背囊を降ろして、蓋を開いてみる。すると彼女は荷物にもぐりこんだまま、とろんとした目つきでリンクを見上げた。

「あによお？」

「おまえ、本当にワイン飲んじやったのか？」

そう。ファニーは酔っぱらってしまっているのだ。

「あー、瓶半分も飲んじやって、もったいない！」

そんな問題ではない。

球体の怪物が、リンクに向かってぬつと迫ってきた。彼はとっさにマジカルブーメランを腰のベルトから抜き、怪物に向けて投じた。それは狙い違わず球体の真ん中——大きな目に当たったが、怪物は顔を閉じるだけで難なくブーメランをはじき返してしまった。

「くそ。踏んだり蹴ったりだ」

剣を構えて後ずさるリンク。そこへ怪物がさらに迫ってきた。

と、突如床に置きっぱなしの背囊から、七色の光の鱗粉を撒き散らしながらファニーが飛び出した。ふわりふわりと空中を舞いながら、彼女は怪物の真上を回った。

怪物の突進が止まる。巨大なひとつ目がうるさげにファニーを見上げている。

「危ないぞ、ファニー！」

空中に静止したファニーが、とろんとした目でリンクを見、そして怪物を見た。

その彼女の顔が、はっとなる。ようやく事態を察したらしい。

「きゃー、デグドガ！」

それが怪物の名前なのだろう。妖精はあわてて床に落ちている背囊に飛びこみ、その中から笛を取り出した。カジムという仙人にもらったものだ。

「リンクー！ これ吹いてっ！」

羽ばたきながら笛を持ってくるファニーに、彼はむっとなって向き直る。

「ばかあ。こんな時に笛なんか吹いとれるかっ。お前、いい加減に酔いを醒ませよお」

「デグドガは笛の音に弱いのだよ！」

「早くそれを言え、早く！」



受け取りざま、リンクは笛を吹き鳴らした。

すると、どうだ。巨大な球体の怪物は、みるみる縮んでゆくではないか。そして最後には拳ぐらいの大きさになって、こそこそと逃げ出しにかかった。同時に迷宮全体を包みこむ妖気は薄れ、リンクもファニーもすがすがしい気分になった。

のたのたと床を這いずって逃げているデグドガを蹴飛ばし、リンクは祭壇に向かって歩いた。水路にかけられた石橋を渡り、大きな台座に近づくと、その上に木箱が安置してある。

期待に胸を膨らませるように、リンクは木箱の蓋をそつと開いた。

中に入っていたのは、小さな三角錘の石。まごうことなき、〈知恵〉のトライフォースの断片だったのだ。

「やったあ！」

三つ目のトライフォースをつまんで、前に入手したものに近づけると、それは磁石のようにぴちつとくつついた。燦然とした輝きが、リンクたちの顔を照らし出す。

これで三つは回収できた。だけど、あとひとつ。

それは本来あるべき迷宮にもなかったのだ。

どうすればいい？

「おのれ、リンクめ」

リユグエル伯爵はくしやくの姿をとった魔王ガノンが、憎々しげにつぶやいた。

祭壇さいだんの真上に投影された映像の中で、リンクは三つのトライフォースの断片を持っていた。その時になって、ガノンは初めてトライフォースが分割されて、あちこちに隠されていたことを知ったのだった。

「あの乳母うはめが、たわけた奸計かんけいを」

伯爵がさつと手をかざすと、映像が消失した。

ゼルダ姫はまだ眠っていた。リンクの夢を見ているせいか、安らかな寝顔であった。

だが、いずれ少年は四つのトライフォースの断片をそろえるだろう。そうなれば、ガノンにとつての最大の強敵となることは火を見るよりも明らか。

「ガノン様。姫をどうなさいます?」

彼の隣に、黒いフードを被かぶった魔物がやってきた。ムルチと呼ばれた老人である。

魔王はしばらく黙ってゼルダ姫を見下ろしていた。
が、

「北の塔のてっぺんに閉じこめておけ」

言うなり、マントをひるがえして祭壇を去っていった。

☆

カテドルの街にリンクがもどった時、ちょうど陽が落ちた。

宿屋で心配げに待っていたマイアたちは、無事にもどってきたリンクを見て安心した。だが、休んでいる余裕はなかった。リンクはすぐにランの村にゆかねばならない。

そして、折り返し、デスマウンテンの古城へ――。

「あたしの馬を使って」

マイアが宿屋の裏から引いてきた動物に、リンクはびっくりした。

「――これなら早く村に着くわ。その間、あたしたちは三つ目のトライフォースを捜しておく。一

日後にミレの街で落ち合いますよ」

それから彼女は自分が持っていた大事なボウガンをリンクに手渡した。

「これも持って行って。きっと役に立つわ」

「ありがとう。じゃあ、借りるね」

リンクはボウガンをスリングで背中にしよって、鞍くらを乗せた馬にまたがった。

元来運動神経は抜群にいいほうだから、ちよいと走ればこつはつかめる。昔からホビット族はシヤクという名の翼つばさのない大きな鳥を乗用動物にしていた。が、馬はこのシヤクにくらべると何倍も乗りやすいうえに、速そうである。

「はっ！」

声とともにリンクが腹を蹴けると、馬は素晴らしい勢いで走り出した。

「リンク、気をつけて！」

手を振るマイアやグレッグたちの視界から、彼の姿はあつという間に見えなくなった。激しく大地を打つ蹄ひづめの音がやがて聞こえなくなると、マイアは傍かたわらにいるグレッグを見つめた。

「大丈夫さ。奴はすぐにもどってくる」
髭ひげもじやのグレッグが笑った。

丘を越え、谷を渡って、リンクを乗せた馬は走り続けた。

冷たい夜風がぴゅうぴゅうと吹きつけ、小さなファニーは吹き飛ばされないようにリンクの肩に必死につかまっている。

「ねえ、もっとゆっくり走ってよお。これじゃ振り落とされちゃう」

ファニーの声も、リンクはうわの空で聞いている。

母親に逢^あえる、そのことだけが彼の脳裡^{のうり}にあった。

「リンクつてば、何にこにこしてんのよ？」

「うるさいなあ。つべこべ言わずに、しっかりつかまってる！」

リンクははっしと気合いを入れて、馬を飛ばす。

やがて大地の向こうから陽が昇り始めるころ、彼らは山間にひっそりとあるランの村にたどり着いた。

林の間に粗末な家々が点在し、その軒先から朝食のスープの匂^{にお}いが漂っている。

リンクは馬に乗ったまま村に入り、一軒一軒家を見て回った。

すると、いちばん外れ^{はず}にある小さな家の扉^{とびら}が開き、片手に桶^{おけ}を持ったひとりの女が往來の真ん中にある井戸端に歩み寄り、ロープを引いて水を汲み上げ始めた。リンクが近づくと、その馬の蹄^{ひづめ}の音に気づいたのだらう、女がはつと振り返る。

まぎれもなく、リンクがロツテルベルグで出逢^{であ}った、あの女性だった。

彼はそつと馬を降り、手綱^{たづな}を引きながら女性に近づいた。

女の手から、水をいっぱいに入れた桶^{おけ}が滑^{すべ}り落ちた。彼女の目が大きく見開かれる。

「リンク！」

ふたりはお互いに駆け寄り、道の真ん中でひしと抱き合った。

だが、リンクの母親ダイアンは、思い切って息子の身体を離し、その大きな瞳をじっと見つめた。リンクはまだ旅の途中なのだ。そして彼には大きな使命がある。

「母さん？」

不思議な顔をする息子に、彼女はそつと微笑みかける。

「リンク。あなたに渡すものがあるの。ここで待っていなさい」

ダイアンは彼女の家にもどって、そこから細長い矢筒を持ってきた。中には数本の長い矢が束ねられて入っている。

「これは銀の矢よ。先祖代々に伝わる、唯一の破魔の矢。魔王ガノンを倒せるのは、この矢しかないの」

ガノンの名前を聞いて、リンクはようやく我に返った。

母親の手から矢筒を受け取り、銀の矢を一本一本取って、感触を確かめる。

「あなたは、魔を討つもの、の末裔。先祖のように、そして生まれる前のあなたのように、それで思っ存分に戦ってきなさい」

「ありがとう、母さん」

リンクは毅然とした眼差しで言い、矢筒を背中にしよった。

「――ぼくは魔王ガノンを倒して、ここにもどってくる。約束するよ」

「待っているわ。リンク」

母親の声を背にして、少年は馬にまたがった。

その目に微かな涙が浮かぶ。

「じゃあね」

手綱を引いて馬の踵を返し、リンクは手を振った。

「はッ！」

朝靄あさもやを突いて、少年を乗せた馬が走り出した。

その姿が平原のあなたに小さくなるころ、家々から村の人々が姿を現した。

ダイアンのまわりに集まった村人が、彼女とともにリンクの後ろ姿を見送る。中にいる髭ひげの老人

は、どうやら村長のようであった。

「つらいだろうが、しばしの辛抱だ」

老人が言っていると、ダイアンはゆっくりりとうなずいた。

小高い丘を馬で上りきると、ランの村が見下ろせた。

そこにいる母親の姿はもう見えなかったが、リンクはしばらく村の家々を見つめ、そしてまた後

ろ髪を引かれる想いで馬を走らせた。

「リンク、つらいんじゃないの？」

背囊はいのうからファニーが顔を出した。だが、リンクは答えなかった。

「あ、泣いてるう」

「ばか、そんなんじゃないよ」

言いながら馬の速度をさらに上げようとした時だった。

突如として、リンクの脳裡のうりにあるイメージが飛びこんできた。

古城のそびえ立つ尖塔せんとう。眼下に谷川を見下ろすその塔の中に、白いドレス姿の少女が捕らわれている。それはまぎれもなく、アッサムの王女ゼルダ姫であった。

しかし、リンクの意識の中に浮かぶ、不安な気持ちは何だろう？

まさか、姫に危険が訪れているのでは？

つかの間のイメージが脳裡から離れると、リンクはファニーに話しかけた。

「このまま、デスマウンテンに向かうぞ！」

驚いたファニーがリンクの顔を見上げる。

「えー、どうしてえ？ だって、まだトライフォースを全部集めてないじゃないの？」

「時間がないんだ。ぐずぐずしていると、ゼルダ姫の命が危ない。ファニーこそ、そろそろばくと

離れてもいいんだぜ。君には他の妖精たちを助けるという使命があるだろう？」

「ばかね。あたしがいなきや、あなたはまだまだ半人前なのよ」

「なんだよ、偉そつに。後悔したって知らないぞ」

彼は手綱たづなを強く引き、馬を別の方向へ向けた。

はるか地平線のかなたに、魔の山脈デスマウンテンが蒼茫そうぼうと横たわっていた。

PART6

最後の戦い

峻険な山道を馬で登った。

両側にしばらく切り立った崖が続き、それが途切れると今度は広大な平地になった。

氷河が流れたあととわかる、幾筋もの凹凸が岩に刻みこまれている。それはまるで、巨大なドラゴンが爪で引っかいたあとのようなようであった。

風は氷の塊のように冷たく頬を打つ。ファニーは背囊の中にもぐりこんだままだ。妖精の少女は寒さに弱いのである。

荒れ果てた道は左右に蛇行しながら続き、平地を横断すると、再び険しい坂道となった。今度は片側が深い谷底。足元の道は凍りついて滑りやすく、馬の蹄でも足を滑らせそうに思える。転落すれば、もちろん五体満足にはすむまい。

道はさらに急勾配になり、やがてごつごつした岩山の向こうに巨大な城塞の姿が見え始めた。いくつも並んだ尖塔が天を突き、まわりを高い城壁がめぐっている。これも古代の城の遺跡なのだろうか。

峠を越えて道がようやくやく平坦にもどった時、深い谷に渡された吊り橋が見えた。

その橋の真ん中に赤い僧衣を着た白髭の老人が立っている。

リンクはおびえる馬を勇気づけて吊り橋を渡り始めた。ちょうど中間あたりで、老人を前にして馬を止まらせる。

「あんたもハイ仙共組の仙人さん？」

リンクにたずねられて、老人はにんまりと笑った。

「いかにも、カシムとカジムの従兄弟であるガシムじゃ」

そう言つて、彼は後ろ手に背中に隠していた大きな剣を取り出した。

「じいさん、なにするつもりだっ！」

身構えたりリンクに、仙人は困った顔で笑った。

「勘違いするな、少年。これはわしら仙人からの最後のプレゼントじゃ。思えば幾多の艱難辛苦を

乗り越えて、よくぞここまでたどり着いた。その褒美じゃて」

それは燦然と黄金色に輝く、見事な剣だった。

「こいつはマジカルソード。魔力を封じこめた鉄鋼石から創り、ハイラルで一番の刀鍛冶が鍛えたもの。この剣さえ持っておれば、どんな呪文も跳ね返し、どんなに固い装甲も貫く。まさに勇者

の剣というわけじゃ」

「マジカルソードか！」

ガシム老人から剣を受け取りながら、リンクはふと妙な顔をした。

「ときにじいさんたち、ここがガノンの居所だと最初から知ってたな？」

「当たり前じゃ。わしらはこの世のことはすべて見通せる千里眼を持つておる。じゃが、お前にこ

こをいきなり教えても、それなりにレベルを上げない限り、あのガノンには勝てん。それがわかったから、わしらはわざとお前を遠回りさせたのじゃ」

そう。リンクはこの旅を通して、いろんなことを学び、経験し、素晴らしい友達にめぐり会った。それに、誰よりも逢いたかった人にも。

「唯一の心配は、お前さんがライフフォースをそろえておらんということじゃ。あの〈知恵〉のトライフォースを完成させぬまま、魔王に勝てるかな？」

「ぼくは勝ってみせる」

リンクは言い放った。

すると、老人の姿がゆっくりと薄れ始めた。

——よくぞ、言った。では、見事に魔王を打ち倒してみせよ。ほはほはほはほ。

ガシム仙人が完全に消滅してから、リンクはまた馬を進ませた。

ぎしぎしと不気味にきしむ吊り橋をようやく渡りきると、そこに古城の城門がある。古びた巨大な木造りの門であったが、それはリンクを招いているかのようにわずかに開いている。

「待っててくれ、ゼルダ姫」

リンクは唇をかみしめ、馬を走らせた。

城の中庭に入ると、そそり立つ巨大な城壁がまわりを取り囲んでいる。そこで馬を止めて、彼は

ゆっくりと大地に降り立った。ホワイトソードを馬の鞍くらに差しこみ、代わりに仙人にもらった剣を持つ。マジカルソード、それはこの古城が秘めた邪悪な気配に敏感に反応し、まばゆいばかりの光を放っていた。まるで光線剣のようである。

「気をつけろ、ファニー。ここは魔物の巣だぞ」

リンクは城壁のひとつに穿うがたれた入り口を見つけ、そこから城内に入った。

☆

薄暗い部屋の中で、ゼルダ姫は目を覚ました。

何の飾り気もない壁、天井。窓には蜘蛛くもの巣が張られ、埃ほこりだらけのステンドグラスが薄い日差しをかりうじて部屋に招き入れている。

粗末なベッドの上に身を起こし、さっきまで見ていた夢を回想した。

あの少年の夢だった。

リンク……そんな名前だった。

トライフォースをひとつずつ集めながら、彼はゼルダを救うためにここへやってくる。それもすぐ近くまで来ている。彼女はそれを確信していた。

伝説に詠うたわれた勇者があの子少年ならば、魔王ガノンは必ずや倒されるだろう。

そして今度こそ、真の平和が訪れる。

だが、自分は何をすればいいのだろう。このままここに閉じこめられたままでいたら、リンクの前で、魔王の人質にされるだけだ。そうなると、リンクの足を引っ張ることになる。

もう一度、脱出してみよう、とゼルダは思った。それができなければ、自分で自分の命を断とう。部屋を見わたすと、出入口はそこにあった。今度は幻覚でも何でも無い。大きな鉄扉てつびが閉じられている。

ベッドの上から冷たい床に素足を降ろし、扉とびらに歩み寄った。

外から施錠せじようされているのか、扉はびくとも動かない。

となると、残るは窓だけだ。

埃ほこりだらけのステンドグラス。ゼルダは床に置かれた椅子いすを両手で持ち上げ、ガラス窓をたたき壊こわした。派手はでな破壊音とともに、破れ孔あなから突風が吹きこんでくる。

残ったガラスを外に落としてから身を乗り出してみる。

低く垂たれこめた雲の下に、高峰が連なっている。真下を見ると、まるで断崖絶壁だんがいぜつぺきのような光景。

わずかにカーブしながら石を組んで作られた城壁が続き、はるか下に谷川が流れている。

ぱらぱらと落下するガラス片は、その谷川に降り注そそいでいた。

どうやら、城の尖塔せんとうのてっぺんらしい。それもずいぶん高い。

隣には同じような尖塔がふたつあった。それぞれが谷川に面した城壁に沿って造られているため、窓の下がいきなり崖がけとなっているのである。

前に脱出しようとした時はだめだったが、今度こそ——。ゼルダは窓枠わくに片足を置いて、思いきって身を乗り出した。窓のわずか下に、壁の段差がある。かろうじて足を乗せられるほどの幅はあった。

だが、どうすれば下へ降りられるだろうか。

窓枠にしがみついたまま、彼女は左右の壁を見た。左側、石壁の端に太い蔦つたが絡みからみついている。もしもあれが彼女の体重を支えてくれるなら、蔦につかまって下へゆけるかもしれない。

ゼルダは一縷いちろの望みを抱いて、壁づたいにゆっくりと歩き出した。谷底から風が吹き上げるたびに、彼女のドレスが大きく揺れる。

☆

そのころ、グレッグはデスマウンテンに近いミレの街の酒場にいた。

マイアやインパを連れて、最後のトライフォースの断片を捜していたのだが、どうにもこうにも

見つからない。一方、リンクはぷつぷつりと消息を断つたままである。

この街はリンクと落ち合うはずの場所だった。

あれから一日半が過ぎたが、彼はやってこない。マイアたちは本気で心配を始めたが、グレッグはかっかと豪放磊落な笑いを見せる。

「なあに、あいつがそう簡単にくたばるわきゃないさ。今にやってくる」

そうは言ったものの、それが何かに裏打ちされた言葉でないかぎり、グレッグにも一抹の不安はある。リンクがやってくるまで一杯飲んで待つてると勢いよく酒場に繰り出した方がいいが、カウンターについてきつい酒を一口飲んだ途端、別の思惑がむくむくと頭をもたげてきた。

すなわち、リンクはトライフォースを集めきれないまま、デスマウンテンの古城に行ってしまったのではないのか。

思慮は見事に当たっていたわけだが、無論グレッグはそんなことを知るはずもない。

陶器のコップに満たされた強い酒をぐいとあおった時、彼は自分の隣に伏せている男に気づいた。

かつては兵士だったのだろう。腰に剣を差したままだ。

その剣の柄にある紋章に、見覚えがあった。

「おぬし……アッサムの兵ではないのか?」

グレッグが眉根まゆねを寄せてたずねると、兵士がゆっくりと顔を上げた。

しこたま酒をあおったらしく、頬ほおのあたりがほのかに赤い。その男の前のカウンターに、小さな木箱が置いてあった。彼はそのことを忘れていたのだろう、グレッグの視線でようやく自分の目の前の箱に気づき、はっとなってそれをつかんだ。

がたん、と椅子を引いて、グレッグが立ち上がる。

「よもやおぬし、乳母うばどの殿から授かったものを……!!」

逃げよ、うとした兵の肩をぐいとつかみ、彼は恐ろしい力で手元に引き寄せた。

「ゆ、許してくれい。悪気はなかつたんだよ!」

彼は涙目になって、巨漢の漁師を見上げた。

「——こいつを隠すために、魔物のうじゃうじゃいる迷宮なんぞに行きたくなかつたんだ。だから売っぱらおうと思つた。だけど、できなかつたんだ」

カウンターに突つ伏して嗚咽おえうする兵士を、グレッグは無表情に見下ろした。

ちようどそこへ、マイアとインパが入ってきた。

「グレッグ、どうしたの?」

彼のそばに少女が駆け寄る。続いてやってきた乳母が、すすり泣いている兵士を見て驚いた。

「お前は……ラウルじゃないかえ?」

ラウルと呼ばれた兵士は涙に濡れた顔を上げ、乳母の前でひざまずいた。

「私は臆病者でした。これを……このトライフォースを……」

そんな兵士に、乳母インパが微笑みかける。

「もっいいのだよ、ラウル。よく今日まで守っておったな」

インパは兵士から木箱を受け取り、その蓋をそつと開いた。

すると、どうしたことだろう。箱の中に入っていたトライフォースの断片のひとつが、突如とし

てすさまじいばかりの光芒を放ったのだ。

マイアがグレッグの胸に飛びこみ、彼は少女を守るように太い腕で抱き締めた。

兵士も、そして酒場にいた他の客も、みんな驚いて目をふさぐ。

が、乳母インパだけは大きく目を見開いて、その光芒を見つめていた。

光の中に、映像がある。

それは薄暗い通路をひとり歩くリンクの姿であった。

燦然と輝く光の剣を持ち、慎重にあたりを見ながら進んでいる。

「リンクじゃ。デスマウンテンの古城におる！」

インパの目がさらに見開かれた。

その通路のあちこちには、おぞましい魔物たちがひそんでいた。幾百もの邪悪な目が、ひとりの



少年を狙^{ねら}って闇の中に光っている。

「おれがトライフォースを届けてくる！」

グレッグが叫んだ。

「あたしも行くわ！」

マイアが言う^うと、彼は少女のか細い肩を再び抱き締めた。

「おめえは、ここで乳母殿を守っていてくれ。こいつはおれの役目だぜ」

「グレッグ……」

髭^{ひげ}もじやの屈強な男は、乳母の手から木箱を受け取った。そうして心配そうに見つめるマイアに向かつてウインクをする。ふたまわりも年齢の違^{ちが}うふたりだったが、おそらくこのグレッグ、マイアにちよいとばかり気があるのだろう。

「必ず帰ってくる」

そう言い残して、彼は酒場から走り出した。

☆

古城の中は、邪悪な気配に満ちていた。

薄暗い廊下を進むリンクの前後から、それはひしひしと伝わってくる。彼が持つマジカルソードは、その邪気に反応してますます輝きを放つ。敵が襲おそつてこないのは、この魔法の剣の光ゆえだつた。

が、背後からすさまじい瘴しやうき気が放たれ、振り返つたリンクの目の前に十数匹の魔物どもがひしめき合うよう出現した。大きな盾たてと剣を持つ怪物。モリブリンによく似ているが、実はそのモリブリンがさらに成長した強力な怪物である。こいつらが魔城を守る衛兵たちなのであろう。

「タートナックよ。強敵だわ」

背囊はいのうから飛び出したファニーが叫んだ。

だが、駆け出す間もなく、リンクは一度に数匹のタートナックと剣けんを交まじえた。

一匹を素早く斬り捨てたはいいが、すぐに二匹目三匹目が襲いかかってくる。剣と盾、剣と剣がぶつかり合い、派手な火花を散らす。

「ファニー！ こいつの弱点は？」

丁々ちやうちやうはつし発止と剣を結びながら、リンクが訊く。

「ごめん、残念ながら勉強不足！」

「ったく、おれたちや、いい相棒同士だぜ」

たあつと気合いを入れて、二匹目を倒し、リンクはそのまま走り出した。

どかどかと派手に靴音を立てて石段を駆け登り、大きな円柱の並ぶ広間に出た。見覚えのある大理石の廊下。それはゼルダ姫の意識を通して見た光景であった。

通路の向こうは城の中空に張り出した広いバルコニーになっていて、外の見晴らしが利く。自分のいる場所を確認するために、リンクはそこから身を乗り出してみた。

城の敷地は意外にだだっ広い。

大きな尖塔せんとうが三つあり、いちばん北にあるものは、ずいぶんと遠くに見える。塔はそれぞれ、中空に渡された渡り廊下のようなものでつながっていた。

リンクははっとなった。

その北側の塔のてっぺん近く、開きっぱなしの窓の下に、白いものが見えたのだ。

目を凝こらしてよく見ると、それはひとりの少女の姿であった。白いドレスが風に大きくひるがえっている。窓の下の壁の段差を利用して立っているだけなのであろう、実に危あやなっかしい姿勢のまま、少しずつ壁づたいに移動している。

「見つけた！」

リンクが叫んだ時、ファニーが悲鳴を上げた。

タートナックどもが階段を登って姿を現したのだ。

「無駄むだな戦いなんぞできるかっ。ファニー、行くぞ！」

彼は真つ先に突つこんできたタートナツクの剣をマジカルソードで跳ね返し、抜く手も見せずに腰に挟んでいたマジカルブーメランを投じた。

一匹を倒し、それはなおも旋回を続ける。怪物が気を取られているその隙に、リンクは疾風怒濤のごとき勢いで走った。タートナツクたちの間を素早く抜けたリンクが、ちよつどそこへ飛んできたブーメランをはつしとつかむ。

「一昨日逢おうぜ、あばよ！」

陽気な声を飛ばして、リンクは通路を駆け出した。

☆

ほんの数分のことなのに、それはゼルダ姫には数時間も経つたように思えた。

彼女は城壁に張りついたまま少しづつ移動し、ようやく尖塔の端にたどり着いた。そこに太い葛が絡んでいる。

片手を伸ばしてつかんでみた。

葛はしつかりと壁の亀裂に食いこんでいて、ちよつとやそつとでは外れそうもない。

彼女は意を決して、その葛に全体重を預けてぶら下がった。

同時に、谷底から突風が吹き上げてきて、ゼルダの小柄な身体がふわりと舞い上がる。悲鳴をかみ殺しながら彼女は必死に葛にしがみつく。バリバリと嫌いやな音を立てて、葛が壁から外れかかった。

(——！)

思わず目を閉じたゼルダだが、葛は彼女の身体を支えたままだった。

振り子のように揺れていた体がようやく止まると、ゼルダは目を開けて真下を見た。

中空に浮かぶ両足のはるか下を、谷川が流れている。恐怖に身体がすくむが、両手で握った葛だけは絶対に離さない。彼女には人一倍の度胸もある。

(早く下へ——)

ゼルダはなるべく下を見ないようにしながら、ゆっくりと葛を持つ手を動かし始めた。少しずつ……、そう、さっきと同じように焦らずに、彼女は葛を伝って降りてゆく。

尖塔の中ほどまで来ると、隣の尖塔に向かって差し渡された渡り廊下がある。

そのはるか下には崖がけに沿って築かれた城壁が続き、さらに下は谷底にいたる断崖だんがい。

渡り廊下は人ひとりがようやく通れるほどの狭せまさしかない。しかしそこにたどり着くことができれば、ひと休みできるし、城の他の場所にゆける。

そう思った時、突然彼女がつかまっている葛が、またバリバリと嫌な音を立てた。

はつとなつて真上を見ると、壁面に食いこんでいる蔦が少しづつ剥がれている。細い根が壁から引き抜かれるたびに、そこから土煙が立ち、ゼルダの頭上にばらばらと降り注いでくる。

(お願い、何とか耐えて！)

心の中で叫んだが、蔦はついに尖塔のてっぺん近くまで引き剥がされ、ゼルダ姫はそれにつかま
つたまま空中に投げ出された。

落ちる――。

その刹那。彼女は真下に渡り廊下があるのを見た。

思い切つて持つていた蔦を手放し、両手を広げて渡り廊下の手摺にある石材の突起をつかむ。同時に身体が石の手摺に激しくたたきつけられ、その衝撃と苦痛にゼルダ姫は悲鳴を上げた。

軽い脳震盪に意識が朦朧となったが、両手は石材をつかんだまま離さない。

渡り廊下から再び落ちれば、今度は谷底へまっしぐらだ。

骨の一本も折れているだろうが、命をなくすよりはましである。ゼルダは目に涙をにじませながら、虚空にぶら下がりがかけていた自分の身体を渡り廊下に引き上げた。

ようやく廊下に倒れこんで、荒く息をつく。

呼吸をするたびに、肋骨が痛む。

それでも、彼女の試練は始まったばかりだった。

渡り廊下の両端には、それぞれの尖塔に入るための鉄扉てつびがあった。ゼルダは痛む肋骨を押さえながら歩き、まず彼女が降りてきた塔の扉に手をかけてみた。だが、扉は内側から鍵がかかっているのだろう、びくとも動かない。反対側に歩いて、そっちの扉も試してみた。やはり扉は動かかなかった。

ゼルダはふいに絶望におちいった。

ここからどうやって下へ——？

再び壁を伝えるかと、足場を捜してあたりを見わたすが、うまい方法が見つからない。まるで無計画に逃げ出したことを、今さらながらに後悔したが、引き返すことはもうできないのだ。

谷底から吹き上げる風に身体を持ち去られないよう、ゼルダは渡り廊下の手摺てすりにしがみついた。手摺の高さは彼女の腰ほどもない。

「なかなかの冒険ですな、姫」

聞き慣れた声に、ゼルダはぎよつとなつて前を見た。

彼女と同じ渡り廊下の上、数歩ばかり離れた場所に、いつの間にか黒マントのリユグエル伯爵はくしやくが立っていた。

狡猾こつかくそうに目を光らせ、口元をゆがめて笑う顔を見て、ゼルダ姫は寒気立った。

ほんの一時だが、彼を信じようと思つたこともある。

だが、この男はやはり邪悪な魔族だ。

「あなたを助けようと、リンクという少年が城に来ております。われわれとしては宴の席でももつて盛大に歓待をしたいのだが、あちらはどうも気が荒っぽいのか、私の招待を受けようとはしないようでしたな」

「リュグエル伯爵、あなたは何者なの？」

吹き寄せる風に髪を乱しながら、ゼルタ姫が誰何した。

すると、伯爵は肩を揺らしながらくつくと笑う。

「リンクは私の持つこれを奪い返しにきた。ところが、彼は自分が持つべきもう一方のほうをそろえていないようだ」

リュグエルは胸にかけたペンダントを彼女に見せた。

黄金色に輝く三角錘の石。それは妖雲立ちこめ、陰鬱に曇った空の下でも、燦然と光を放つていた。

「〈力〉のトライフォース！　じゃ、あなたが魔王なのね？」

すると彼がまた笑った。

「いかにも、私が魔王ガノン」

突如として雷鳴がとどろき、切り立った山の向こうに稲光が走った。

空が少しずつ暗くなり始め、稲妻いなずまの青白い閃光せんこうに照らされて、魔王の顔かおが不気味ぶきみな陰翳いんえいを深めながら闇に浮き出して見えた。

その時である。

「ゼルダ姫！」

少年の声に彼女がはっとなった。

まだ人間の姿をとっているガノンの背中越しに、渡り廊下の反対側の扉とびらを開いて姿を現した少年がいた。右肩に小さな妖精をとまらせ、緑の服にとんがり帽子といった出立ちいでたち。そして剣と盾を持っている。

彼こそが夢に見た勇者であった。

「リンク！」

ゼルダは少年の名を叫んだ。

すると彼はやあとばかりに陽気に盾を振ってみせる。が、すぐにまた不敵な笑いを浮かべ、黒マントの男をにらみつけた。マジカルソードを足元の床石に突き刺してから、素早く背中せなかの矢筒から銀の矢を抜き取り、マイアにもらったポウガンにつがえた。

「さて、魔王さんよ。いよいよ大団円だな」

ところが、彼の肩の上で、ファニーが言った。



「だめよ、リンク。今のあなたじゃ……」

リンクは白けた顔で彼女を見る。

「つたく、こんな時になんだよ。やってみなきゃわからないだろう？」

ガノンがまたくっくと含み笑いをした。

「お前は私の本当の力を知らぬ。それをたっぷりと見せてやろう」

「たぶん、そんな暇はないね」

リンクが矢を放った。

それは狙い違わず、ガノンの胸の真ん中に深々と突き刺さる。

ところが、次の瞬間、リンクは驚愕に目を開いた。魔王が涼しげな目をしたまま、片手で胸の

矢を握り、それを引き抜いたのだ。

「ほらあ、言わんこっちゃない」

啞然とするリンクの肩の上で、ファニーがため息をついた。

銀の矢はガノンの手の中でふたつにへし折られ、虚空に投げ捨てられた。

「それがお前の奥の手というわけか？ お前の手に〈知恵〉のトライフォースがそろわぬ限り、そんなものは私に通用しないのだ。では、こっちからゆくぞ」

魔王の姿がしだいにゆがみ始めた。

リンクと、そしてゼルダの見ている目の前で、その顔にみるみる剛毛ごうもうが密生し、耳が異様に巨大化した。口が大きな亀裂きれつのように左右に裂けてゆき、そこから牙きばが生えてくる。同時に黒マントが派手はでにひるがえったかと思うと、それが蝙蝠こうもりのそのような真つ黒なふたつの羽に変わった。

リンクは魔王の豹ひょう変へんに驚きながらも、ボウガンのスリングで背中にかけて、切っ先を床石に突き立てていたマジカルソードを引き抜いて構えた。

「上等じゃないか。勝負だ、ガノン！」

正体を現したガノンの姿が、突如ゆらめいたかと思うと、次の瞬間、忽然こつぜんと目の前から消滅した。慌あわてるリンクが目を擦こすった時、

「うしろよ！」

ファニーの声が出た。

振り向いたリンクの目の前に、ガノンが立っていた。

そのかつと開かれた口から、炎の球がいくつも飛び出す。

「うわ！ そんな、きったねぞ！」

それをかわした途端とたん、リンクは体のバランスを崩し、背中から手摺てすりにぶち当たった。そしてそのまま渡り廊下の手摺を乗り越えて、巨大な顎あごのような断崖絶壁だんがいぜつぺきに挟はさまれた谷底に向かつて、まっしぐらに落下し始めた。

「うわああああああ——！」

空中で木の葉のように錐揉み状態になりながらも、リンクは片手に持ったままのマジカルソードをふるった。それは尖塔の石壁にがつきと突き刺さった。おかげで落下は止まったが、彼は空中でくるりと反転してその壁にたたきつけられ、反動でまた空中に投げ出されそうになった。

「むぐっ！」

片手を離れた盾が、ひらひらと舞いながら、はるか谷底に向かって落下していった。

リンクは尖塔の中腹の壁に突き立てた剣につかまり、風に揺れながらぶら下がっていた。上を見上げると、渡り廊下の下面が真上にあり、そこからガノンが彼を見下ろしながら高らかに笑っていた。

「うはははは。しぶとい奴だ。だが、万策ばんさくつきたお前には、もはや何もできぬ」

七色の鱗粉りんぷんを撒まきながら飛んできたファニーが、剣にぶらさがるリンクの近くにやってきた。

「リンク、しっかりして！」

彼は傷だらけの顔で、宙を舞う妖精を見た。

「ちくしよ、お前みたいに羽があったらなあ……」

剣の柄つかを握る手から、わずかずつ力が抜けていた。ずるずると指すべが滑っている。

「今、命の水を飲ませてあげるからね。これを飲んだら百人力よ」

ファニーがリンクの背中の雑囊ざつのうから、水筒を引つ張り出そうとした。ところが、焦あせったばかりに勢いあまって水筒が飛び出し、そのまま谷底に向かって落下していった。

「うそお」

ぽうぜん
呆然とそれを見下ろしながら、ファニーが両手で口をふさぐ。

「ドジ……」

満身創痍まんしんそういのリンクがつぶやいた。その右手が、さらにずるずると滑っている。

彼の体を支える唯一ゆいいつの右手が。

一方、渡り廊下の上に立ちすくむゼルダ姫は、自分に向かって近づいてくる魔王ガノンの邪悪な姿を見つめていた。

「もうすぐ奴は力つきて谷に落ちる。わしはあとでゆっくりと、へ知恵のトライフォースを谷底に捜しにいくとしよう。だが、その前にひとつやる必要がある」

魔王が巨大な口をくわつと開いた。

「——さあ、姫。今度はお前の番だ。焼き殺してやろうか？ それとも、リンクの後を追って、谷底に落ちるほうがいいかな？」

後ずさるゼルダが、どしんと背中を鉄扉てつびにぶつけた。痛む肋骨ろっこつを押さえながら。

リンクがつかまっている尖塔とは反対側のほうだ。

「後がないぞ、ゼルダ姫。どうするかね？」

魔王ガノンは巨大な顎を開き、無数に並んだ鋭い牙の間から真つ赤な舌をちらちらと出してみせた。口のまわりに陽炎が揺らめいていた。

その瞬間、ゼルダは死を覚悟した。

魔王の手にかかるなら、自ら死を選ぼう。

手摺越しに谷底を見下ろした。風が吹き上げてきた。

柄を握るリンクの指が、一本離れた。

そして、また一本。

リンクは目を閉じた。もうもたない。おしまいだ。

その時、幻影が見えた。

空中に揺れる両足のはるか下、崖に沿って続く城壁の上に仁王立ちする男の姿である。

それは髭もじゃで、熊のように大きな男。

「グレッグ——！」

リンクの口をついて、彼の名前が飛び出した。

すると、下にいるグレッグは片手を口に当てて、大声でこう叫んだ。

「おういつ、リンクよ！ そんなところで何遊んでんだ？ 早いところ、魔王とやらをやっつけちまえよ！」

大きく振りかぶってモーション、右手に持った何かを、真上に向けて投げた。

それは引力に逆らい、素晴らしい勢いでぐんぐんとリンクめがけて上昇してきた。

風の中にきらりと光る黄金の輝き。

トライフォースの最後の断片。

リンクが剣をつかんだままも、一方の手を延ばし、それを確実にキャッチした。

同時に気を利かせたファニーが、背囊はいのうの中から今までそろえていたトライフォースを引っ張り出す。

「リンク、これに——！」

ファニーが羽ばたいて飛び、リンクの右手にある三角錘さんかくすいの石にそれを合体させた。

すると、それは彼の手の中で閃光せんこうを放ち、まるで太陽のようにあたりに燦然さんぜんたる光芒こうぼうを放った。

その光ははるかかなたの山々まで届き、デスマウンテンの切り立った山峰が、これに呼応するよう
に七色の光を空に向けて放射する。

魔王ガノンが、そしてゼルダ姫が眼下を見下ろした。

城塞の尖塔の中腹、リンクがぶらさがっているあたりに、まるで小型の太陽のような輝きがある。その光芒に目を射抜かれて、ガノンが両手で顔を覆ってうめいた。

「な、何事だあ！」

眩しさをこらえて、渡り廊下の手摺から身を乗り出したガノンが、そこでまたしても驚愕の声を上げた。半死半生で壁に突き立てた剣にぶら下がっていたリンク。その右手の中で、あのトライフォースが——〈知恵〉のトライフォースが輝いている。

光を受けた途端、リンクの体に見るみる力が湧き出してきた。

トライフォースを服のポケットに入れると、背中にかけてたままのマイアのボウガンと銀の矢を一本片手で抜き取った。歯でくわえて引き絞った弦をロックするや、銀の矢を矢溝につがえる。

そして片手でボウガンを構えて、頭上の渡り廊下にいる魔王に向けた。

その時になって、魔王はようやく自分に迫った危険を察した。

だが、すべては遅かった。

リンクが引き金を絞った。

ひょうと空を切って飛んだ銀の矢が、恐怖に目を見開く魔王ガノンの額の真ん中に突き刺さる。衝撃でガノンは大きくのけぞり、その拍子にペンダントのように首からぶら下げていた〈力〉の

トライフォースがすつ飛んで、ゼルダ姫の足元に転がり落ちた。

魔王ガノンは、リンクと同じように背中から手摺を越えて空中に投げ出されていた。

絶叫が長く尾を引き、谷間に響いた。

落下の途中で、魔王は息絶えたようだった。その体がまるで砂でできていたように散り散りになり、風に散ってゆくのを、リンクたちは見た。

「大丈夫ですか？」

手摺から身を乗り出したゼルダが、まだ壁に取り付いている彼に声をかける。

ビッグ・ヒットを決めたにしてはちと不格好だが、それでもリンクは傷だらけの顔で頭上の姫君に向かってとっておきの笑顔で応えたのだった。

やがて尖塔の長い石段を苦勞して登ってきたグレッグが、渡り廊下から長いロープを垂らしてくれて、リンクはそれにつかまった。ふたりがかりで引き上げられ、リンクはゼルダとグレッグと一緒にになってその場にへたりこみ、せいぜいと肩を揺らす。

「初めまして、ぼくがリンク」

「プリンセス・ゼルダです」

少年と少女が立ち上がって握手をかわし、髭の大男がそれを見てかつかと笑った。

「おれはグレッグ。この英雄の一番の相棒さ」

最後に名乗ったファニーが、ややむくれた顔でリンクの肩にとまる。

「でも、一番の相棒はあたしでしょ?」

そうして四人で笑い合った。

すると、さっきまで頭上を覆っていた雲がみるみる四方に散り始め、目も醒めるような真つ青な空の二画に日差しが輝き出した。雲は古城や山肌にその影を落としながら、どんどんと流れていく。

「きれい……」

ゼルタ姫が呆然とつぶやいて眺望絶佳の景色を見わたした。

ハイラル地方に、何日ぶりの晴天と、そして平和がようやくやく訪れたのだ。

EPILOGUE

エピローグ

『こうして、伝説の勇者にまつわるひとつの話は終わる。

リンクはふたつのトライフォースを持って、大切な友達、そして大切な姫君とともに山を降り、彼らの帰りを待ちわびる多くの者たちに再会した。

ハイラルの多くの人々はそれぞれの家々の外に走り出し、澄み切った青い空を眩しげに見上げて笑い、そして涙した。戦乱の世にこそ、真の平和の尊さはわかる。

ゼルダ姫はアッサムの街にもどり、城と街の再建を始めた。

復興には長い歳月と大きな労力がかかろう。じゃが、それはハイラルを闇に閉ざしておった苦難の日々にくらべればどうということはない。

やがてゼルダはアッサムの王位を継ぐ。

〈知恵〉と〈力〉のふたつのトライフォースが、彼女の王としての印となるじゃろう。

無論、女王となるにはその夫たる者が必要じゃが、果たしてゼルダ姫の意中の人がそれを受け入れてくれるか。おそらくは国民の最大の関心となろう。

何しろリンクは自由奔放に育った少年じゃ。

森に生きる民を束縛する術はない。

じゃから、リンクには次なる冒険の旅があるやもしれん。

もしもそつだとしたら、わしはその冒険をまたひとつの伝説として、こうしてのちの世に伝える

だけじゃ。

それがわしの務めなのじゃから——』

巨大な円柱が林立する地下の大神殿。

かつてはアッサムの代々の王が詣でに来たという場所だ。

その一画に、黒服の僧侶が立っていた。光を失いかけた双眸と、わずかな笑みをたたえた口元。枯れ木のような皺だらけの手は、目の前にある壁に当てられている。

彼の前の壁には、勇者を物語った巨大なタペストリーが飾られている。

確かりンクがここに来た時、絵物語のタペストリーはひとつしかなかったはずだ。それが今はふたつになっていた。

千年の昔、勇者の活躍を描いたもの。そして、その生まれ変わりである勇者リンクの、生い立ちから今にいたる半生を描いたもの。だが、壁はまだまだ広く、余裕がある。この先リンクが、はたまた他の勇者が現れ、新たな冒険が始まっても、彼らの伝説を書き記すスペースには事欠かないのだ。

僧侶は満足そうにそれらを見上げていたが、やがて薄暗い神殿の闇に溶けこむように、ひっそり

とその場を立ち去っていった。

おわり

思い起こせば、今から約五年前。

某双葉社からはじめてゲームブックの仕事をいただいたのが、TVアニメ某『ルパン三世』のシリーズ第四巻。そして、その次に書いたゲームブックが『ゼルダの伝説』でした。

あの頃は右も左も分からない素人で（今もそれに毛が生えた程度ですが）、ましてやファミコンなんて触ったこともなく、あまつさえファンタジーなんてまるで読んだことがなかったほうが、けなしの知識とアイデアでひねり出したのが、『ゼルダ』『ドラクエ』と続くパロディ・ゲームブックなのでした。

なんだか最近はそのゲームブックの主流になったみたいですけど、当時は『火吹き山の何とかな』だのといったクソマジメなものばかりだったから、随分と珍しい作品だったわけです。造反有理だ、わははのは。

ま、今にしてみればあのゲームブック、恥ずかしげもなく『モンティ・パイソン』やらへとんね

るず) やらのギャグを真似たりと、好き放題のことやって、さらに『ドラクエ』なんかに至ってはステイヴン・キング (『IT』読んでね!) を知ってる人間じゃないと分からないようなパロディやったりして、よく業界からつまみ出されなかつたなあと思っっています。

しかしすごいよね。オリジナルのゲーム人気とはいえ、このゲームブック、随分と売れ行きが伸びたんだもの。

おそらく本書——小説『ゼルダの伝説』は、その人気の延長線にあるものなんだろうと思いません。だから執筆中は、当時のことをいろいろと思い起こしながら書きました。

リンクと一緒にファニーって名前の小さな妖精を旅させようって考えたのは、昔のゲームブック版『ゼルダの伝説』のアイデアです。その一方で、今回はあくまでも真面目な(中にはそうじゃない部分もあるが)、冒険を通してひとりの少年が成長していく物語にしました。

多くの手元に送られてくる読者のみなさんからのお手紙には、ちよくちよくリンクのかっこいいイラストが描かれていました。どれもなんて言うか、はつらつとした元気よさそうな男の子の絵ばかりだったもんね。

あの頃、高校生だった読者のみなさんは、今や社会人。しかし早いよなあ。

さて、表紙のイラストはかの有名な藤原カムイさん。

昔の『チョコレート・パニック』から、最近の『犬狼伝説』あたりまで、ぼくも拝読しています。つまり大ファンだったります。だから、カムイさんの絵でこの本の表紙を飾っていただくと知って、いやはや胸がときめきました。

それから、本文の素晴らしいイラストを描いて下さったのは伊藤伸平[Ⓐ]さん。『ルパン』のゲームブック以来、久しぶりにコンビを組むことになりました。こちらもしっかりと注目して下さいね。

双葉社CTRのみなさま。とりわけ、池永昌靖さん。スタジオ・ハードの松本耕三さん。何度も足を運んで下さいまして、ご苦労さまでした。にもかかわらず、こちらはまたまた締め切りに遅れてしまい、ご迷惑をおかけしました。机に手をつけて、反省！ いやいや、阿佐ヶ谷駅前のロッテリア2Fの窓ガラスをぶち破って、投身したい心境でございます——。

と、ほんの冗談ね。

こちらら年内にまだ一本、某羽場由香理の DIE-HARD 娘シリーズ四作目を書かにならぬ身重な(?)体なので。忙しいなあ……(本あとがきの執筆日は後述参照のこと)。

末筆ではありますが、昔なつかしのゲームブック時代からずいとおつきあい下さった読者のみなさま。ご最前にして下さいまして、ありがとうございます。それから『ゼル伝』の小説はまだか」と、毎度お便りを下さった。ファンの方々、おまちどうさまでした。楽しんでいただけたい

ようか？

では、次回作で、また。

一九九一年 十一月二十日

樋口明雄

Copyright © 1992 Akio Higuchi

© 1992 Futabasha

© 1986 Nintendo

●ファミリーコンピュータ・ファミコンは任天堂の商標です

小説 **ゼルダの伝説**

黒き影の伯爵

双葉社ファンタジーノベルシリーズ

著者……………樋口明雄

発行者…………井上功夫

発行所…………株式会社双葉社

〒162 東京都新宿区東五軒町3番28号

TEL 東京(5261)4818(営業)

東京(5261)4837(編集)

振替 東京8-117299

印刷……………慶昌堂印刷株式会社

製本所…………株式会社若林製本工場

落丁・乱丁は本社にてお取り替えいたします

定価・発行日はカバーに表示してあります。

ISBN4-575-23096-0 C0093

FUTABASHA FANTASY NOVEL SERIES

LEGEND OF ZELDA

[THE HYRULE FANTASY]

High on one thousand years ago, a fearless warrior bearing a sword of light destroyed the Prince of Darkness, bringing peace to the people of the Hyrule regions.

It is from this very point that our story takes its beginnings.

Our tale is that of a young boy who was raised among a tribe of Hobbits. Link was the name of the child and it is he who is the hero of this new tale.

FUTABASHA FANTASY NOVEL SERIES
小説【ゼルダの伝説】黒き影の伯爵

樋口明雄

双葉社

【双葉社】

FUTABASHA FANTASY NOVEL SERIES

【小説】

High on one thousand years ago, a fearless warrior bearing a sword of light destroyed the Prince of Darkness, bringing peace to the people of the Hyrule regions. It is from this very point that our story takes its beginnings.

ゼルダの伝説

Our tale is that of a young boy who was raised among a tribe of Hobbits. Link was the name of the child and it is he who is the hero of this new tale.

【黒き影の伯爵】

AUTHOR AKIO HIGUCHI
樋口明雄



カバー・イラスト▶藤原カムイ
カバー・デザイン▶広井一夫[NEXT]

【小説】

ゼルダの伝説

【黒き影の伯爵】

樋口明雄

【双葉社】

ISBN4-575-23096-0 C0093 P1000E

FUTABASHA FANTASY NOVEL SERIES

LEGEND OF ZELDA

【THE HYRULE FANTASY】

High on one thousand years ago, a fearless warrior bearing a sword of light destroyed the Prince of Darkness, bringing peace to the people of the Hyrule regions.

It is from this very point that our story takes its beginnings.

Our tale is that of a young boy who was raised among a tribe of Hobbits. Link was the name of the child and it is he who is the hero of this new tale.

【小説】

ゼルダの伝説

【黒き影の伯爵】

©1986 Nintendo
ファミリーコンピュータ・ファミコンは任天堂の商標です

【双葉社】定価1,000円(本体971円)

PROFILE



樋口明雄

AKIO HIGUCHI

1960年、山口県岩国市生まれ。明治学院大学法学部卒。雑誌記者を経て、ゲームブック、少女小説などの仕事で作家の道へ入る。ちなみに作家活動に入ってまもなくの仕事が『ゼルダの伝説』のゲームブックだったという。主な著書に『ハイスクール重機動作戦』(富士見書房)をはじめとするDIE-HARD娘・羽場由香理シリーズや『サイレント・ファイア1〜4』(創文社)などがある。

【小説】

ゼルダの伝説

【黒き影の伯爵】

定価1,000円

1992年2月5日第1刷発行

著者 樋口明雄

発行者 井上功夫

発行所 株式会社双葉社

〒162 東京都新宿区東五軒町3番28号